

---

# ～ 吉良吉影は静かに生き延びたい～

どくたあ ちょこら～た

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

〜吉良吉影は静かに生き延びたい〜

### 【Nコード】

N6146Y

### 【作者名】

どくたあ ちょこら〜た

### 【あらすじ】

これは『【呪い】を解く』物語

自覚症状無く進行してゆく病のように杜王町を蝕んでいた、一人の男。彼の名は【吉良吉影】 二度殺された筈の彼が目を覚ましたのは、彼岸花の咲き誇る異様な墓地だった。その場所の名は【無縁塚】、実体と幻想、幽世が交わる異常な空間。そこで突如【謎の少女】の襲撃を受け、彼は否応なしに【幻想郷】へと迷い込んでゆく。

【忘れられて生きる】ことを望む彼に【運命】が下した罰、それは【忘れられた者達の世界】で生き、暴かれ、晒され、殺されることであつた。

【裁きの地】で彼を待つものは、【救い】か、【報い】か。

ジヨジヨの奇妙な東方Project避難所【<http://jbs-livedoor.jp/otaku/11393/>】より  
転載。

## 第一話 外の世界から来た殺人鬼（前書き）

初めまして、どくたあ ちよこらくと申します。

ジョジョの奇妙な東方Project避難所【<http://jbs.livedoor.jp/otaku/11393/>】にて、キラ ヨシカゲの名前で活動しております。

完結間近の連載小説をこちらに転載することにいたしました。  
稚拙な文章力ですが、読んでアドバイスをいただけると幸いです。

### 注意

・「東方project」「ジョジョの奇妙な冒険」の二次創作作品です。

・自己設定、自己解釈、ご都合主義、キャラ崩壊、原作に登場しない能力の成長、グロテスクな表現、暴力シーンを多量に含んでおります。

## 第一話 外の世界から来た殺人鬼

「吉良吉影は静かに生き延びたい」

### 第一話 外の世界から来た殺人鬼

彼は、目を覚ました。

「ここは……………」？

彼はゆっくりと体を起こし、辺りを見回す。見渡す限り真っ暗闇で、暫く何も見えなかった。やがて暗闇に目が慣れ、周りの景色が朧気ながら見えるようになる。

そこはうつそうとした夜の森にぽっかりとあいた、

彼岸花が咲き乱れる広場だった。

空を見上げたが、新月だからだろう、全く明かりのない暗黒のプロネタリウムが目に入るだけだった。

「なんだ……………」

どうしてわたしはこんなところにいる……………？ここは……………何処なんだ……………？わたしは……………」

彼は地面に座ったまま、どうして自分はこんなところに倒れていたのか記憶を辿る。

「……………確か……………私は【バイツアダスト】を発動させようとした……………だが広瀬康一のクソガキに阻止され……………承太郎に時を止められて……………その後は……………」

迫るタイヤ

犬に喰い千切られ

た左手

無数の手

引き裂かれる体

さあ……………でも……………「安心」なんてない所よ……………少なく

とも……………

「うああああああアアアアアアア  
全てを思い出し、男  
吉良吉影は、絶叫した。

「!」

「(そうだ…私は死んで……………!)」  
汗がダラダラと噴き出し、息が荒くなる。

ドグン ドグン

一度はその鼓動を停止した心臓が恐怖に縮み激しく脈をうつ。

「(ッ!?)」

再び辺りを見回すと、さっきは気付かなかった光景がはつきりと目に飛び込んで来た。

そそりたつ卒塔婆

墓石代わりに積まれた石

散らばった人骨

辺りに満ちる【死の気配】と、撒き散らされた鮮血のように紅い華が、彼に否応なしに  
【死後の世界】というものがあるなら  
【安心】なんてない、【最悪の世界】を連想させる。

「ハア

ハア ッ ハア

ハッ 「

(ば……………馬鹿な……………ッ!?まさか、まさかッ!?)

ここが【地獄】だと言っのかッ!」

彼は胸を押し潰す不安を押さえつけ、自分を裁く【鬼】が現れるの

を迎え撃つため神経を張り詰める。

「（そういえば【スタンド】は使えるのだろうか？）」「  
彼は祈るような気持ちで、自身の精神の片割れの名を呼んだ。

「【キラークイーン】！！」

彼の心に応えるように、それは隣に出現した。

猫とドクロを足して2で割ったような凶悪な顔、筋骨隆々の四肢、  
そして全身のドクロマーク。

彼の【スタンド】、【キラークイーン】だ。

「よし、【キラークイーン】は問題なく使えるな

……………」

吉影はホッと安堵の溜め息を吐く。

ともかく、これで多少の危機には対応できる。

吉影の心に【安心】が染み渡っていき、同時に幾分か冷静さが戻っ  
てくる。

「（ここで座り込んでいたって仕方ない。

地獄に森があるかは知らないが、どうも肉体は実体があるようだ。

それに、落ち着いて考えてみれば地獄に卒塔婆や墓なんてのも妙な  
話……

もしかしたらここは【地獄】ではなく、【この世】のどこかなのか  
も知れない。

それなら早くこんな場所抜け出して、人の営みのある場所に向かう  
べきだろう。）」

吉影は立ち上がり、辺りを見回そうとした時、

「うおっ！！」

吉影の目の前に、突然1人の人影が現れた。

「（なんだ、子供か……）」

彼の前には、一人の少女が立っていた。

ほっと息をはく吉影。

その少女はどうみても日本人には見えなかった。

森の闇に映える金髪、赤い目、白い肌、欧米人の風貌である。



「（どういうことだ……？こいつのこの【風貌】……  
まさかわたしは日本から遠く離れた国まで飛ばされたというのか…  
…！？一応英語は話せるが、この娘に通じるだろうか……？）」

吉良吉影は、このとき、冷静さを若干喪失していた。

死後起床したばかりなのもあつただろう、が、何より自分の置かれた状況の把握に気を取られ過ぎていたのだ。

そう、彼は疑問に思う事はなかった。

『なぜこんな暗い夜の森の奥に、こんな少女が一人でいるのか』

さて、吉影はとりあえずその少女の様子を伺うことにした。  
少女はまじまじとこちらを観察するように、現れてからずっと好奇の目で見ている。

「（何から話そう…取り敢えずは適当な挨拶を交わし、会話が通じるなら自宅まで案内してもらおうとするか。

ここが何処なのかその後訊けばいい…）」

吉影が口を開こうとした時、

「ねえ、あなた………」

少女が口を開いた。

「（？」

こいつ……今なんと言った？日本語か？

聞き違いかもしれないが、一度日本語で話し掛けてみるか。」

吉影は【いつも通りの】柔らかい物腰で、少女に話し掛けようとした。

「あの、すまないが」

その刹那

！

「

「あなたは食べていい人類？」

少女がニイッと不気味に笑った。

ドドドドドドドドドド!!!

「 なア…ッ!？」

瞬時にキラークイーンを構え、少女が放った光弾を弾く。

「うおおおおおおおおお!?」

あまりに突然、かつ大量の光弾だったために、防ぎきれず、何発かが吉影に命中した。派手にブツ飛ばされ、樹に背中をしたたか打ちつけた。

「ガフツ…!」

地面に膝をつき、傷を抑える。肉が抉れていた。

「(いつ…今のは何だ……?)」

危なかった…! 全弾受けていたら即死だった…!!(…!）」

常人なら今の数発でもしぬかもしれないが、彼はすぐに立ち上がり、構える。

「(何なんだこのガキは!?)」

キラークイーンを見ていない様子からしてスタンド使いではないようだ…

少なくとも、それに準ずる【超越した何か】を身に着けていることは間違いない…(…!）」

そいつは吉影をさらに好奇心をこめた目で見ていたが、やがて口を開く。

「ねえ、今何をしたの? 私の弾幕を弾いたように見えたけど。」

「(………やはりこいつには【キラークイーン】は見えていないらしい。」

このクソガキが何者かはまだ分からないが……ならばいくらか私のほうが有利!」

「おい、お前。さっき私に食べてもいい人類かと訊いたが、君は人間ではないのか?」

「ああ、あなた私のことを知らないの? もしかしてあなた外の人

間？」

少女はあどけない表情で彼に質問した。

「……………」

吉影は無言でポケットから何かを取り出すと、少女に向かって投げつけた。

少女はそれを手でキャッチし、

「何これ？甘そう匂い……」

なんだかとても美味しそう」

それ チューインガムを口に入れた。

「うーん、甘い」

ガムを噛みながら、少女は幸せそうに笑う。

「言っとくけど、これの代わりに見逃してくれなんて、聞くつもりはないよ？」

これを食べたらずぐにでも……………」

「……………」 質問に……………」

「？」

「質問で返すなアアアッ！！」

カチッ

吉影は【キラークイーン】のスイッチを押した。

ドゴオオオオオオオ！

「きゃああああああ……………！！」

少女が断末魔の叫びを上げた。

強烈な衝撃が彼女を内側から襲う。

少女はバタリと倒れ、動かなくなった。

「【キラークイーン第一の爆弾】……………お前の脳ミソは3分の1ほど顔面とシェイクされた。」

吉影は倒れている少女を冷徹に見下ろし、呟いた。

「（ スタンド使いではない、それは言える。」

だが、あの【光の弾】は何だ？それにこいつは、自分は『人間ではない』かのような言動をした。

『食べてもいい人類』……『外の人間』……

「一体こいつは何でここはどこなんだ……?」

「（　　）　　考えても仕方ない……　　とりあえずは【今最優先すべきこと】をしよう……」

彼は少女の死体に歩み寄り、見下ろす。

「　　フフフ……、しばらく出来なかったが、ここにあるのクソツタレ仗助がいないことは確実……」

「今なら安心して【彼女】を連れて歩くことができるぞ!」

【キラークイーン】の腕が振り上げられる。

「さあ……」

私の下に來い!!手首だけなッ!!」

【キラークイーン】の手刀が、振り下ろされた!!

メキメキという音が静けさを破壊し、飛び散る鮮血が森の闇を塗り替える!!

「　　な……ッ……」

吉影が、絶句した。

「何だとオ……ッ?!」

吉影の顔が苦痛に歪む。

「そんな馬鹿な!?!」

少女の手が、吉影の足を握り潰していた。

「ぐおおおおおお!?!」　　足が悲鳴をあげる。

今にもちぎれそうだ。

「捕まえた」

少女が顔を上げ、吉影の顔を見上げた。

その顔には傷も内側から力を加えられた跡も残っておらず、目は爛々と喜びに輝いていた。

もつとも、その輝きは子供の無邪気な笑顔とは程遠い、悪事が成功した時の邪悪な喜びからくるものだったが。

「（確かに効いたはずだ！脳をシェイクされてもこれほど元気など、たとえ人間でなくてもあり得ん！）」

「えへへへさつきのはちよつと驚いたよ。」

でもこれで…逃げられなくなったね！」

「ぐああああああ！！」

少女の手に力が加わる。足の肉は裂け、骨もヒビがはいってきている。

「（マ、マズイ！このままだと足を持って行かれる！！）」

「【キラークイーン】ッ！！」

スタンドの脚で少女の顔面を全力で蹴り飛ばした。

「きゃあっ…！！」

少女は吹き飛び、木に打ちつけられてずるずると倒れた。

「ハア…ッハア…！！」

吉影は足の具合を確かめる。

「（クソッ！なんて馬鹿力だ…この足ではとても逃げられん…！！）」

吉影は舌打ちし、少女を睨み付ける。

「やっぱりあなた、普通の人間じゃあないね。念力のような力なのか？」

少女は先程と同じように平然と起き上がった。さすがに今回は頭から大量出血しているが。

「（畜生め…！！何故あれほどの傷を受けて立っていられるんだ！？）」

腹に大穴があいている彼も大概だが、吉影は少女の頑強さに胸の内です毒吐く。

「さつきは不意打ちでやられたけど、今度こそ晩ごはんのメインデイスシユにしてあげる！」

吉影は直感した、何かがくる！！

「【キラークイーン】ッ！！」

彼のスタンドに防御の構えをさせる。

「ブラックアウト!!」

少女が声を張り上げた次の瞬間、少女の体がどす黒い霧に包まれ、霧は瞬く間に吉影を飲み込んだ。

「(な、なんだこれはッ!?)」

吉影の視界は墨で塗り潰されたように黒一色に染まった。

「(まずい、これでは防御が…!)」

ドドドドドドドド!

「ぐおおおおお!?!」

キラークイーンの手を抜けて、十発近くの光弾が吉影の体を抉る。

「あぐああアアアアア

ッ!」

暗黒の視界の中、衝撃で吉影の身体は宙を舞った。

突如視界に光が差し周囲の光景が見えるようになった。

彼はさつき立っていた場所から吹き飛ばされ、木の生えていない明るい場所に倒れていた。

「あ〜っ、どうやら当たったみたい〜」

少女は空に浮かび、こちらに近寄ってくる。

「(こいつ…命中したことが分かっていない…?)

つまりこいつも見えなかったのか?

ということはいいつの能力は……『【闇】をあやつる能力』か!!)」

しかし分かっててもどうしようもない。熱源を追尾する【シアーハートアタック】なら通用するかもしれないが、光弾が直撃して暴発する可能性が高く使えない。

「さあ…次でトドメだよッ!」

少女の体が再び霧に包まれる。闇が彼を呑み込もうと迫りくる。

「(こ…ここまでなのか……?わたしは……)」

せつかく生き残ったというのに……!またわたしは死ぬのか……!?

このガキに喰われて…!?)」

彼は、空を見上げた。

月の無い漆黒の夜空は、彼の心情を反映するようにその暗黒なつぺりとした面を向け見下ろしていた。

「(この【新月の夜空】のように……! 【暗闇の絶望】の中死ぬというのか……ッ!一度ならず二度も……)」

その時、吉良吉影の脳内に最悪の情景が浮かんだ。

河川で

下水道で

解剖室で

広場で

街道で

この地上のありとあらゆる場所で残酷に死に続ける自分の姿を。

「(まさか……これが【小道の力】だというのか……?永遠にこのわたしを【死】という地獄に捕え続け……【無間地獄】を味わわせようというのか……ッ?)」

【希望】なんてどこにも見えない……【地獄の底の底】に、わたしを閉じ込めるつもりか……?

そんな…そんな馬鹿なア…ッ!!)」

彼は、無意識に爪を噛んでいた。絶望、その二文字が彼の心を支配していた。

少女の放つ闇が、吉影に襲い掛かる。

「(いや……)」

吉影の瞳に、突如光が灯る。

「(わたしは、確かに死んだ……だが、今生き返っている。これはあり得ない【奇跡】……!」

まだまだ……まだ終わってない! 【運命】はわたしに味方しているッ!

このクソガキはッ……！【試練】だ……！わたしが乗り越えなくてはならない【敵】だッ！」  
闇の霧が吉影の視界を染めた。

闇に包まれる吉影。

無差別に飛び交う光弾。

「さあ、今夜は久しぶりの人肉だ」

少女ルーミアが能力を解除した。再び星の光が森の中を照らす。その星明かりの中には、さっき殺した人間の死体が転がっている……はずだった。

「えっ何で……？」

ルーミアが星明かりの中に見たのは、無傷で宙に浮かぶ吉影の姿だった。

「そんな、全弾当たったはず！だって何処にも弾が木とか地面に当たった跡が……」

「そうだ、確かに当たった。だが、それらが全く効いていなかったとしたら？」

「そ、そんな！？あなた……本当に人間？」

「いいや、私は吉良吉影……殺人鬼という名の鬼だ。」

吉影は、上半身だけが宙から現れたかのような不思議な姿勢で浮かんでいた。もしスタンド使いがこの光景を見ていたら、トリックが分かっただろうし、もう少しさまになっていたはずだ。

彼は自分の身体をキラークイーンの腹部に収納し、身を守った。

つまり彼はキラークイーンを鎧にしたのだ。

「（【ストレイ・キャット】を入れていたスペースに、こんな使い方があったとは……）」

窮屈であることを除けば、最高の防御だ。キラークイーンもかすり傷程度で済んでいる。」

吉影は腹部の中からキラークイーンを見た。半透明でショッキング



ピンクの肉体は暗闇の中普段よりさらに禍々しく、不気味に、そして艶かしく輝いていた。

「くっ、だったらもう一度…」

少女が追撃を加えようと身構える。が、吉影はそれを制した。

「無駄だ、既に行動は終わっている！」

「ハッ！！」

ルーミアは自分の体を見た。

「そんな！？何でさっき吐き出したものが…」

彼女の服には、ガムがべったりと付いていた。

「お前は、自分の作り出した 闇の中で、ものを見ることが出来ない。また、お前は最初に闇を解除した時、闇を作った時と同じ場所にいた。つまり！！」

吉影が勝ち誇ったように叫ぶ。

「あの光弾乱射…自分も捲き込まれるんだろう？迂闊に動くと…！」

少女がギクツという擬音がよく似合う反応をした。

「そして、動けないなら目が見えなくともガムをぶつけることは容易い！」

少女ははっと気付き、ガムを取ろうとするが、なかなか離れない。

「遅い！！キラークイーン第一の爆弾！」

ドグオオオオオオオオオオ！！

ガムが爆発した。

## 第一話 外の世界から来た殺人鬼（後書き）

ご覧いただき、ありがとうございます。

次話以降も順次更新していくので、ご期待ください。

## 第二話 漂着 (前書き)

第二話です。説明回なのでまだあまり盛り上がっていませんが、話あたりから面白くなるかと思われませす。  
では、御覧ください。

シヨシヨの奇妙な東方Project避難所【<http://jbbs.livedoor.jp/otaku/11393/>】より  
転載

## 第二話 漂着

「むっ……………?」

「わは〜」

爆煙が晴れ、吉影が目を開けると、少女が宙を飛び逃げていくのが見えた。

「直前に服ごと破り捨てて逃げたか……………」

吉影は追いかけるのを諦め、【キラークイーン】の腹部の空間から出ると、足の様子を確認する。

「…………不味いな、立っているのがやっつとだ…」

かといって、ここにいてもさっきの奴みたいなのが襲ってくるかもしれない……………」

顔をしかめ、辺りを見渡す。

吉影が倒れていた広場からかなり吹き飛ばされ、彼は赤い彼岸花の咲き誇る道に立っていた。

葉が無く、先端に大きな赤い華をつけた花が、地面から何本も真っ直ぐに生えている。

この場所の名は【再思の道】。

彼岸花の毒に冒され、不快感とともに生きる気力が湧いてくる不思議な場所である。

そして、外の世界から迷い込んだ自殺志願者たちはここで生きる活力を与えられ引き返していくのだが、再び生き直そうと決意した矢先、彼らを待ち受けているのは大抵が不遇な死なのだ。

そんな呪われた場所に立っていることを、その時の彼は知るよしもなかった。

「…………… 凄い数の彼岸花だ……………」

おかしい… 彼岸花の季節は秋…………… 今は夏の筈だが……………」  
言いかけて、ブルツと身体を震わせる。

「…………… 今まで気付かなかつたが…………… 幾分か肌寒いな。

【小道】のパワーに引きずられてここに出るまでに、季節が変わったのだろうか……………」

しかし、そう言いながら吉影は少し違和感を覚えていた。なんと言おうか、肌寒さの中に命の芽吹きのような活気を感じたのだ。ふと、背後に気配を感じ、彼は振り返った。

「……………」

目に入った光景に、目を見開く。

広場の中、寂しげに立ち尽くす数本の桜。さつきまでは葉が全て落ち、冬の生命力が枯渇した様相を示していた、  
筈だったが、

「な……………」

信じがたい事だが、蕾がひとつまたひとつと枝先に現れていく。

瞬く間に蕾が目に見える様子で一斉に開花していき、忽ち満開となった。

絢爛たる紫色の桜花がはつと息を呑むほど美しく、咲き誇る。

かと思うと、その刹那桜花は風に吹き千切られるようにはらはらと散っていった。

その情景はこの場所全体が、結界の狭間の犠牲者たちを弔う追悼の涙を流しているようで、見る者に儂くもの悲しい印象を与える。

花びらは地面に落ちると、粉雪が溶けるように朽ち墮ち、消えていった。

「……………」

放心したように、瞬きひとつせず一連の現象に魅入っていた吉影は、我に返り、ふと自分が涙を流していたことに気づいた。

「（なんだ……？何故わたしは……）」

この場所　　無縁塚が哭いているような錯覚、水を打ったような静寂と、舞い散る桜花の美しさと哀しさに、知らず知らずのうちに感涙したというのだろうか。

訝しがりつつも、吉影は涙を拭い呟く。

「　理解できないが……恐らく、今は春だ。彼岸花が咲いてはいるが、とにかく春だ。なぜかそういう【確信】がある……」

問題は、この見知らぬ場所が明らかに異様な土地だということである。

寂れ荒れ果てた墓地、春だというのにこの場所を守るように入り口に咲く彼岸花の群れ。なんらかの【小道】との関係を示唆しているように思えてならない。

「……ここにこれ以上いるのはマズイ……一刻も早くこの場から離れたいが……」

【キラークイーン】に支えてもらい、彼岸花の道の向こうを一瞥した。墨を流したような闇が広がっている。

「…この彼岸花の道を通って森に入って行こうというのは、気乗りしないな……またさっきのクソガキのような【得体の知れないヤツ】と出くわすかもしれない。」

彼は上を見上げた。森の木々にぽっかりとあいた穴から、暗い夜空が顔を覗かせている。

「【キラークイーン】、私を木の上まで運べ。」

彼のスタンドは命令に忠実に命令に従う。

【キラークイーン】は吉影を抱えると、木のてっぺんまで一気に飛び上がった。こういう時、スタンドは便利だ。四肢の不足分を補ってくれる。ただ単に怪力だったり【能力】を持っているだけでは、こうはいかないだろう。

一際高い樹の枝に登り、足を下ろすと、鬱蒼と生い茂る枝葉の上から周囲を一望することができた。

「おお……………」

目を見張る光景に思わず絶句する。新月の夜空に、杜王町のそれとは比較にならない程の星が煌めいていた。

「おお…なんと綺麗だ……………杜王町も星が多く見えたが、ここに比べれば……………」

今にも落ちて来そうな空の下で、彼は圧倒されていた。

しばらくは新月の星空を眺めていたが、

「ぐうツ……………!?!」

左脇腹に走った痛みにも、顔を歪める。

「……………うつつ……………!?!」

目を下ろすと、光弾を受けた部分が大きく抉れていた。

「……………暗すぎてさっきまで気付かなかったが…かなり酷い……………」

幸い、内臓は傷んでないようだ、出血がマズい……………早く何処かで手当てしなくては……………」

『どうやって人のいる所へ行くか』だが……………」

吉影はしばらく思案を巡らせ、ある案を思い付いた。「うまくいか分からないうえ、失敗したらさっきの奴みたいなのに見つかるともしれないが……………やるしかないな。」

右腕で吉影を支えながら、【キラークイーン】が左拳を空に掲げる。

「『キラークイーン第二の爆弾』、【シアーハートアタック】！」

【キラークイーン】の左手の甲から、一発の小型爆弾戦車が放たれた。吉影が【シアーハートアタック】に命じる。

「【標的】は熱源の密集している場所だ。探せ!!」

戦車は吉影の頭上遙か高くまで上昇し、ぐるぐると旋回し始めた。しばらくそうやって熱源を探していたが、

「コツチヲミロオ」

「むっ、見つけたか？」

【シアーハートアタック】の向いている方向を見ると、盆地になっている場所が見えた。かなり広い。

「でかしたぞ【シアーハートアタック】!もう戻っていい。」

ほつといたらそこら中の熱源に特攻しかけないので、すぐに【シア  
ーハートアタック】を【キラークイーン】左手の甲に格納した。  
「さあ、【キラークイーン】、私をあそこまで連れていってくれ。」

【キラークイーン】が彼を担ぎ上げ、木の上を軽快に跳び跳ねてい  
く。

酔うかと思ったが、意外と乗り心地は良い。

盆地がぐんぐん近付いてくる。

それにつれて、盆地から漏れてくる光や賑やかな音、人の気配が感  
じられるようになった。

「よし、当たり前だ！間違いない人が住んでいる！」

しかし、ここでさっきの少女が頭をよぎった。

しかし、ここでさっきの少女が頭をよぎった。

「待て……もしここにいるやつらがさっきのクソガキみたいなのは  
かりだったらどうする？」

一度【キラークイーン】に足を止めさせると、しばらく思案に耽つ  
た。

「それに、あのクソガキは欧米人の風貌をしていた。日本語を話し  
ていたが、ここが日本だとは限らない。何の調査もせず近付くのは  
【慎重さ】に欠けた行いだ……」

とりあえず出来るだけ近寄り、【シアーハートアタック】を発射し  
てスタンド使いがいなかだけでも探ってみるとしよう……」

【キラークイーン】に命じ、さらに近付く。やがて樹木限界線に到  
達し、盆地の様子が分かるようになった。

「なんだ、ここは……」

盆地の中には、塀に囲まれた村があった。

「どついつことだ？この塀、この家、まるで時代劇じゃないか……  
!？」

テーマパークかと思ったが、石垣の様子などが作り物ではない本物  
であるという事実を物語っている。



「一体どうなっているんだ……？私はどこにいるんだ？さっきのガキは何者なんだ？」

それともやはり既に死んでいて、ここは時代も地域も一つに重なった全人類共通のあの世だということか……？」

てつきり西洋まで飛ばされたと思ったら、今度は時代劇である。どこか拍子抜けし、この力オスな現象に頭を抱える。

頭を抱え、考えをまとめようとした時、脇腹に痛みが走り思考を中断する。

「ぐっ………だが、今はそうは言っていられない……寒気が酷くなってきた……頭痛もする……」

……とにかく、近くに行つて様子を見るしかないか……」

樹上から飛び降り、明かりと喧騒に向かって数歩歩き出したそのとき

「なっ

！？」

ガクン

彼の身体は一瞬、宙に浮いたかのような感覚を伴ったあと、一気に沈んだ。

里の明かりにばかり注意を払っていたため、足下の水田に気付かなかった吉影は見事に足をとられた。

落下の拍子に頭を強く打ち付け、意識が薄れていった。

彼は、目を覚ました。

「………ここは………？」

彼は体を起こし、辺りを見回す。そこは、彼の住んでいた家のような、畳敷きの部屋だった。彼は畳に敷かれた布団に寝かされてい

た。

「（……ウーム、どうやら私はあの後気絶していたらしい。そしてここはおそらく、あの塀に囲まれた里の民家……）」

障子から分かる外の様子だと、夜らしかった。あれから何日経ったのかは分からないが。

彼はふと自分の体に目を落とし、驚愕した。

「（傷が完治している……！？腹に大穴があいていたというのに？）

事実、和服に着替えさせられた彼の体に刻まれていたはずの、光弾を受けた際の生々しい傷は跡形も無かった。

足も確認するが、骨もちゃんと治っていた。状況的にこの家の持ち主が治療を受けさせてくれたのだろうが、彼は警戒を緩めない。

「（この連中はあのクソガキのようなやつらなのだろうか？とりあえずこの家の住民だけでも信用できるか確認しなければ……傷の当てだけでは完全には信用できない……）」  
吉影は立ち上がり、スタンドを出現させ、襖を通過させようと  
して、

「ああ、もう目覚めていたのか。1日中目覚めないから心配していたんだぞ。」

「……！？」

襖が開き、住人らしき人物が入って来たので、慌てて「キラークイーン」を引っ込めた。

「やあ、初めましてだな。私は上白沢慧音。この人里で寺子屋の教師をしている者だ。」

彼女の自己紹介は吉影の耳には入っていなかった。彼の脳内には目まぐるしく様々な考えが入り乱れていた。

「（青みがかつた白髪、蒼い目、そして奇抜過ぎる……帽子？なんだこいつは……！？日本人なのか？そしてここは……いったい何処なんだ……！？）」

「あの……かなり混乱するのも分かるが、とりあえず一旦落ち着い

て話そうか。」

ハツと我に帰る吉影。脳内に吹き荒れる憶測をまるごと頭の隅にうつちやる。

「そ、そうだな、すまなかった……」

「ゴホン、…では改めて。私は上白沢慧音。この人里で寺子屋の教師をしている者だ。」

「そうか。私の名は…川尻浩作。しがなサラリーマンだ。よろしく。」

（寺子屋…？時代劇のような言い回しだな。）

君が治療を受けさせてくれたのか？」

「川尻か。こちらこそよろしく。」

（【さらリーまん】？どういった職業なんだ？）

君を治療したのは診療所の医者、私は里の外の水田に血塗れで落ちていた君を発見して、運んで行っただ。」「

「そうか……、ありがとう。君はわたしの【命の恩人】というわけだな。」

治療してくれた医者にも、後でお礼を言わないといけないな。」「

吉影はそこで一瞬迷った後、思い切って目の前の女性 慧音に尋ねた。

「ここはいつたい何処なんだ？」

君も日本語を流暢に話すが、まさか日本人なのか？」

それから、この付近で、不審な少女が

「まあ、待ちなさい。とりあえず順を追って説明していききたい

が、何から話せばいいやら……」

君の質問に対する答えは……」

吉影の顔が強張る。

慧音は一呼吸置くと、静かに話の続きをした。

「ここは……君たちのいう日本に存在する【幻想郷】という別世界。」

結界によって切り取られた、人と妖怪、神々や魔法使いが暮らす、

「忘れられた者たちの楽園だ。」

「……………」  
彼は理解した。彼女が何故日本語を流暢に話しながらも蒼い目や青みがかった白髪をしているのかを。

何故やたらと長く漢字変換もしづらい珍妙な名前を名乗ったのかを。つまり、彼は目の前の女性を、『仮想世界と現実の区別がつかなくなってしまった、痛い子』なのだと認識したのだ。

「あ、あの……………、何か反応してくれないか？」

慧音が少し焦りながら話し掛けた。

「（マズイ、これは疑われてるな……………何とかして信用してもらわないと……………」

そう考えていた時、

突然、吉影がガバツと起き上がり、部屋の隅に置まれていた自分の服をひつつかむと、

「助かったよありがとうこれ以上君に迷惑をかけるわけにはいかな  
いから私はそろそろ失礼するでしょうそれじゃあ

クルリと彼女に背を向け、吉影はこの場から去って行くこととする。

「えっ

一瞬呆気にとられた慧音だったが、慌てて立ち上がり呼び止める。

「ま、待ってくれ話を聞いてくれ!!!」

吉影は慧音が入ってきた方とは逆の方向の障子を開け縁側を歩いて足早に玄關と思われる方に向かう。

「いやもうホント感謝してるから私はこれまでもこれからも地に足をつけて真面目に生きていくからもう私に構わないでくれ」

「いやいや待って待ってどう考えても感謝している態度じゃないだろうそれは!!!？」

止めてくれ目を背けないでくれそんな養豚所の豚を扱うような冷たい態度しないでくれ!!!」

「いい加減手を離せ近所の住民に注目されるなんてまっぴらだ……………」

ッ！！？」

すがり付く慧音の手を払い除けようとした瞬間は目を見開いた。

彼

時間が止まったかのように、空気すらも停止し、音がこの世から消え去ったように思えた。

彼の目は、自分の手を掴む慧音の手に釘付けになっていた。

「（この手触り……！この質感……！この滑らかな肌……！）

指の長さ、細さ、爪の大きさ、形、手首の流れるような曲線に気品漂う骨格、小指の第二関節……！！

素晴らしい……完璧だ……！今までに48人の手の綺麗な女を殺してきたが、この手首はまさに神の賜物……！！

ああ……なんと美しい……！手首の造形美に肌のしっとり部分が重なり合う美しさだ……！！

『ハーモニー』とでも言うべきか？『美の調和』と言うべきだろうか！？）」

吉影の爪がメリメリと音を立て、目にもめる早さで伸びる。

「（『彼女』をここに残して去るのは、人生の敗北！私の心に残したまま生涯を終えることになる……！！）」

【キラークイーン】を出現させ、腕を振り上げる。はやる気持ちを抑え、ゆっくりと慧音の白魚のような手首に狙いを定め……

「（さあ、来たまえ……！！私の下に……！！）」

【キラークイーン】の手刀が振り下ろされた！

「ッ！？」

突然グイッと強引に引き寄せられ、慌てて【キラークイーン】を止める。

ビタァッ

手刀は、吉影の腕の薄皮一枚を切って止まった。

「頼む、どうか……！これから私がすることを、良く見てほしい。」

慧音の真剣な目付きに、吉影はかろうじて正気を取り戻し、なんとか衝動を抑える。

慧音は庭の木を指差し、吉影に言った。

「君はこれから起こることを、見たことがあるはずだ。君は目を疑うだろうが、信じてほしい、これは手品でも幻覚でもない！紛れもない現実なんだ！！」

そう言つと、彼女は手を木に向け…………

「ハアツ！！」

手から光弾を発射した！

光弾は木の枝をへし折り、枝は焼け焦げながら地面に落ちた。

「……」

吉影は驚愕した。この女性は【キラークイーン】が見えていなかったのだから、スタンド使いでないことは確かだ。

だが、彼女は現に光弾を撃ち出した。やはり、スタンドとは別種的能力が存在していたのだ。

「君の腹部の傷は、この弾幕を受けた傷だろう？君は既に、ここが君の居た世界とは異なる世界なんだと気付いているはずだ！」

「……………」

「君の気持ちは、よく分かる。いきなり自分にとって非常識な現象を見せつけられ、しかもそれに傷つけられたんだからな。だが、何度も言うがこれは現実だ。いくら疑つても、否定しても、何も良いことはない。私も、君を助けたいんだ。頼む、信じてくれ。」

「……………」

吉影は、暫く黙って考え込んでいた。が、やがてゆっくりと口を開いた。

「……………私は…森で少女に襲われた時、自分の目を疑った…もしかして、頭か精神がいかれてしまったのかと、怖かった……………」

迷いを断つた目で慧音の瞳を見据えると、

「分かった。君を信用しよう。どのみち今人里を出て行けばあのクソガ…少女に、今度こそ喰われるだろうしな。」

「ほ、本当か？本当に信じてくれるのか？」

「ああ、勿論だ。」

これからこの世界…幻想郷だったか？について、詳しく話を聞かせてくれるかね？」

「構わないが、客人に何も出さないわけにはいかない。お茶を淹れてくるから、さっきの部屋で待ってもらえるか？」

「ありがたい。実は喉が渴いていてね。」

柔らかな物腰で話をつけ、吉影は自分が寝ていた部屋へと戻って行った。

「さて…どうしたものか。」

慧音の足音が遠のいてから、吉影は呟いた。

「あのように言っておいたから、まさか私が【能力】を持っているなんて、露ほども思っていないだろう。」

彼は策士である。さっきの言葉は、全て自分の【能力】を勘づかないようにするための演技なのだ。

「その点については、問題はない。だが……………」

次々と現れ増殖する疑問に、自然とため息が出る。

「別世界だと？妖怪だと？まあ私自身も【スタンド】を持っているし、親父は【写真の世界】を支配する能力を持っていたが……………そういえば、親父…どうなったんだろうな……………」

吉影は、自分の父親のことを案じていた。彼は直接見たわけではなかったが、あのクソツタレ仗助の台詞によると、父親は爆死したらしい

彼の放った爆弾によって。

「……………あの小道へ行くのだろうか。あるいは魂が破壊されて……………」

吉影は、嫌な想像を振り払い、

「ひとまず私を知るべきことは、この世界に【平穏】と【安心】があるかということだ。そして、元の世界に戻る方法を探しだし、いつでも帰れる手筈を整え、確実な安心を得る。」

もしこの世界に、私の望む平穩があるのなら……ここでなんとかして暮らすのも、悪くないかもしれない。杜王町に居られないことは残念だが、ここにはクソツタレ仗助は居ないうえ、私の【正体】を知る者も居ない。

それに……」

吉影の瞳の奥で、影が蠢く。

「（生きている【彼女】にも会える……」

【彼女】のしなやかな指の、妖艶な動きを見ていられる。

【彼女】の、柔らかな肌を、ずっと眺めていられる……」

頬擦りしたり、舐めたりできないのは残念だが……それでも『彼女』が居れば、私の心の平穩は保たれる。ここでの生活が、私の安らぎとなり得る……」

吉影の表情は、はたから見ると、【恋人との幸せな時間】を思い浮かべているような甘い表情だった。

もしそのドス黒い欲望の渦巻く心を地下のマインドスキャン妖怪が覗き込んだならば、反吐を吐くこと請け合いだが。

「ふう……」

台所でお茶を淹れながら、慧音はため息をついた。それは、安心と悩み、双方からくるため息だった。

「とりあえず信じてはくれたが……これで良かったのだろうか……？」  
2つの湯飲みにお茶をいれながら、慧音が呟く。

「……いや……言えるはずがない……」

お盆に湯飲みを載せ、河尻の待つ部屋へと向かう。

「彼が既に、『死んでいる』なんて……」





## 第二話 漂着 (後書き)

御覽いただきありがとうございます。

次回からいよいよバトル展開に突入、ようやくジョジョっぽく仕上がってまいります。R・15表現が多用されるようになりますので、ご注意ください。

### 第三話 復讐と露見 前編（前書き）

第三話です。やっとバトルシーンに突入し、盛り上がる展開となってきました。

グロ描写、残虐表現、一方的な勝敗が含まれるようになって参りますので、ご注意ください。

ジョジョの奇妙な東方Project避難所【<http://jbs-livedoor.jp/otaku/11393/>】より

転載

### 第三話 復讐と露見 前編

「吉良吉影は静かに生き延びたい」

#### 第三話 復讐と露見 前編

「やあ、あんたが件の外来人か。」

「そうだ。私は河尻浩作。君が案内してくれるのか？よろしく頼む。」

「

「いいっていいってそんな硬くならなくて。私は藤原妹紅。健康自慢の焼き鳥屋だ。こちらこそよろしく頼む。」

「済まないな。私のために危険な目に遭うかもしれないのに。」

「大丈夫さ。私は殺しても死なないって有名なんだ。それに、私も暇してんだ。ちょうどいい暇潰しになって、むしろこっちが……」

「も〜こ〜う〜？」

「ははは、冗談冗談。」

睨む慧音に、妹紅が少々慌てて弁解する。

吉影が慧音の家で目覚めてから、彼は外の世界に戻るまでの間、慧音の家に泊めてもらうことになった。

『幻想郷を覆う結界を管理する博麗霊夢という巫女に、とりあえずいつでも外の世界に帰れるように手筈を整えるよう頼み、それから暫くは幻想郷で暮らしてみたい』という、吉影の我が儘を慧音は快く受け入れた。が、診察所の判断で3日間養生することに決まり、その間幻想郷について慧音から詳しい話を聞いたり、人里を観光したりした。

吉影の噂は随分広まっていたらしく、外出時には目立たないよう和服を着ていたが、それでも彼は人々の、異質な存在を見る時の、好奇、そして時には敵意の視線に晒された。

実際には好奇心と好意を持って話しかけてきた人々が多数だったが、

『植物のように穏やかな心』で暮らしたい彼にとってそれらは全て心の平穏を乱す攻撃に他ならなかった。それでも彼は慧音の手首を手に入れるまでの異世界ライフを平和に楽しむため、愛想よく振る舞った。内心早くもうんざりしていたのだが。

そして3日間は大した問題も起きず、予定の日、博麗神社へと向かう朝を迎えた。朝食を済ませ、案内兼護衛の妹紅という少女と挨拶を交わし、二人は博麗神社へと出発した。

彼らは人里から盆地へ出る門をくぐった。

人里の門から少し離れた場所。腰をひねったり、屈伸したりしている妹紅の後ろで、吉影は訝しげにその様子を見ていた。

「さあ、博麗神社までひとつ飛びと行くか！」

妹紅が準備体操を終え、吉影の方を振り向いた。

「ひとつ飛び？私は飛べないが…。」

「分かっているって。だからさ…。」

妹紅が吉影に背を向け、中腰になる。

「さあ、乗ってくれ。」

「…え？」

「いや、だからさ、乗ってくれって言ったんだよ。」

「…大丈夫なのか？」

「心配ご無用。早くしてくれ、あまり遅くなると帰りの途中で日が暮れてしまっぞ。」

「…分かった、じ、じゃあ、よろしく頼む。」

吉影が恐る恐る妹紅の背におぶさる。30代の男が、(少なくとも外見は)10代の少女におぶさるという、かなり滑稽な絵が出来上がった。

「(こ、これは恥ずかしい…。人里の人間の間で噂にならない方がいいが…)」

「さあ行くよ！歯を食い縛りな！！」

「…!!!??」

一気に地から離れ、森の上空へと弾かれるように飛び出した。眼下を森の木々が流れていく、というか流れ去っていく。鳥の横を嵐の如く過ぎ去り、空の交通安全を乱しながら飛行する。

「どうだい、河尻？これ程高い場所にいるのは初めてか？」

風に白い髪をなびかせて、妹紅は振り返り得意げに笑う。

「…初めての感覚だ…生身でこれ程高く速く飛んだことはなかったな…」

妹紅は、かなりの安全運転で飛行していた。まあそれでもバイクで高速道路を爆走するくらいの風圧はあるのだが。

「生身？生身じゃなければこんなふうには飛んだことはあるのかい？」

「ああ、飛行機といってだな、上空何里もの高さを、ものすごい速さで飛ぶ乗り物があるんだ。種類によっては音の三倍の速さで飛行するものもある。」

「【音の速さ】…！？そ、それは凄い…想像できないな…」

やはり魔法は科学には敵わないのかもしれないね……………」

「いやいや、外の科学ではこんなふうには、何も道具を使わずに飛ぶなんてまだできない。コストも乗り物を造る年月もバカにならないしな。」

「成る程、どちらもそれぞれ長所短所があるということか。」

そんな会話をしながら、二人は博麗神社へと順調に近づいていた。

「おい、なんだあれは？」

「ん？どうした？」

妹紅は前を向き、吉影の指差す方角を見る。

そこには、鳥の群れらしきものがいた。それだけなら大したことないが、問題はその大きさである。普通の鷲だの鷹だの鳶だの、3倍以上の大きさだ。

「おおっと、おいでなすつたな。」

不敵に笑う妹紅。

「なんだあいつらは？まさか妖怪か？」

「その通り！久しく輝夜と殺し合いしてなかったんだ、血がたぎっ

てきたよ……。」

群れはもう目前まで迫って来ていた。群れは列を組むわけでもなく、てんでバラバラにこちらに突っ込んで来る。凶悪な嘴を打ち鳴らし、ゾツとするような甲高い咆哮を上げて襲いかかって来る。

「しっかり掴まってるよ!!!」

「!!!?」

ギョーンと加速し、妖怪共の群れの中へ突入する。吉影を一気にGが襲う。耐え難い力に頭を大きく後ろに反らし、必死に妹紅の肩にすがる。

先頭の一頭が嘴を開き、妹紅を八つ裂きにせんと、襲い来る。

「キシエエエエエ!!!」

最小限の動きで嘴を避ける。その後ろの二頭の翼をくぐり、次の一頭の爪を左に避け、三頭の脇をすり抜ける。妹紅は妖怪共の間を縫うように、瞬く間に群れを突破した。

「チツ、このままじゃ分が悪い……」

後ろを確認した妹紅が呟く。妖怪達は既に急旋回し、追跡して来ていた。

「しょうがない、一旦地上に降りてあんたを下ろす!」

「なんだと!?ち、ちよつと待ってく

うあああ

あああ!!!」

頭から地面に向かって一気にまっ逆さまに急降下する。さすがにこの衝撃には耐えられず、キラークイーンの腕を使わざるを得なかったが、幸い妹紅は気付かなかった。真下の森の木々の葉をぶちまけ、枝をへし折って突入する。地面が見えた瞬間、ギョイン!と身体を回転させて見事に着地した。

「さあ、これから殺し合いするから、悪いけど自分の足で立つてもらうよ。」

「ま、待ってくれ、腰が抜けて………」

妹紅に下ろされた吉影は地面にへたれこんでいる。

「おいおい、大丈夫かい?そんなんじゃ本当に死………」

……死んじまうな。」

軽い雰囲気だった妹紅の口調が、突如真剣になった。吉影は訝しげに、立ち尽くす妹紅の背から目をはなし、周囲を見回した。そして、絶句した。

樹木の蔭に蠢く、無数の眼。

キラキラと紅く輝く、渴望に満ちた双眸。

二人を囲み、涎を溢れさせながら油断なく隙を伺う、野獣の瞳。

「か、囲まれている……」

「そういうことだ。私でもこの数相手に『護りながら』戦うのは厳しい。死にたくないなら早く立ち上がって……」

「心配ありがとう。だがそれは無用だ。」

妹紅が振り向くと、吉影は既に立ち上がっていた。震え1つ起こさずに、背筋を伸ばして。その瞳に、恐れや不安は感じられなかった。

「ほう、やるねあんた。もし私があんたみたいに力もなく、見たこともない化け物の群れに囲まれたら、とてもそんな風には振る舞えないね。」

「何を言っている。私には君という慧音が紹介してくれた信頼できる護衛がいる。なにより、私は戦わない。ただ護ってもらっただけだ。何を足掻こうが無力なのなら、せめて何もしないのが最大のサポーターというものじゃあないか。そうだろう？」

「ははっ、確かに戦うのは私だったな。」

空気が緩み、いつもの幻想郷に戻る。命をかけたらしめない、遊び感覚の決闘の雰囲気に戻る。

妹紅は気を引き締め、構える。

「私の背中に近寄れ。できるだけな。」

吉影は素直に従う。

森の暗さに慣れてきて、妖怪共の姿が徐々にはっきりと見えてきた。狼やヒト、熊を普通の3倍ほどに巨大化させたような、人との共通



点など欠片もない獣ばかりだった。

「ふん、知性のあるヤツは居ないみたいだな。これなら遠慮なくぶつ殺すことができる。」

妹紅の放つ気配が豹変する。

近くにいると焼けてしまいそうなほど、強烈な殺気。

何度も殺し、殺されかけた者の持つ覇気。

妖怪共はあまりの迫力に、ジリジリと後退りし、萎縮する。

「（なんとという殺気だ……此処の少女達は皆こうなのか？）」

吉影は内心焦っていた。幻想郷の住民が皆恐ろしく強かったら、彼の安心は確立されず、なにより【恋人】を連れ帰るのに支障をきたす。

「戦う前に一応言っておくが……、私がもし、

万が一死んだら、すぐに死体から離れてくれ。猛ダッシュで逃げるんだ。すぐに妖怪達は吹っ飛ばされる。その間に、一心不乱に逃げるんだ。」

「？……、分かった。」

会話が終わると、妹紅は妖怪の方に向き直った。

「なんだ、かかって来ないのか？食事をしに来たんじゃないのか？腹でも下したか？」

妹紅が一步前に出る。正面の妖怪がたじろぐ。

「そっちが来ないってんなら……こっちから行かせてもらおう!!」

妹紅が懐からスペルカードを取り出し、高らかに挙げ、宣言する。

「時効『月のいはかさの呪い』!」

妹紅を中心に、無数の光弾が放射状に放たれた!光弾は妖怪共の肉を容赦なく抉り、骨を砕き、脳髓を撒き散らした。

「グオオオオオオオ!!」

妖怪共が恐怖を怒りでもみ潰して襲いかかって来る。

「フン、他愛もないね。」

妹紅は次のスペルカードを手に取り、宣言する。

「蓬莱『凱風快晴 フジヤマヴォルケイノ』」

大量の火球がばらまかれ、さらに炎の光線が放たれる。妖怪共は避けながら迫って来たが、そこに追い討ちとばかりに巨大火球が放たれた。向かって来た妖怪共は火球と光線に囲まれてやっとなだつたと気付いたようだ。もう遅い。身動きが取れず団子状態の妖怪に、巨大火球が突っ込む。火球は着弾すると爆裂し、爆発に巻き込まれた何十頭もの妖怪は派手に内臓をぶちまけて吹き飛んだ。血飛沫が樹木の根や土をどぎつい色に染める。

「(す、凄い……！なんと……！なんていう闘いだ……これだけの数の妖怪を、たった一人で圧倒している。爆発の威力はほぼ互角だが、攻撃範囲、手数が桁違いだ。真正面から戦えば、確実に負ける。こんなやつらがごろごろ居るのか？この幻想郷には……)」  
顔に影がさした。ハツと上を見上げる。

「妹紅！上だ！！」

さつき逃げ切ったと思っていた鳥の妖怪達が嘴を打ち鳴らし、急降下して来ていた。

「不死『火の鳥 鳳翼天翔』！！！」

妹紅がスペルカードを抜き、宣言する。

不死鳥をかたどった三つの爆炎が迎撃する。爆炎は妖怪二、三頭を一瞬で消し炭にし、さらに後から突っ込んで来た四、五頭を骨にする。そのまま落ちて来た骨を蹴りでぶち壊す。

「(しかも肉弾戦まで……！まさかこいつも人間ではないのか?)」

吉影の思考はその対象の叫びによって中断された。「危ないっ！

！」

「うあっ!?!」

妹紅に襟首を掴まれ、強引に空中へと引き摺られるようにして飛んだ。一瞬前まで立っていた場所に巨大な岩が落ちてきた。

「畜生、あいつだ!！」

妹紅の視線の先にはやや離れた場所にヒヒの妖怪がいた。どうやらこいつが投げたようだ。

「ッ！」

また上だ!!」

「はっ!?!」

まだ残っていた鳥妖怪が、目前まで迫っていた。

「まずい!!」

妹紅は急旋回し凶悪な嘴 を避けた。だが……

「うわっ!!」

「し、しまった!!」

吉影から手を放してしまった。吉影は地面に激突する直前に【キラークイーン】を出現させ、その腕でバレないように受け身をとる。

即座に立ち上がり、妹紅の様子を確認したが、どうやらバレなかったようだ。

「河尻!危ない!!」

妹紅が必死の形相でこちらにもものすごい速さで飛んで来た。

「ハッ!!」

振り返ると、巨大岩が一直線に飛んできた。

「(まずい!!)」

キラークイーンを出現させ、自分はその場に伏せる。巨大岩を自分に当たらないように、そして不自然に見えないように、絶妙に軌道修正して受け流した。

「(危なかった……だがこれでひとまず危機は回避できた……、

…ッ!?!)」

妹紅は空中で止まっていた。吉影に驚愕の表情を向けながら。

「(何イ!?!まさかバレたのか?そんな馬鹿な!軌道修正は完璧だったはずだ!!なぜ…いったい何故!?!)」

妹紅は呆然とした表情のまま、吉影の背後を指差す。「それ…なんだ?」

吉影は振り返り、愕然とした。吉影を狙ってきた岩は、彼に命中しなかったことよって、彼の背後へと迫っていた狼型の妖怪を押し潰していた。普通なら奇跡に喜ぶところなのだろうが、この場合は不幸に他ならなかった。

【キラークイーン】は血飛沫を浴びていた。スタンド使いでなくても、巨漢の人型の存在を認識できるほど。

「（な、なんだとオツ！?!）」

妹紅を見る。彼女は知ってしまった。彼女に知られてしまった。自分が能力を持っていると。自分は嘘をついていたと。

「（どうする？どうすればいい？）」

【始末】するか？いや、容易く骨にされるだけだろうし、今は妖怪を倒さなければならぬ。

話し合い？そんな状況ではない。

無視して妖怪と戦う？そんなことをしても、彼女は納得しないだろう。

いったいどうするべきか……………、  
っ！?!）」

ふつと吉影は彼女の背後に目を移した。目を見開く。

「ハッ！?!」

妹紅がふりかえったが、遅かった。突然発生したとす黒い霧が妹紅を飲み込んだ。

「何イ！?!」

キラークイーンの脚でバックジャンプし、霧から逃れる。霧の中から、肉が引き裂かれ、液体の迸る音が聞こえた。

「この霧 冗談だろう…?!」

霧が晴れると、そこには、喉を喰い千切られ、動かない妹紅の身体があった。

「そうだよ。お久しぶりだね。」

「やはりお前か…こいつらはお前の子分か？」

「うん、違うよ。ただ『外来人がこの辺にいたよ。』って言うたら勝手にいうこと聞くようになっただけだよ？」

「成る程、私を消耗させてから襲うつもりか。とりあえず顔を見せてもらいたいんだが…?」

「やくだよ。あなたの念力の射程とか能力を観察するんだから。」



スピードはクソツタレ仗助の【クレイジー・ダイヤモンド】と互角、パワーはそれ以上かもしれないッ！！」

【キラークイーン】の脚を後ろに蹴り上げる。背後から飛び掛かってきた狼三頭が臍物をぶちまけて吹き飛び、樹木の幹に叩きつけられ、動かなくなった。

「（しかも【気配】にも敏感になっている。堪も冴えてきた……：そっういえば昨日通過した森の茸の胞子は魔法使いの力を高めるとか妹紅が言ってたな。これもその作用か？）」

【キラークイーン】の性能の向上を実感し、吉影はルーミアの居場所を探るべく辺りを見回す。

「うわあ、すごい でも残念、捨て駒はまだまだたくさんいるよ。」

「いい加減出て来たらどうだ？今ならまだ3分間痛め付けるだけで赦してやるが……」

「まっただよ。かくれんぼはちゃんと自分で探さなくちゃ。」

「…分かった。探して見つけ出して死なない程度に殺してやる。」

「お前、【スペルカードルール】で戦うつもりはあるか？」

「何言ってるの？外来人のくせに。【スペルカードルール】はあくまで幻想郷の住民のための制度。あなたには適用されることはないよ。」

「つまり、これは【ルール】に則った決闘ではないということだな。よかった、私が断然有利というわけだ。」

「……… 本当に何言ってるの？【スペルカードルール】なしに人間が妖怪に敵うはずが………」

「『【殺し合い】なら得意分野だ』、と言っているんだよ。」

吉影の瞳が、殺人鬼のそれに変わった。

「フツツ、面白い冗談だね。」

ルーミアとの会話が終わり、声のした方向からおおよその位置を探り出した吉影は、さらに彼女の居場所を絞り込む策を実行する。

「さて、コイツも強化されているか実験してみるか。」

【キラークイーン】が左拳を突きだす。

「『キラークイーン』第二の爆弾』、【シアーハートアタック】  
！！」

手の甲からドクロを模した一台の小型戦車が発射された。

「目標はクソケダモノ共より離れた場所にいる人型の熱源だ。途中の敵は爆破しろ。さあ、捜せ！！」

【シアーハートアタック】が頭上を旋回しルーミアを探している間、近寄る妖怪の頭を潰して【爆弾】に変えて投げつけ、牽制する。

すぐに見付けられしく、地面に降り、キャタピラでパワフルに土を掴み走り出した。

「コツチヲミロオ」

【シアーハートアタック】は地面の凹凸を利用して元氣よく妖怪の腹を突き破り、口に飛び込み、内側から爆殺していく。妖怪は何が起こったかも分からず、大混乱に陥っている。

「成る程、そこか。」

【シアーハートアタック】が向かって行った方向を見る。その先には特別巨大な樹木があった。

「【シアーハートアタック】、もういい。そいつを監視しながらコイツらを片付けてくれ。」

再び飛び掛かってきた妖怪をぶちのめしながら命令を与える。【シアーハートアタック】はそれに従い、吉影を囲む妖怪の群れに突っ込んで行った。たちまちの内に妖怪共は激減したが、妖怪はかなり近くまで迫って来るようになった。

「まずいな…爆発に巻き込まれる。仕方ない。」

【シアーハートアタック】を戻し、両手でラツシュを叩き込む。

「しばばばばばばばばばばッ！！」

妖怪共を叩き、潰し、蹴り、ぶっ飛ばす。【キラークイーン】は全身に血を浴び、もはや元のシヨッキングピンクの肌は見えない。

「むっ？」

飛んできた巨大岩を片手で粉碎する。破片が妖怪共の肉を穿ち、痛みを吠える。

「さて、そろそろいいか。」

吉影は先ほど【シアールハートアタック】が示した方向に向き直る。

妖怪は遠巻きに吉影を眺めるだけで、ただ震えている。

「そこにいるんだろ？出てこい。」

樹木の陰に呼び掛ける。

「うふふ、せうかい。」

ルーミアが陰から姿を現す。輝く金髪、紅い瞳、忘れもしない、その姿。

「あなた、本当に凄いなだね。これだけの数の妖怪を、弾幕も撃てないのに、たった一人で倒しちゃうなんて。」

ルーミアが可愛らしく、妖しく、不気味に笑う。

「でも、あなたも相当消耗しているはずよ。その状態で私と、残りの妖怪に勝てるかな？」

吉影はただ彼女を睨み付けている。

「それに、あなたの念力の射程距離も形も分かったよ。形は人型、射程はだいたい2、3メートルつてところでしょ？爆発は私の位置が分かっていたのにできなかつたんだから、半径15メートルくらい

いいだ。な。」

「え？なにになに？何て言ったの？」

「【かくれんぼ】はお終いだな、と言ったんだ。私の勝ちでな。」

「…まあ、そうだけど、でも」

「じゃあ、罰ゲームだ。君はもうお終いだ、その前においたのことは謝ってもらわないと。」

とりあえずそこにひざまづいてもらおうかな。」

静かな、しかし冷たい声色で吉影は語りかける。

本気の自分が人間ごときに負けるわけがない。そう考えていたルーミアには、彼の言葉は思えば上がりも甚だしい只の世迷い言か新手の



ジヨークに聞こえたのだろう。

「フフツ、そんなこと言って……」

クスクスと笑い、彼女が口を開いた時、

「ひざまづけッ!!」

ドグオオオオオオオオ!!

吉影の怒号が響いた瞬間、二人を囲んでいた妖怪が爆炎と共に吹き飛んだ。それと同時に、

「えっ……………っ?」

ルーミアがくずおれる。立ち上がるうと足に力を入れようとするが、意に反して全く動かない。恐る恐る自分の足を見た。

「きゃああああああああ!!」

彼女の両足はズタズタに崩れていた。

「先ほど飛んできた岩は【キラークイーン】が爆弾に変えてから打ち砕いた。

小娘、貴様の隠れている樹のそばにはらまいておいた破片が爆発したのだ。」

両足を破壊され悲鳴を上げるルーミアに、吉影はゆっくりとした、だが確固たる足取りで歩み寄って行く。

「あつ、ああつ! 足が! 私の足が……」

「……………この世界に流れ着く前、私が住んでいた町では、年に一回救急講習が開かれていたんだが……」

「いつ、痛い! 痛い!! 痛い!!! ああつ、足、足が……」

「君と戦った後、真剣に受けておくんだったと後悔したよ……技術を身につけなくっちゃあな……」

でもああいうのに通っている連中ってのはどーなんだろうな? 一週間も歯磨きしてないヤツが、人形相手に人口呼吸練習したり、それを使い回したりしてるのかな……?」

「ああつ、立てない! 立ち上がれない」

「【キラークイーン】に抱えられて樹の上を移動していた時が一番応急処置の必要性を実感したよ……抉れた傷口が開いてね……立





轟いた！

「きゃあああああああああ！！！」

「グオオオオオオオ！！！！」

金切り声と共に闇が晴れていく。

やがて完全に闇は消え失せ、気絶した妖怪と、宙に浮きながら目を回し、耳を押さえて呻いているルーミアの姿が見えた。

「爆風を受けた時、最も傷付きやすいのは眼球と鼓膜だそうだ。初めてこのような使い方をしたが……上手くいったようだな……」

耳を塞いでいた手を下ろし、【キラークイーン】の脚で跳躍する。

「うつつ、耳が…頭が…ジンジンするう…」

昏倒寸前の彼女の前に、突然吉影が現れる。

「あつ」

ドグシュ！！

【キラークイーン】の拳が、ルーミアを貫いた。

「がはっ…！？」

ぶっ飛ばされ、樹の幹に背中を打ち付ける。骨がへし折れる音が聞こえた。

「ぐあつ…！！」

地面に倒れ込み、そのまま顔を伏せる。腹から流れ出した大量の血液が、巨木が根を張る土に染み渡り、紅葉の落ち葉のように地面を赤黒く染め上げる。

ルーミアは苦しげに呻き、力を振り絞ってどうにか顔を上げた。

吉影の姿は無かった。ルーミアが何故彼はすぐに姿を現さないのか訝しく思った時、

「え…？」

突然彼女の周りが陰った。上を見上げる。

妖怪の死体がグングンと迫ってきた。

「なっ……!?!」

ドグシヤアアアア

ルーミアの体が死体の下敷きになった。

吉影はさらに5体10体20体と、死体を投げ飛ばす。瞬く間に死体の山が築かれ、破れた腹から飛び出した内蔵や頭部から転げ落ちた脳髓や眼球が周囲に土手を築き上げる。

「さて、これだけやればペシャンコのグジュグジュになっていいるだろう。」

手をパンパンとはたきながら、自らが築いた死体の山を眺めて呟く。「だが、まだしぶとく生きているかもしれない。確実なる安心のため死体を確認して髪の毛一本残さず爆破するでしょう。」

吉影は油断なく死体の山に歩み寄って行った。

吉影から見て死体の山の反対側に当たる場所。狼の妖怪の死体が、二度と光を見ることがない目を見開いていた。何も動くものはない。狼の頭が、ピクリと動いた。ゆっくりと顎を開いていく。

やがて顎がはずれるほど大きく開き、中から血と臓物にまみれた物体が顔を覗かせた。

それは周囲をキョロキョロと確認し、吉影の姿がないことを確かめると、おそろおそろ死体から這い出てきた。

うっ、と呻いて傷を押さえる。腹にぽっかりと開いた穴が痛む。

「これだけやったんだから、私が生きているなんて夢にも思っていないだろうなあ……」

そのままいなくなってくれれば、助かるんだけど……」

ルーミアは願いながら、這いずってこの場から離れようとした。しかしそのとき、最悪の知らせが敵によってもたらされた。「さて、これだけやればペシャンコのグジュグジュになっているだろう。」

だが、まだしぶとく生きているかもしれない。確実なる安心のため死体を確認して髪の毛一本残さず爆破するとしてよう。」

ゾオツ

ルーミアは死体の山の陰で戦慄した。

あの外来人の発する気配が、其処らの妖怪なんかより遙かに冷たく自分の造りだす闇よりどす黒い殺気が、彼女を襲った。

「(なに…なんなの…この人間？ 霊夢や魔理沙とは比べ物にならない…！ 二人より遙かに弱いはずなのに…！)」

彼女は彼に見つからないように身を縮め、必死に震えを抑えつけて、這いずって逃げようとした。しかし……

「何処に行こうというんだね？」

「ひいつ！？」

背後から掛けられた声に縮みあがる。駄目だと分かっているのに、逆らえず振り返ってしまった。

そこには吉良吉影

殺人鬼が、全身血みどろの姿で、

彼女を見下ろしている姿があった。

「あ…ああ…、

あああつ…！」

ルーミアが声にならない悲鳴を上げる。目が涙で滲む。震えが止まらない。身体がいうことを聞かない。「こ、来ないで…！ お願い！ た、助け

！ 涙声で赦しを請おうとした時、吉影は世間話でもするように彼女に

語りかけた。

「『傷薬』…持ってるかね？『消毒液』でもいいが？」

「…え…………？」

「ん？持っているかと聞いているんだよ。『傷薬』か『消毒液』持ってるかね？」

唐突すぎる質問に戸惑いながらも答える。

「う、ううん、持っていない……………なんのこ…と？」

「持っていない…か……………」

「じゃあ私のを使いたまえ。」

吉影が、慧音に渡された傷薬の瓶を取り出し、ルーミアに差し出す。訝しげにそれを見るルーミア。

彼女が瓶を凝視している前で、吉影は瓶の蓋を開け、指先で中の塗り薬を掬い

ビツ

ルーミアの両目目掛けて、塗り薬を飛ばした。

「きゃあああああああああ！？」

激痛のあまり泣き声を上げ、うずくまるルーミア。「強盗とかの人質は目隠しをされると、とてつもない恐怖感に襲われ、パニックに陥るそうだ…宵闇の妖怪には効かないかと思っただが、効果てきめんだな。」

「うつつ、目が、目があ…、痛い…見えない…」

激しく目を擦るが、逆に目を傷つけるだけだ。

「私は君に近づかない。もう前のように油断してノコノコ近づいて足を潰されるのはゴメンだ……………」

だから……………」

小石を拾い上げ、【キラークイーン】にいつでもルーミアを狙撃できるように構えさせる。

「君から少し離れた位置から、狙撃することにする。だが…いくら精密動作性が上がったとはいえ、この距離でこんな不細工な小石を命中させる自信はないな……………」

もう少し近寄ってからじつくりと狙い撃ちするとして……」  
苦しげにうずくまるルーミアに、少しずつ歩み寄る吉影。

ルーミアは這いずって逃げようとせせず、ただ泣いていた。

吉影は隙を見せずに、慎重に足を進める。

一歩……二歩……、小石を確実にぶち込める射程距離まであと一歩まで迫った時……

「……………フフツ……………」

吉影がハツと足を止める。【キラークイーン】の目でルーミアを凝視し、観察する。

いつでも小石を撃ち出せるよう、【キラークイーン】に照準を定めさせる。

「……?」

「フフツ、アハハ……クスクス……………」

ルーミアが上半身をゆっくりと起こす。吉影の方に向き直り、見えない目を強引にこじ開ける。涙が頬を伝う。

「ハハツ、フフツ、アハハハハハハハハハツ……!」

「……………」

吉影の身体に緊張が走る。拳を震わせ、目の前で可愛らしい声で不気味に笑う宵闇の妖怪を睨み付ける。

「キヤハハツハハハアハハアハハハハハハハハハ……!」

西部劇の早撃ちのように瞬時に狙いをルーミアの眉間に定め、発射しようとした瞬間……!

「ブラックアウトオオツツ……!」

ガバツと飛び起き、渾身の声で叫ぶ!闇が爆風のように拡散し、吉川を呑み込もうと迫る……!

「遅いわアツ……!」

【キラークイーン】の親指が小石を弾き出す!その瞬間……!  
ビュオオオオオンツ……!

「なにイツ……!」



背後から襲い掛かってきた鳥妖怪を左拳で殴り飛ばす。

「クソッ！まだ残っていたのかッ!？」

その一瞬の動作のために、【キラークイーン】の手元が、僅かにずれる。

「なあッ、しまった!!」

もう遅い。すでに放たれた小石は闇に呑まれてしまった。一瞬後、吉影も闇に呑み込まれる。

小石がルーミアを貫く音が聴こえてくることは、  
なかった。

### 第三話 復讐と露見 前編（後書き）

御覧いただきありがとうございます。

この話は当時、ようやく書きたいバトルシーンにとりかかることができたので非常に楽しく書いていました。そのせいでいくつか設定に矛盾ができて、修正する羽目になってしまったのですが・・・次回以降はバトルが基本になってまいります。中盤以降になるほど温めていたネタを一気に放出しているので楽しんでいただけるかと思いません。

そこからは大変「ジョジョらしい」能力バトルが繰り広げられているので、「なんだ、ツマンネーな」と思われている方、どうか第？話まで我慢していただくようお願いいたします。期待は裏切らないことを【約束】します！！

第四話 復讐と露見 後編（前書き）

少し遅くなりました。第四話 「復讐と露見 後編」、お楽しみください。

## 第四話 復讐と露見 後編

「吉良吉影は静かに生き延びたい」

### 第四話 復讐と露見 後編

目を潰され、聴覚に頼らざるをえなくなったルーミアは、吉影の位置を知ろうと必死に耳をすませた。そして、彼のゆっくりとした足音とはべつの音に気付いた。

「（これは……………？）」

上空で、空気が切り裂かれる音。風の流れを乱し、大気に巨大や穴を開けて、物凄い速さで落下してくる物体の動きが、振動となって伝わってくる。

「（これは！もしかして…！）」

「フフツ……………」

ルーミアの心に、希望が芽吹く。

「（やった、やったわ！勝ち目は…ある…！）」

「フフツ、アハハ……………クスクス……………」

ルーミアは渾身の力を振り絞り、上半身を起こした。痛み、涙が滲む目を強引に見開き、音を頼りに吉影を睨めつける。

「ハハツ、プフツ、アハハハハハハハハツ…！」

「（ウフフ、今まで散々怖がらせてくれたわね……………初めてよ、ここまで追い詰められたのは…人間だろうと妖怪だろうとね……………なにか…ちょっとした『敗北感』すら感じるわ……………まったくたいした人間よ…あなたは…敬意を表してあげる…」

「…でも…！！）」

「キヤハハツハハハアハハアハハハハハハハハ……………！！」

「甘かったわね、人間…！あなたはここでお終いよ…！！）」

「ブラツクアウトオオツツ…！！」

ガバツと飛び起き、渾身の声で叫ぶ！闇を爆風のように拡散させ、吉影を呑み込もうと肉迫させる！！

「遅いわアツ！！」

吉影の咆哮が闇の向こう側から聞こえる。だが、ルーミアは動こうとしなかった。彼女は、ただ待っていたのだ。彼が狙いを外す、その時を。

「（さあッ！そいつを串刺しにしろ！！）」

鳥妖怪が吉影の背目掛けて突っ込む音、

そいつが返り討ちにされる音、

そして

小石が、弾幕の何倍もの速さで発射される

音。

「（お願い…！どうか…！どうか外れて…！）」

彼女の願いは、通じた。

小石が彼女の右の頬を掠め、髪の間を通り抜け、過ぎ去っていった。

「（やった…！勝った…！私の勝ちよ…！）」

心の底から歓喜の声をあげる。腹の底から笑う。恐怖からの解放に復讐への喜びが合わさって無上の歓喜になる。

「キヤハハハハッ！！惜しかったね、あなたが油断してバカみたいに一人でくっちゃべってたからこうなったのよ！！」

あなたの敗因はただひとつッ！！その身の丈不釣り合いな過大評価よッ！！

さあ、覚悟なさい！！明けない闇の中でガタガタ震えて命乞いする心の準備はオーケー！？

あなたには生まれてきたことを後悔しながら死んでもらうわッ！！

さあ、歯を食い縛りなさいッ！！妖怪をなめたらどうなるか、その魂の奥底まで刻み込んであげるッ！！

さあ、喰らえ

「

ドグオオオオッ！！

「……………え？」

フツと全身から力が抜ける。バタリと仰向けに倒れる。何もしていないのに、闇が勝手に晴れていく。森の様子が、徐々にはつきりと見えてくる。

やがて完全に闇は取り払われ、彼女の顔に柔らかな日の光が差した。

「…？」

気だるげに拒否する身体に鞭をあて、顎をひく。合わない焦点をなんとか合わせ…

「…え？」

彼女の腹には、さらに大きな穴が口を開いていた。ぐちゃぐちゃになった内臓が顔を覗かせ、血はもはや勢いを無くしてただ静かに流れ出るだけだった。

「『キラークイーン』第一の爆弾』…君の腹を貫いたとき、爆弾に変えた小石をすでに仕込んでおいたのだよ……」

吉良吉影が静かに、冷然と呟く。「キラークイーン」が鳥妖怪の死体を掴み上げ、嘴を引き抜く。嘴は音もなく爆破され、死体も塵になり消滅した。

「私の『キラークイーン』の指先は、どんなものも爆弾に変え、髪の毛一本残さない。じきに君もこうなる。」

「ひいつ…！？」

唯一動かせる腕で身体を起こそうとするが、力が抜け、片肘が折れる。そのまま横に転がり、うつ伏せになった。

ダメージが大きすぎて、もはや宙に浮くことすらかなわない。

「あ……あ……あ……！」  
歩み寄る吉影。

「やめてッ……！いやッ……！助けて、死にたく……ない……！！」  
這いずり、逃れようとするルーミア。

「助けて……、お願い……！もう……人間……食べない……から……！」  
吉影は無言で次の小石を構える。

「本当……よ……、もう……絶対……人間食べたり……しないか……ら……！！何  
でも素直……に……いうこと聞……聞くから……、ッ……！」  
ゴフツと咳き込むと、血が吹き出した。

血と涙と恐怖で喉が詰まる。声が出ない。息も絶え絶えだ。涙が溢れる。止めどなく溢れる。頬を伝い、土を湿らせる。

そんな虫の息の彼女を、吉影はただ冷酷に見下ろす。当たり前だ。

【殺人鬼】が、妖怪を殺すのに躊躇するだろうか？これから憎悪を込めて殺す相手に、存分にいたぶって殺す相手に、一片の同情でも持ち合わせているだろうか？

【キラークイーン】がルーミアの左肩に狙いを定める。

「人に【頼み事】をする時は、その人に尻を向け  
て遠ざかれ、と学校で教えているのか？」

ビシッ！

小石がルーミアの左肩を貫通した。

「あぐッ……！」

「正解は歌にもある通り、『お化けにや学校も 試験も何にも無い』  
だ。覚えておけ。」

ドスッ！

「があッ……！」

「さて、話の続きだ。私の【能力】を知ってしまった君は、生きて  
いてもらっては困る。

また、私が君を始末したことも露見してしまつては困る。

よつて君は『わたしが手を下したと発覚しない手段で』死ななくち  
やならない。私の言ってること、分かるな？」

バシッ！

「ぐあッ……」

「そこで、私はさっきの鳥妖怪と同じく、君を塵も残さず消滅させようと考えた。だが、私はそこまで血も涙もないわけではない……」

……」

バスッ！

「いッ……？」

「死ぬその瞬間までは、せめて君の姿のままに殺してやろう。嬉しいだろうッ？ええッ？！喜びたまえ。」

だが、その対価として……、おっと、だめ押しにもう一発。」

グシュッ！

「あッ……！」

バタンッ

両肩と両肘を貫通され、背中に小石爆弾を埋め込まれたルーミアは、ついに這いずることすらできず、地面に突っ伏した。血と涙に濡れた顔は土にまみれる。

「これから君をなぶり殺すからな……」

君のような、どう見ても十歳未満のクソチビに、辛酸を舐めさせられるなどという、『赤っ恥のコキッ恥』をかかされたんだ……じゃなければこの気分がおさまらん……」

吉影は、ゆっくりと、悠然と、ルーミアのもとへと足を進める。【キラークイーン】の目で、もう身動きひとつできないことを確認しながら。

「初めて出会った時は【君】に『私のもとに来てくれ』と言ったが……こうやってよく見ると実に醜いな、【君】は。」  
元【彼女】候補を見下ろし、侮辱するように言い放つ。

「爪は無造作に伸びきっている。手入れがなされていない。しかも爪の間に死肉がこびり付いている。まったくもって醜悪だ。」



吉影がキラークイーンの脚を上げ、ルーミアの右手を踏み潰そうとした。その時……

「うっ……」

ルーミアが、呻いた。吉影はビクツと足を下ろし、後ずさる。右手のスイッチに親指を添え、いつでも爆破できるように身構える。だが……

「……………んっ……………」

…くっ…うっ…うっ…う……

…うえっ…えっ…うええっ……」

ルーミアは、ただ、咽び泣いていた。逃れようのない死の運命に、絶望して。彼女の創る漆黒の闇より暗く、全てを呑み込み隠す、深く冷たい絶望に包まれて。

「泣くな、馬鹿者。」

興を削がれた吉影は舌打ちと共に吐き捨てると、振り返り、『本命』のもとへと向かう。

彼女は、ルーミアから十メートルほど離れたところに倒れていた。

「私は、『彼女』を二人以上作らない。」

吉影は、もう血も流れ出ない妹紅の死体のもとへと足を運ぶ。

「何故なら、『彼女』が二人以上いると、どちらも平等に愛することに無駄な神経を使わなければならないからだ。だから私はいつも右手だけ連れて帰るし、匂ってくるまでは他の女性に手出しはしない。」

妹紅の死体の傍に立ち、見下ろして囁く。

「さあ、『君』を迎え入れるために、元『彼女』とは手を切った。

喜んで私のもとに来てくれるな？」

しゃがみ、まだ温かい右手を優しく持ち上げ、唇を寄せて語りかける。

「『君』の元持ち主は、私の秘密を知ってしまった。悲しいだろうが、これも二人の幸せのためだ……

大丈夫、ちゃんと火葬してあげるさ……、いや、爆葬かな……？」

ふつとため息をつき、キラークイーンの腕を振り上げる。

「さあッ！今ッ！私のもとにッ！！」

【キラークイーン】の手刀がまさに振り下ろされる瞬間ッ！！

「ぐおあッ！！」

吉影が妹紅の手から手を放す。

「あ、熱いッ！！なんだ！？どういうことだ！？脈はなかったはず！！」

ふと顔を上げると、妹紅の身体から煙が上がっていた。

「ま、まさかこれがッ…！？」

もしこれが妹紅の言っていたことなら、一刻も早くこの場から離れねばならない。だが、すでに妹紅は焰を上げて燃え始めていた。

「（まずいッ！！彼女の遺言がこれを指していたなら、今すぐ離れないと吹き飛ばされるッ！！）」

「【キラークイーン】！！」

吉影は後ろに高跳びの背面飛びのように飛び、キラークイーンの腹部のスペースに飛び込んだ。キラークイーンがシャッターを閉め、大きくバツクジャンプしたその時！！

ドグオオオオオオオオオオオオオオ！！！！

妹紅の死体が爆発し、爆炎が襲い掛かってきた！！

それは【キラークイーン】の爆発とは比較しようもないほどの威力で迫り来る！！

「（まずい！！、マズ過ぎるッ！！このままでは、跡形もなく燃え尽きてしまう！！）」

伊達に爆弾使つてない彼は、こんなもの直撃したら火傷じゃ済まないことも、このままでは爆炎に呑み込まれてしまうことも分かっていた。

「（あれだッ！あれをやるしかない！！）」

「【キラークイーン】！爆弾を解除しろオッ！！」

先程ルーミアの背中に撃ち込んだ爆弾を解除し、持っていた小石を爆弾に変える。

「うおおおおおおおおお〜ッ!!」

小石を爆発させ、爆風で後ろにぶっ飛ぶ。指が裂け、血が噴き出す。だが、このおかげで爆炎から逃れることに成功した。

「ぐああッ!?!」

樹木の幹に打ち付けられたが、キラークイーンがクッションになつてくれたので、ダメージは少なくて済んだ。

「な…なんだ…これ…は…!?!」

ズルズルと木の根元に座り込んだ吉影の目の前では、人外魔境が展開されていた。森は半径数十メートルが消し飛び、爆炎が渦を巻いていた。

その地獄の業火の竜巻は中央に圧縮されて、やがて消滅する。煙がもうもうと立ち込める。何も見えない。

「ゲホッゲホッ…」

咳き込みながらもキラークイーンの目で警戒していると、徐々に煙は晴れていき…

「じょ…冗談だろう…?」

掠り傷ひとつなく、平然と立っている妹紅の姿があった。

「う〜ん、気絶してから絶命するまで時間かかってしまったようだな…」

茫然としている吉影の視線の先で、妹紅は十時間バッチリ眠った後にスッキリお目覚めしたかのようにあくびをして、辺りをキョロキョロと見回し、

「うわっ…コイツら、もしかしてみんな川尻がやったのか…?」

妖怪の死体の山を発見し、吉影のように茫然とした。

「(ま、マズイ…どうすればいい!?!)」

吉影が必死にこの大ピンチを切り抜ける方法を考え始めた二秒後、

「おお、川尻!無事だったか!?!」

あっさりと妹紅に見付かった。

「あ、ああ、妹紅こそ何故…」

「あんだ、さっきも訊いたけど、そいつはなん

だい？」

しかもあまりに慌てていたため、血飛沫を浴びたキラークイーンを引っ込めることを忘れていた。ハツと気付いたが、時すでに時間切れ、妹紅は吉影の目の前まで歩み寄り、ジロジロとキラークイーンを観察した。

「慧音からはお前が何か能力を持つてるなんて聞いてないが…彼女にも黙っていたのか？」

妹紅が疑惑の目を彼に向ける。当たり前だ、無力だと思って護ってやっていた者が、本当は滅茶苦茶な強さをもっていたのだから。

「いや、違うんだ、これは…」

「じゃあそいつはなんだ？この肥やしの山はなんだ？どうして隠していたんだ？」

もはや言い訳はできない。絶体絶命の大ピンチ。

そこで問題だ！この絶望的な状況をどうやって切り抜けるか？

三択 ひとつだけ選びなさい

答え？天才の吉影は突如打開策がひらめく

答え？困ったときはとりあえずSATSU GAI

答え？大人しく白状しかない。現実是非情である。

「（？はあり得ない、？は逆に殺されかねない…やはり？…か…だが、ただでは白状しない…！）」

吉影はふっ、と悲しげに笑い、空を見上げると、独り言のように呟いた。

「君には…わからないだろうな、自分の存在が

【非常識】や【迷信】である者の気持ちは……………」

妹紅がハツ、と息を飲むのを視界の隅に確認し、吉影は続ける。

「わたしは自分のこの【キラークイーン】を見る時、いつも思い出す……………」

子供の頃、小学校 【こちら】で言う寺子屋のことだが……………」

…そこでわたしの担任教師と母が話しているのを、【コイツ】で盗み聞きした。

『川尻さん、お宅の浩作くんは友達を全く作ろうとしません。そう、嫌われているというより全く人とうちとけないのです。担任教師としてとても心配です。』  
母はこう答えた。

『それが…』

恥ずかしいことですが…親である…私にも…なにが原因なのか…』

子供の時から思っていた。町に住んでいるとそれはたくさんの人と出会う。しかし、普通の人たちは一生で真に気持ちがかよい合う人がいたい何人いるのだろうか？？小学校のクラスの人、くんのアドレス帳は友人の名前と電話番号でいっぱいだ。50人ぐらいはいるのだろうか？100人ぐらいだろうか？

母には父がいる。父には母がいる。

『自分は違う。』

TVに出ている人とかロックスターはきつと何万人といるんだろうな。

『自分は違う。』

『自分にはきつと一生誰ひとりとして現れないだろう。』

『なぜなら、この【キラークイーン】が見える友達は誰もいないのだから…』

見えない人間と真に気持ちがかよう筈がない。』

…だから、実を言うと、少し嬉しかった…あのルーミアという少女が、わたしのように【能力】を使った時は…

…でも、彼女もわたしを認めてくれなかった。わたしを人間だと、外人人だと言って。だから、わたしはここでも秘密にしておこうと思ったんだ。だれもわたしを、わたしのことを、理解してくれることは…

「違う！！」

吉影は妹紅の張り上げた大声に驚き、彼女に目を向けた。

「違う、違うんだ！！あなたを理解してくれる人はきつといる！

いや、わ、私は分かる、分かるんだ、あなたの気持ちが……」

「分かる？フツッ、気休めなら結構だ。君はこの【非常識】の世界で暮らしているじゃないか。それなのに……」

「いや、私は……、私は外の世界で生まれた。今から千年以上前に……」

「……なんだって……？千年……だと……？」

「そうだ、私は元々、普通の人間だった。それがあある時、感情に身を任せてしまつて……」

それから、各地を転々として生きてきた。この外見でまったく成長しない私を、人々は不気味がつて、長居はできなかつた……

そうしているうちに、この幻想の地にたどり着いた。驚いたよ、見たこともない化け物が、群れをなして襲つてくるもんだから……

でも、この幻想郷にも、私のように不死身の者は居なかつた……私は人も妖怪も見境なく襲つていった。憎かつたんだ、私を置いて変化していくこの世が……

次第に生きる気力もなくして、ただ死んでいないだけの無為な暮らしをおくっていた。そんな時……」

死人のような生氣のない目で淡々と話していた妹紅の目に、光が灯つた。

「…… 慧音に出会つたんだ。」

彼女も私のように迫害を受けていた。でも、彼女は諦めなかつた。

どれだけ避けられても、どれだけ罵声を浴びせられても、人間に認められようとしていた……そんな彼女に、私は言つたんだ、『なんでそんなことをしてるんだ？認められるわけがないのに、なんで力も使わず、黙つてやられてるんだ？』つてな。そしたら彼女は言うんだ、『なら試しに君に認めてもらおうかな？』と。私は鼻で笑つたが、それから毎日私の家に来てくれてな。手料理を作つてくれたり、服を繕つてくれたりした。私は冷たくあしらつたが、内心とても嬉しかつた。私を本気で理解しようとしてくれて……

それからほどなく、私達は親友になつた。今では私達を蔑む人間は

いない。慧音は念願の教師をやってるし、私は竹林の医者への案内をやっている。案内してあげると、みんな感謝してくれるんだ。『ありがとう、これで子供は助かる』ってな。だから今では、この肉体を憎んではないよ。生きているのは素晴らしいことだと思えるようになった。慧音のお陰だ…

あつ、アイツも加えるべきかな…？」

「アイツ？」

「ああ、竹林の医者小屋敷にいるやつでな、私の宿敵だよ。そいつも不死身でなあ、よく殺し合っているんだ。私と本気で殺り合えるのは、アイツだけだから…」

「…殺し合いで生きている実感がわくのか…まったくもって【非常識】だな…」

「ハハツ、そうだろう？だから、川尻、あんたも怖れることはないんだ、きつと慧音も人里の人間も理解してくれるだろうさ。」

「フツツ、そうかもな。だが頼む、誰にも言わないでくれ。いつかこの世界を去る前に、人々と打ち解けてから自分の口で話したい。

慧音には帰ってから言うことにするよ。」

「そうかい、分かってくれたんだな。」

「ああ、よく考えたら、君らも能力を持っているのに、怖れる必要なんてなかった。まったく、自分が不甲斐ないな。」

「そんなことないよ。人がトラウマってものに抗うのは難しいからな。」

妹紅の目には、もう疑惑の色は見るともなかつた。

「ところで、そんな血まみれの格好で神社に行く気かい？」

吉影が自分の服に目を落とすと、それは猟奇殺人鬼が（まあ実際そうだが）一遊びした後のようだった。しかし彼は狼狽えたりしない。

「ああ、それなら大丈夫だ。」

【キラークイーン】を引っ込める。キラークイーンに付いていた血や臓物がボタボタと落ちる。

吉影は大して大きな素振りもせず、彼の最も信頼する相棒の名を呼んだ。

「【キラークイーン】！」

【キラークイーン】が彼の身体から飛び出す。同時に、彼の服や顔に付いていた血肉が【キラークイーン】の身体に押し出されてバラバラと落ち、一瞬で普段の綺麗な姿に戻った。

「おお、便利だなあ……」

妹紅が感心して呟く。

「ところで、ルーミアはどうしたんだ？」

ハツと吉影は彼女の倒れていた場所を見た。血溜まりは焼けてよく見ないと分からないようになっていたが、そこに彼女の死体はなかった。跡形もなく蒸発してしまったのかと思っただが、どうやら違わらしかった。そこから離れた場所に、小さな血溜まりができていた。さらにそこから点々と血痕が森の中へと続いていた。

「さっきの爆発で吹き飛んで逃げて行ったようだ。」

「ああ、そのようだな。まあこの程度の出血では死ぬことはないだろう。」

ルーミアがその前にどれほど出血していたかを知らない妹紅が呑気にいう。

「（よし、とりあえず、ルーミアを半殺しにしたことはばれていない……」

息の根をとめることはできなかったが、あれだけ痛めつけたのだからもうわたしに喧嘩を売るようなことはないだろう。妹紅もなんとか抑えられた……あとは慧音だが、能力を知らせないでいたほうがむしろつかり能力を使ってしまったとき面倒なことになる……切り札を見せてしまうのは不安だが、問題を抱えたまま生活を送るよりは教えたほうが良いかもしれない。」

内心ほくそえんでいる吉影の目で、妹紅は背を向け中腰になった。

「さあ、予定よりだいぶ遅れてしまった。早く乗ってくれ。」



「あ、ああ、そうだな。分かった。」

吉影が妹紅におぶさると、

「さあて、ぶっ飛ばして行くよ!!しっかり掴まりな!!」

「よし、さっきのようにはいかないからな!!」

「ハハツ、覚悟しなよ!」

木々の枝をぶち折って、日がやや西に傾き始めた空へと飛び出して行った。

二人は気付かなかった。二人を見つめる二つの眼に。その智謀に富んだ狡猾そうな双眸に。

その瞳の持ち主はニヤニヤと期待に満ちた薄笑いを浮かべ、

「フッフ、特ダネの匂いがプンプンしますね…」

記者として胸が高鳴らずにはいられませんよ……」

小さくなっていく二人の後ろ姿に、シャッターをきった。

「死体のない亡霊……!?!」

「ええ、そうです。外の幽霊や亡霊には詳しくありませんが、彼には死体とのリンクの反応はありません。」

「…亡霊ということは、周囲の生き物に害を与える可能性は…」

「その心配はありません。彼の精神は比較的安定していますし、幻想郷の環境と適応しているため、害を与えることはないでしょう。」

ただ……」

「ただ……？」

「亡霊に死体が無いなんてケースは専門外なので師匠に直接診断していたただかないと何とも言えないんですが、もし彼が

」

生、  
先生

「先生、どうしたの？もう答えを書いたよ？」  
ハツと慧音は我に返る。

「ああ、すまなかった、3日前の歴史編纂の疲れが残っているようだ。」

慧音は誤魔化したがる、その時生徒の一人がニヤリと笑ってからかった。

「先生、もしかして、あの外来人のこと考えてた？」

「うっ！！」

ビクツと体を震わせた慧音の様子を見て、やはり凶星かと生徒達はニヤニヤしながら追い打ちをかける。

「ねえ、あの外来人とはどこまでいったの？」

「あつ、もしかしてもう【お楽しみ】……」

「ああ、そのせいで寝不足なんだね！」

慧音は生徒達の囁し立てに顔を真っ赤にして、

「だあああ……！静かにしろ……！今日の授業はここまで……！早く帰ってお母さんの手伝いをするんだ……！」

「わあ……先生が怒った……！」

生徒達はキヤツキヤツと笑いながらバタバタと教室を出ていった。

「ふう〜、まったく…。」

慧音は一人ため息をついた。

「しかし、心配だな…」

慧音は窓から日がかなり西に傾いた空を見上げた。

「私のしたことは、本当に、正しかったのだから…」

慧音は再び、深い溜め息をついた

#### 第四話 復讐と露見 後編（後書き）

御覧いただきありがとうございました。

ルーミアには損な役回りを演じてもらいましたが、いかがだったでしょうか。今後もこのような暴力的展開は続くので、無理だと思われる方は読むのを止めすることをお勧めいたします。

## 第五話 鉄拳交渉（前書き）

少し遅くなりましたが、第五話です。

なかなか納得のいく文章にすることができず、苦労しました。

【ジョジョの奇妙な東方Project@Wiki <http://www.w28.atwiki.jp/shinatumiki/pagees/1.html>】より転載。

## 第五話 鉄拳交渉

「で、その博麗霊夢という巫女はどんな人物なんだね？」

「そうだな、けっこうあつさりした奴だけど、直情的な感じかな。」

「そうか……第一印象を良くするためには、やはり賽銭を入れたほうがいいだろうか？」

「ああ、大当たりだな。どうも金に困ってるらしくて、神社に来る奴にはよく賽銭を要求しているらしい。」

「うむ……慧音からもらった小遣いで足りるだろうか……？」

「それは大丈夫だろう。金に汚いとよく言われているけど、意外と異変解決とかは真面目にやってるし、実際ただの外来人相手に

能力持つてるけど とにかく露骨に金をせびるなんてことはないはずだ。」

二人は、博麗神社の石段を上っていた。さすがに妹紅の背に背負われて巫女の前に登場するのはバツが悪いので、吉影は自分の足でかなりの長さの石段を登っていた。以前の彼なら、ばてていたかもしれないが、何故かこの世界に来てからは【スタンド】以外に身体の調子も良かったので、楽に足が進む。

「ところで、博麗神社ってのは、なんの神様を祀っているんだね？」

「あゝそれがな………、よく分からないんだ。」

「……どういうことだ？」

「巫女本人も分かっていないらしいんだよ。」

彼に合わせて飛ばずに石段を上っている妹紅が、何でもないと言う風にさらりと答えた。

「大丈夫なのか？」

「は？何が？」

「そんな巫女に結界の管理を任せて、不安じゃないか？」

「うゝん、結界の管理に神様は関係ないし、それで困ることはない



二人の目が吉影に向いたのを見計らって、吉影は話を始める。

「わたしは川尻浩作、3日前この世界に迷い込んだ者だ。博麗の巫女なら外に帰してくれると聞いたから来たが、頼めるだろうか。」

吉影はあえて敬語を使わずに言った。妹紅の話を聞いたかぎりでは、あまり堅苦しいことは嫌いそうだったからだ。

「何で私がそんなことしなきゃいけないのよ。」

霊夢は明らかに何か見返りを要求する素振りを見せている。

「（……）  
妹紅の話通り、金を欲しがっているようだ。  
ならば……）」

彼は無言で霊夢の脇を通り過ぎ、賽銭箱へと足を進めた。背中二期待に満ちた視線を感じながら、ゆっくりと歩み寄り、賽銭箱の前で財布を取り出す。

「（……）やはり相手の望む物を渡してやるべきだろうな。」  
財布の中身を、音がよく響くように賽銭箱の中に放り込んだ。

チャリンチャリンチャリン……

心地よい音が境内に響く。あえて【二拝二拍手一拝】をしなかったのは、この巫女はそんな上っ面だけの【形式】よりもストレートな

【取引】のほうが好きだと見たからだ。

「（……さて、効果のほどは……）」

吉影が振り返ると、彼女はさっきの不機嫌さが嘘のように柔らかい笑顔を浮かべていた。

「あら、ありがとう。神様は礼儀正しい人には優しいわよ。」

霊夢はにこやかに話しかける。

「（……）  
分かりやすい奴で良かった。」

では、早速だが、外の世界に帰る方法を……」

吉影が二人のところに戻ってきた時だった。

「妹紅、悪いけど石段の下に下りて待っててくれる？」

霊夢が妹紅にかなりつつけんどんに言い放った。

「……  
どういうことだ？私が居たら何か不都合なのか？」



妹紅が靈夢の口調にややむっとして言う。

「そうよ、これから私は彼と【交渉】するのよ。あなたが居たら一対一で【取引】ができないじゃない。分かっただらさっさと下りてっ  
て。」

「……………」

妹紅が靈夢を睨む。無言で彼女の考えを読み取るうとする。それを靈夢は平然と見返す。しばしの間境内が穏やかではない空気に包まれる。吉影はやや焦りを感じながらその様子を見守っていたが、やがて妹紅が引き下がり、吉影に『上手くやりな』とジエスチャーをして鳥居をくぐって下りて行った。

境内に残ったのは、吉影と靈夢の二人となった。そして

「（…なんだ…？何故こいつはこれほどピリピリしている…？）」  
妹紅のくぐった鳥居を見つめる靈夢の横顔からは、尋常じゃない覇気が漏れ出していた。

「（…まずいな…、何時でも外に帰れるよう手筈を整えさせないと  
いけないのに…」

…とにかく会話をしなければ…）」

吉影が話しかけるタイミングを窺っていた時だった。

「！？」

靈夢がサツと顔を吉影に向け、

「胸ポケット、右手首、左右ズボンポケット、

襟の裏、懐のポケット、左靴…………」

「ッ！？！！」

彼は、不覚にも目の前の少女に驚きの表情を見せてしまった。何故なら

「何故分かった…？透視能力の類いか…？それともまさか心を読んだ…！？」

彼がいざというときのために服のあちこちに隠

しておいた金の在処をすべての中させてしまったからである。

「残念ながら違つわ。貴方が巫女を舐めすぎたっただけよ。」  
霊夢が吉影にゆっくりと歩み寄る。

「心配しなくてもいいわよ、別にお金を隠していたからといって、【手数料】アップしたりはしないから。」

「（嘘だツ……こいつは、叩けば出ると分かったなら肉片になるまでぶん殴った後でローラーで絞り出すタイプ……わたしの長年の経験がそう告げているツ……）」

平穩無事な生活を望む彼は人との付き合いにも注意を払っていた。その人物がどういった性格なのか、自分の平和を脅かす可能性はなにか、気を付けて観察するうち、彼には相手の人格を読み取る能力が備わっていた。

「だって、あなたを見た瞬間からそんな端金なんて御布施してもらおうと考えていなかったから。」

吉影はスタンドを出したりせず、精神的に身構える。

「……………いくらだ？」

彼女は大したことじゃないとでも言うように、サラリと言い放った。

「なん…だと…!？」

3日ほど人里で慧音の買物に付き合ったり店の商品を見たりしていた彼は、幻想郷の貨幣価値をだいたい把握していた。だから苦もなく理解し、ストレートに衝撃を受けた。霊夢の要求した途方もない金額に。

「そんな…無茶だ！一体どうやってそんな金を……………」

「あら、やっぱりあなた巫女をなめているのね。」

「なめている…だって…？」

不条理な要求に沸き上がる怒りを懸命に抑えて彼は聞き返す。霊夢は彼を頭の天辺から爪先まで眺め直し、

「さっきお金が入ってるって言った胸ポケット、

腕時計が入ってるわね。さっさと出しなさい。」  
有無を言わさぬ霊夢の口調に吉影は渋々腕時計を取り出す。

「言っておくが壊れてい  
「分かってるわよ。でも修理は出来そうだし、なんとなく高そうなの  
秀困気してるわ。魔法の森に香霖堂っていう外の世界の品物を扱っ  
てる店があるから、そこで売ればそれなりの値段にはなるんじゃない  
い？」

「……………は…？」

「それと、服も納めなさい。妖怪の間では流通しているけど、人里  
では洋服はあまり出回ってないのよ。価値は高くつくはずよ。  
あと何でしたっけ、【しゃーペン】？だったかしら。墨が無くても  
ものが書ける筆、あれも売り払いなさい。珍しいし便利だから、結  
構な足しになるはずだわ。」

あとアレ、【ケータイ】？外来人が耳に当てる箱、あれも奉納なさ  
い。人里じゃなくて山の河童達に売るのが良いわ。あいつら【外】  
の機械に興味津々だから、目の色変えて涎垂らして飛び付くわよ。  
それと、【幻想入り】した時にまさか手ぶらだったなんて事はない  
わよね、カバンも中身と一緒に洗いざらい売りに出しなさい。

それでも多分足りないでしょうけど、そのときは人里で職を見つけ  
てあくせく労働していればいいわ。【外の世界】で暮らしていたん  
だから、働くの得意でしょう？」

「…ッ！…！！？」

とんでもないことを口走る霊夢を、吉影は思わず怒りをあらわにし  
て睨み付ける。

「身ぐるみ剥ぐ」と言うのか…？このわたしを…！！？」  
まだ本気で殺気を滲ませてはいなかったからか、完全に吉影を軽く  
見ているのか、霊夢は彼の視線をさらりと受け流し、平然と言いつ  
つ。

「ふん、どう受け取っても結構よ。でも、あなたを外に帰すのは私  
にしかできないし、それを考えたら希少価値を含めてそのくらい当

然ではないかしら？」

吉影は、はらわたの煮えたぎる思いだった。

「（こ、この金の亡者が……！！間違いない、こいつはわたしをなめきっているッ！ただの外来人だと思っ込んでいるッ……！！）」

彼は爆ぜんばかりに沸騰する憤怒を表に出さぬよう気をはりつめ、静かに懐から一枚の貨幣を取り出す。

「　　そうか……分かった……よく分かった……」

貨幣をコイントスをするように、握った右手の親指にのせた。

「ならば君の言うとおりになければな……」

【キラークイーン】の腕を出現させ、自身の腕と重複させる。

「（わたしの最も嫌いなことは……他人に注目されることだ。わたし自身について何か知られることだ。だがそれと同じくらい……ッ……）」

キラークイーンの指先が貨幣に触れる。貨幣は一切の動きを表さず、静かに変化する。

「君がそれほどまでに望むというのなら……」

賽銭箱に狙いを定める。怒りに震える右手を抑える。

「（　　コケにされることがッ！大嫌いだッ……）」

くれてやるッ！賽銭箱がはち切れんばかりの御布施をなッ……」

【キラークイーン】の親指が貨幣を賽銭箱にぶち込もうとした瞬間、ドオオオン……！！

「　　え　　？」

吉影の身体が、宙を舞った。

「なんっ……！？くばあッ……！！」

額に強烈な衝撃を受け、頭を大きく後ろに反らし、彼は後ろにぶっ飛んで行った。空中できりもみに回転し飛ばされている最中、【キラークイーン】が賽銭箱に放り込むはずだった貨幣がクルクルと回ってあらぬ方へと飛んで行き、林に消えるのが見えた。

「あぐっ……！？」

石畳に叩き付けられ、吉影は呻いた。

「(な……何が起こった……!!?何を…ッされた……!!?)」  
あちこち痛む身体を何とか動かし、霊夢の方を見ようと顔を上げた時だった。

「!!!?ッ」

彼の身長よりデカイ紅白陰陽玉が襲い掛かって来た。【キラークイーン】で防御する間も無く、陰陽玉は滅茶苦茶な威力で彼を巻き込み、彼を岩肌叩きつける。

陰陽玉と岩に挟み込まれ、吉影の肋骨がメキメキと軋むッ!

「ぐがああああッ!?!」

ガクリとつぶせに崩れる吉影。弾幕と岩にぶつけられた全身がバラバラに砕けそうに痛む。力が入らない。強く胸を押し潰された息も絶え絶えだ。

「な、なにをつ……わたしはただ……お…御布施をしようとな……」

吉影は苦痛に顔を歪めながらも、なんとか声を絞り出す。霊夢はそんな彼に歩み寄ろうともせずただ佇み悠然と見下ろす。

「……あなた、やっぱり巫女をなめきってるわね。仏の顔も三度という名言を知らないのかしら?」

彼女は何処から取り出したのか、お祓い棒を吉影に突き付け、怒気を籠めた声で言い放った。

「博麗神社の敷地内で、この私に喧嘩を売ろうだなんて、良い度胸してるわね。いいわ、買ってあげるわよ、その喧嘩。ただし、損害分はあなた持ちよ。しっかり請求してあげるわ。」

「(ま、マズい…このクソガキ、どうやったか知らないが、貨幣を爆弾に変えたことが分かっているッ…!いや、さっきからの何もかも分かっているかのような言動…!!?神通力かなにかか…!?)」

吉影は、この傷付いた身体でとにかく戦闘ができるように策を練る。

「(クソッ…身体が動かん……【キラークイーン】はなんとか動かせそうだが、回復を待つ間気を逸らさなければ……)」

吉影は苦しげに呻いて顔を上げ、霊夢に弱々しい視線を向ける。

「 ……なんの………こと……だ？私は喧嘩を売ったつもりなど………」

「しらばっくれるんじゃないわよ、なんか仕込んだんでしょ、さっきのお金に。あなたが普通の外来人じゃないことぐらい、一目見た瞬間から分かってたわよ。」

「霊夢はかなりキレた様子だった。空気がピリピリと怒りを肌に伝える。」

「（ぐっ………やはり完全にバれている………」

「だが、この守銭奴も【スタンド使い】というわけではない………流石に我が【キラークイーン】の動きを完璧に読むことはできまいッ………」

「………」  
「ぐっ………」

「だが、ちょっと待て………お前は博麗の巫女なんだろう…？【スペルカードルール】を定めた張本人が、いくら外来人相手とはいえ、【スペルカード】を使わずに戦ったらマズいんじゃないかね………」

「今度はキツと霊夢を睨み付ける。会話をしながら、【キラークイーン】の調子確かめる。」

「あら、あれは【スペルカード】宣言なんて必要ないわ。通常弾幕だから。」

「！？」  
「なにイ…？あれが………つ………通常弾幕……だ……と………！？」

「吉影が驚愕の表情を作った。」

「そうよ、だからスペルなんていらなのよ。まあ、そんなこと言ってもあなたがルール守って決闘するなんて思っていないけど………」  
「霊夢が宙に浮かぶ。ゆっくりと、重力から解放されたように、静かに、フワリと浮かび上がる。」

「さあ、どうかしら、身体の調子は？立ち上がれるかしら？戦闘ができるようになったかしら？」

「ッ…？」

(くそっ！バレていたのかッ！！)「

はっと顔を上げる吉影の様子を見て、霊夢が懐から一枚の【カード】を取り出した。

「じゃあ、戦えるようになったところで、トドメをさすわよ。せつかくだから、土産話にスペカ弾幕をプレゼントしてあげるわ。外に帰ったら自慢しなさい

何十年も先の話でしょ

うけどねっ！」

スペルカードを頭上に掲げ、霊夢が宣言しようとした。だがその時…

「ククッ……………」

顔を伏せ、吉影が笑い声をもらした。

カードを掲げたまま、霊夢は吉影を睨む。

「ククッ……………クククッ…フフフ……………」

「……………なにが可笑しいのよ、ムカつくわね気持ち悪い。」

霊夢が苛ついた口調で吐き捨てる。

吉影はしばらく笑っていた。と思ったら震えながらもゆっくりと身体を起こし、顔を上げた。

「いや…いいことを聞いたかと思ってね…本当に…すごくいいことを……………」

吉影がゆらりと立ち上がる。霊夢に面と向かって目を見据える。その目には、確かな希望が宿っていた。

「……………なによ、良いことって。さっきのが通常弾幕だったってことかしら？私の話が有益だったっていうんなら、情報料を払いなさい。」

「フフッ…惜しいな…その後の言葉だよ……………」

「……………?」

「どんなに強力な弾幕でも、【通常弾幕】なら【スペルカード】が不要だということだ……………ククククククッ…これでわたしも【ルール】に守られた身に危険が迫ることのない【決闘】ができるということが証明されたんだよ……………」

吉影は両足に力をこめ、しっかりと身体を支える。背筋を伸ばし、

幻想郷の少女たちからすればかなりの長身となる175センチの肉体をしゃんと立たせる。

「さあ…これから【決闘】を始める前に、念のために先に言わせてもらおう……………」

次元大介の早打ちのように一瞬で【キラークイーン】を出現させるッ！！

「これは【通常弾幕】だッ！！」

【キラークイーン】が右手のスイッチを押すッ！  
ドグオオオオオオ！！

「きゃあッ!？」

耳をつんざく爆裂音が、先程貨幣がすっ飛んでいった方角から大音量で発せられた。流星の霊夢もこの音は堪えたようで、耳を押さえつけてフラフラとしている。

「『【キラークイーン】第1の爆弾』…………君の耳はしばらく使い物にならなくなった……………」

吉影は耳を塞いでいた【キラークイーン】の指を退けさせる。

「当たりだよ…大当たりだ……………さっきの貨幣は【キラークイーン】によって【爆弾】に変えておいた……………」

まあ、いくらわたしが喋っても今の君には何も聞こえないだろうがな……………」

彼は軽く手足を動かしてみる。

「（まだ鈍い痛みがあるが、少し我慢すれば戦うのに支障はなさそうだ……………【キラークイーン】も問題無く動かせる。）」

戦闘が可能であることを確認すると、吉影は足下の小石を拾い上げ、【キラークイーン】に射撃体勢をとらせる。

「本当は君にブチ込んでやりたいが…………この世界の最重要人物を【始末】してしまつてはわたしの【平穩】に関わるし、何よりわたしが外に帰ることができなくなつてしまつ……………」

ならばここはひとつ……………」

【キラークイーン】に照準を賣銭箱に定めさせる。



「君が確実にわたしの要求を飲むよう、脅迫の材料を確保するとしようッ！」

「ビシィッ!!」

【キラークイーン】の親指が、爆弾に変えられた小石を弾き発射した。

「さあッ!きさまの大切な賽銭箱は、わたしの掌の中だッ!」

小石は賽銭箱目掛けて一直線に飛んで行く。境内の上を空気を切り裂いて、正確な狙いで向かって行く。

だが

「な…ッ!?!」

霊夢の横を通り抜けて行くはずだった小石は、空中で何かに衝突したように霊夢の手前で弾かれ、コツンという音をたてて石畳の上に落ちた。

「夢符『二重結界』」

吉影がよく目を凝らすと、霊夢の周りは正方形の青白いオーラのようなもので囲まれていた。

「なんだと……ッ妖怪ですら昏倒寸前になる【爆音】を受けて、なお闘えるなどッ!?!」

驚愕し、声をあげる吉影の様子を見て、霊夢は顔をしかめさせて独り言を呟いた。

「ああ、耳が痛い…なんにも聞こえないわ…」

「ブンブンと頭を振り、意識をはつきりさせ、改めて吉影を見据える。

「あなた、どうやら『音を操る程度の能力』を持つてるようね。それと、何か強力な【力】を操ることができる……外の同業者?いや、まさかね……精々【背後霊】ってどこかしら?」

「ッ……」

吉影はギリッと歯を噛み締める。

「(くそっ!スタンドのことまでッ!まだ小石を飛ばしただけだというのに……)」

霊夢はさらに苛々とした様子で叫んだ。

「ああもつつ！自分の声も聞こえないなんて、話なんてできっこないわー！！」

彼女はブンブンとお祓い棒を振り回し、吉影に突き付ける。

「まっ、話なんかよりも、【こつち】の方が得意なんだけど。」

「ぐっ！」

「生意気な外来人に教えてあげないといけないわね！『挑発には弾幕』というここ（幻想郷）の礼儀作法をッ！授業料は高くつくわよー！！」

彼女がお祓い棒を一振りすると、

「なツツツ！？」

吉影は目を見開き驚愕した。彼の視界を埋め尽くしたのは、無数の陰陽弾と、隙間が見えないほど密集したばらまき弾だった。

「うおおおおオオオオッ！！【キラークイーン】！！」

スタンドを完全に出現させ、拳の乱舞で迎え撃つ。巨大陰陽弾をへしゃげさせ、叩き潰し、ぶっ飛ばす。

だが

「ぬおオオオオあああッ！！」

熊に群がる蜂の如く襲いかかる光弾が、【キラークイーン】の身体を打つ！巨大陰陽弾に手いっぱいにはそれらを弾くことなど到底できず、彼の身体は傷付いていくばかりだった。そして遂に

「ぐばあー！！」

弾幕が顎に直撃し、派手にぶっ飛ばされる。さらに林の奥へと飛ばされ、背中から岩に激突する。

「ぐあッ！ウググ……………！！」

彼は地面にへたり込みそうになるのをなんとかこらえ、顔をあげた。実際には立っているのがやっとどころか、立っていることすらできないほど弱っていたが、それでも彼は最後の力を振り絞り、沸き上がる憤怒を隠さず霊夢を睨み付ける。



霊夢はフワリと真上に浮き上がり、

「叩き落とせばいいだけよ！」

懐から【スペルカード】を取り出し、頭上に掲げ宣言する。

「神霊『夢想封印』！！」

「むっ！？」

霊夢を中心に、先程の【通常弹幕】とは比べ物にならないほどの巨大な紅白陰陽弾が現れた。それらはギョルンギャルンと高速回転し、岩の欠片をかき消していく。さらに、

「くそっ！」

その内の何発かは吉影に向かって来た。しかもどうやら彼の動きをホーミングしているらしく、彼の動きを正確に予測して狙ってくる。「まだこんな強力な技を……………」

「だがッ！！」

【キラークイーン】が右手のスイッチを押した。

ドグオオオオオオオオオ

！！

岩の破片が爆発し、爆炎が霊夢の『夢想封印』を破壊した。

「えっ、【爆発】」

霊夢が『目を見開き』、一瞬の怯みを見せた時、

「いつ…！？」

突然両目に痛みが走り、反射的に目を閉じる。

「痛っ…何よこれ…！？」

目をこする彼女を見て、吉影は口角を上げた。

「【第一の爆弾】ッ！自慢の弹幕でも塵は撃墜できまいッ…………」

完全に視力を失った霊夢を見上げ、勝ち誇った笑いを上げる吉影。

「さらにこれでッ肉弾戦に持ち込める！我が【キラークイーン】のパワーとスピードに、目も見えずに太刀打ちできるはずがないッ！！」

【キラークイーン】の脚で跳躍し、霊夢の正面に現れ、勝利の声を上げる。

「勝った！！喰らえッ！！」

【キラークイーン】の拳が霊夢の脳天を狙う。

「しばっ!」

拳が、振り下ろされた。

ドガアッ!

【キラークイーン】の拳が、少女の脳天を捉えた。

少なくとも、吉良吉影はそう思っていた。

だが

「

え?」

勝利を確信していた彼は、顔面に重い衝撃を受け、顔を歪めた。

「えっ!」

【キラークイーン】の振り下ろした腕は、お祓い棒に受け流され、

彼の顔面には霊夢の拳がめり込んでいた。

「えっ!?! なん…ッ? はぐっ!?!」

さらに腹に数発パンチを受け、吉影はまた空に叩き上げられる。

「(こ…このクソアマツ…まさか…【キラークイーン】のパワー

とスピードに勝ったというのかッ!?! そんな…事が…ヤツは人間だ

ぞ…?! しかも目も見えないというのに…そんな…馬鹿なことが…

!?!)」

錯乱し状況が理解できないまま、吉影は為す術無く宙を舞う。

「ハッ!?!」

霊夢は既に彼の隣にいた。吉影は咄嗟に【キラークイーン】の腕で

ガードの構えをとった。

が、

「ぶげあああっ!?!」

踵落としが腹部に叩き込まれた。彼の内臓に強烈な衝撃が与えられ、

呼吸不能になる。

「（は…速すぎる…強すぎる！なんだ？承太郎の【スタープラチナ】とは違った感覚…まるで【重力】の束縛から解放されたように、【無限の加速】のごとき速さだ…！！）」

彼はガクリと首を落とし、そのまま仰向けに落下していった。

全身を襲う激痛に苛まれていた間も、地面はグングン近付いて来る。気が遠くなりかけながらも、気力で意識を繋ぎ止め反射的に【キラークイーン】の腕で身を守った。

グシャッ！！

「ぐばあー！！」

境内の石畳に叩き付けられ、一瞬息が詰まる。

「ぐがっ！ゲホッ……………！！」

咳き込み、苦しげに呼吸をする。

「……………あの守銭奴……………スタンドの攻撃を受け止め、わたしの【キラークイーン】を上回るスピードで……………」

背中中の痛みに呻き、動けず仰向けに倒れている吉影の側に、霊夢がフワリと着地する。

「……………何度言われたら気が済むの？あなた、巫

女をなめすぎよ。」

霊夢は倒れた吉影に向かって、お祓い棒を突き付けた。

「まだやるつもりなの？そんなに死に急いで何がしたいのかしら？」

「ッ……………」

【キラークイーン】の手で石畳を引き剥がそうとしていた吉影は、息を飲み動きを止める。

「しょうがないわね。そんなになっても闘いたいのなら……………」

霊夢がバツクジャンプで距離を取り、お祓い棒を振り上げる。

「まったく、疲れるから嫌なのよね、コレ。」

ブツブツとなにか呪文のような言葉を呟き、お祓い棒を振って祈祷する霊夢。それを見ながら何もできず、歯軋りして死にかけのカナブンのように這いつくばる吉影。吉影が固唾を飲んで見つめる前で、

祈祷はものの数秒で完了した。

あまのいわとわけのみこと  
「天石門別命」

霊夢が厳かに呟いた。

「……………ッ！！！！？」

ゴオッ！！

吉影は唯一動かせる目すら見開いたまま固まってしまった。

「なっ！なんっ…！！？」

宙に浮く霊夢の足下に、漆黒の円が出現した。

「そ、それは…！！」

ゴオオオオオオオオオオ

円は石畳を呑み込みながら拡がっていく。

「【ルーミアの闇】と同じ……………？」

いやッ、違う！これは……………これはッ…！！」

拡散する闇の円盤が、吉影の身体を呑み込もうと目前に迫って来た。

「これは……………【穴】だ！途方もなく深い【穴】だッ…！！」

闇が到達し、吉影の身体を支える石畳をかき消した。身体がガクッ  
と穴に堕ち込もうとする。

「【キラークイーン】ッ…！！」

彼は自分の【スタンド】の名を叫び、穴から引き揚げさせようとした。  
た。

だがしかし……………

「なあッ

！？」

【キラークイーン】は彼の呼び掛けには応えなかった。

「なんだとオオオオオ

！？」

吉影の両腕からは、なれ親しんだ筋骨隆々の腕のビジョンは現れず、

【穴】の淵へと伸ばした手は空を切った。

「そんな…バカな…！！スタンドが封じられるなど…！！」

彼の身体は重力に従い、伺い知ることのできない闇の底へと向かい  
始めた。

「うわああああああああああああああああああああああああああ





どんなヒドイ時にこそ…最悪の時にこそ、【チャンス】というものは訪れるという過去からの教訓。それが彼の高い知能を覚醒させた。「いや、それ以前に、この【穴】はなんだ？ 墮ち始めた瞬間に見たが、この穴には側面があった…実際に見たり聞いたりしたことはないが、【空間の狭間】とかなら横にも無限に広がっているんじゃないか？」

吉影はハッと閃いた。強く輝く希望が、光が、彼の精神を照らす。奈落の闇の侵略を止め、絶望を打ち払う。

「そうかッ！これは…これは【夢】だッ！！わたしの中だけで起こっている、ただの【夢】ッ！」

彼の身体が、落下を止めた。重力から解き放たれたように、フワリと浮き上がる。

「これは…幻覚だ…！！」

彼の身体から光が漏れ出した。光は闇を消し飛ばし、拡散し、染み渡っていく。彼の視界いっぱいにかわいらしい光が広がっていった

……………

「……………は……………っ……………」

彼は目を開けた。その目の1cm下には、境内の石畳が広がっていた。

「……………」

吉影が顔を上げると、そこには靴があった。その上にあるのは、彼を見下ろす霊夢の姿。

「たいした外来人ね、あなた。神様の幻覚を看破するなんて。なめ

ていたのはお互い様ってことね。でも……」

言葉とは裏腹にたいした感動もなく霊夢は話し掛ける。

「もう動けないんでしょ？指先一本……」

「ぬうう……」

吉影は呻くことしかできない。実際、先程の幻覚による精神ダメージで彼は【キラークイーン】を動かすことができずにいた。

「もう決着はついたわよ。早く帰りなさい。まっ、その様子じゃ歩けないでしょうけど。」

射程距離に入っているのに何もできず、悔しさを噛み締める吉影。そんな状況で……

「おいっ！なんださっきの光と弾幕は！？いったい何を……！！」  
妹紅が文字通り飛んで来て鳥居をくぐり、そしてこの光景を目撃した。

「お、おいっ？川尻、どうしたんだ！？何故そんな傷だらけに……」  
彼女の目が霊夢に移る。

「霊夢っ！お前っ川尻をこんなにしたのかつ！彼は外来人だぞ？何故こんな……」

「（まずいつ妹紅に介入されては、さらに話がこじれてしまう……こっちから先制攻撃したこともバレてはまずいし、何より……妹紅ではコイツには勝てないッ！）」

怒りに髪から火花を散らす妹紅を、吉影は呼び止める。

「やめろ……妹紅……」

「川尻！？どうしてだ？こいつは……」

「いや……いいんだ……これは二人で同意して行った【スペルカード戦】の結果……わたしが負けた、それだけだ……」

「【スペルカード】？霊夢っ！お前っ川尻に何故そんなことを……」

「あら、【交渉】が決裂したからよ。幻想郷での争いの解決方法がこれだって話したら、あっさり乗ってくれたわ。」

「なん……だと……？お前から持ち掛けたのか！？卑怯なっ！そんなこ

とを言ったら、川尻は戦うしかないじゃないか!」

「妹紅、【スペルカードルール】では、負けた方がおとなしく引き下がるのだろう? だったらルールにしたがって……………」

「何を言っているっ! こんなヒドイ出来レースにルール違反もへったくれもあるか!」

「妹紅…頼む、お願いだ…………ここで言い争っても何も解決しない。

それよりもわたしは人里に戻りたいんだ…………早く診療所に行きたい……………」

「……………川尻……………」

吉影の弱々しい声に、妹紅はひとまず怒りを抑え、彼の所まで飛び、彼に肩を貸した。吉影はボロボロの身体に力をこめ、なんとか立ち上がる。

「お帰りのようね。じゃ、夜道に気を付けて。」

霊夢は無愛想にそれだけ言い残すと、二人に背を向け神社に戻ろうと……………」

「……………?」

霊夢は身震いして振り返る。その先では、妹紅に肩を貸されて鳥居をくぐるうとしていた吉影が、こちらを振り返っていた。

「(何…? いま、一瞬だけ、とてつもない…………【殺気】…………が…………!?)」

吉影は、妹紅に悟られないように、正確に霊夢だけを射抜くように、殺気を発した。

霊夢をギロリと睨み、心の中ではただひとつのことが渦巻き反響していた。

霊夢…確かに彼女は強い。今の吉影では、本気で殺すつもりで闘っても、いくら策を練っても、到底敵わない。だが殺意、憎悪をこめて睨み付ける。

霊夢との闘いの中で、吉影は【絶望】したことはあったが、【恐怖】を感じたことは一度もなかった。

霊夢からは微塵も殺意や殺気が感じられなかったからだ。つまり、彼女は吉影を殺すつもりなど毛ほどもなかった。

また、そのことは彼女が【外の闘争】を経験したことはないことも表していた。

つまり、狂気の殺人鬼と楽園の素敵な巫女では、殺し、殺されかけた経験が桁違いなのだ。吉影にはそれがよく分かっていて。だから彼は心の中で繰り返して、呪詛のように呟いた。

「（【始末】してやる…！）」

霊夢から目を離し、妹紅の背におぶさりながら、吉影は憑かれたようにそう繰り返していた。

「（【始末】してやるぞ…！わたしに【赤っ恥】の【コキッ恥】をかかせてくれた、守銭奴巫女…！わたしの【平穏な暮らし】を邪魔してくれたクソアマ…！きさまの生きてきた十数年の間、殺しも残虐もないぬるま湯の世界の中で、感じたこともなかった【死の恐怖】を味わわせてやる…！！）」

二人は鳥居をくぐり、沈みゆく夕日の方角へと飛び出していった。

境内にひとり残った霊夢は、がらにもなく真剣な表情をして、ポツリと呟いた。

「  
晩御飯、何にしようかしら…？」

## 第五話 鉄拳交渉（後書き）

第五話、いかがだったでしょうか。

楽しんでいただけたなら幸いです。

霊夢には悪役を演じてもらいましたが、私は彼女を【自由奔放】と捉えているので、悪者っぽく描くのに苦労しました。

次回からはつかの間の日常パートです。お楽しみに。

第六話 今にも荒れだしそうな空の下で 前編（前書き）

第六話です。予告通り、つかの間の日常パートです。お楽しみください。

前話までとは違い大幅な書き直しを行っていないので、未熟な文章になっております。ご了承ください。

【ジョジョの奇妙な東方Project@Wiki <http://www28.atwiki.jp/shinatuiki/page/s/1.html>】より転載。

第六話 今にも荒れだしそうな空の下で 前編

日もすっかり沈み、妖怪のお客様を迎える支度に忙しく賑やかな人里。その忙しげな物音からそう遠くない寺子屋は、昼間の生徒たちの騒ぎ声が嘘のように静まりかえっていた。その明かりの見当たらない玄關の引き戸が、静かに開かれた。

「……………」  
開かれた引き戸の間から、妹紅が音も無く家に入った。ただいまの一声もなくフラフラと2、3歩進んだかと思うと、バタリと倒れこむ。彼女がただいまと言わなかったのは、別に帰宅が遅かったことを慧音に怒られたくなかったからではなく、声も出ないほど弱りきっていたからだ。

「ゲホツ…ゴホツ…、ゼエ…」  
妹紅は苦しげに咳をした。彼女の息は引き戸の隙間から聞こえる表の居酒屋のオヤジの声をかき消すほど荒く、激しかった。

開いた引き戸から鋭い光が玄關を控えめに照らした。淡い明かりの中倒れ込む妹紅の服は、顔は、髪は、血に染まっていた。長く艶やかな彼女の白髪は今では固まった血によって赤黒く変化している。ふっと彼女の伏せた顔を照らしていた光が、影にすり変わって消えた。ピクリと妹紅が顔をあげ、衰弱した身体を強引に使役し、震えながらもなんとか振り返る。

引き戸の隙間には、玄關への射光を遮った影の所有者の姿があった。彼の自慢の背広からは大量の鮮血がレインコートの上であるかのよう弾かれてポタポタと流れ落ちていた。

「か…川尻…」

逆光によって影になっている顔からはその表情を読み取ることは

できなかつたが、その口が獣のような荒い息づかいを刻んでいることは見るまでもなかつた。

「川尻：川尻：か…勘弁してくれ…」

妹紅が懸命に声を絞り出す。その悲痛な響きが聞こえているのかい  
ないのか、彼はユラリと引き戸の隙間を抜け、なにかに取り憑かれ  
たようなフラリフラリとした足取りで動けない妹紅へとにじり寄っ  
た。影が妹紅の足元から膝、腰、胸、顔へと、ゆっくりと覆い被さ  
るように彼女の四肢に重なっていく。ガクガクと震え喘ぐ妹紅の目  
前に吉影が迫り…その場で崩れ落ちた。

「ガフツ…ゼエ…ハア…ゼエ…ハア…だ、だから何度も言っただろ  
う…と…飛ばしすぎだ、つて…！」

「ハア…ゴホツ…だつて…日も暮れてしまったし…急がないといけ  
なかつたから…それに、時間がかかったのはか…川尻が、無視して  
いい妖怪まで相手してたからだろう…？」

「あ…あれは君のアクロバット飛行を止めさせよう…」

そう、二人は日没後の森の上空を人里目指して飛んで帰っていたの  
だが、それと同時に進行して夜になって活発化した妖怪共との壮絶な  
死闘を繰り広げていたのだ。吉影を背負っているため思うように戦  
えない妹紅と、霊夢の件でイライラがピークに達していた吉影。二  
人のモチベーションの相違が波瀾万丈の夜空の逃避行を演出したの  
は言うまでもなかつた。

二人はそのまましばらく玄関に倒れ附し、荒い息を整えていた。床  
が妖怪共の返り血で汚れるのも構わず。

「そう言えば…慧音は、どうしたんだ？」

「明かりがついてなかつたから、多分買物かなにかで外出して  
るんだろ。」 息が鎮まってきた二人が寝転んだまま会話する。

「あゝあ、血でべとべとだ。慧音に怒られるう…」

「全くだ、早いところ洗い流して乾いた綺麗な服を着たい…」



「ど〜かん…。早くひとつ風呂浴びて風呂あがり酒を一杯…」  
ザツと二人は同時に立ち上がり、さっきまでの瀕死状態は見る影も無く、我先にと風呂場に向かって走りだした。この時間なら慧音はすでに風呂をわかしているはずだったし、二人共お互いに長風呂であることは知っていた。早く全身の血鏝の臭いから開放されたい二人は、相手より先に風呂場へ滑り込む必要があったのだ。競走は飛び疲れて走ることしかできない妹紅に比べて、キラークイーンの脚を使える吉影の方が有利に進んだ。コーナーをザザツツとドリフトする吉影、その後ろに食い付く妹紅。バタバタと大人げない争いを繰り広げて風呂場へ向かう二人。さあ、勝者は…

吉影だった。彼は妹紅を僅かにリードし、ラストスパートをかけて風呂場の入口にたどり着い…

「ひゃあっ!?!」  
「…ッ!?!」

ザザツツと急ブレーキをかけ風呂場の入口を覗き込んだ吉影が見た光景は、一糸纏わぬ姿で佇んでいた慧音だった。

吉影は驚きに目を見開き、慧音は突然の出来事にバスタオルで身体を隠すことすら忘れていた。

慧音の肌は血色がよく赤みがかつていて柔らかな質感を付加し、頬は上気し艶やかな肌と胸の谷間は健康的な彼女の四肢を一層美しく見せていた。

さらに身体から立ち上る湯気、滴るお湯は甘い香りを広げ、幻想的な雰囲気醸し出していた。

そんな健全な男子なら酩酊すること必至の状況下で慧音は言い知れぬ動悸を感じていた。

彼女の心臓が一気に跳ね上がり、身体が真夏の直射日光を浴びているかのようにカツと熱を帯びる。

ドクン…ドクン…、

鼓動が耳の奥で響く。

そして…

「すまなかった。」

その状況は一瞬で消え失せた。吉影は慧音に気付いた瞬間顔を背け、ばつが悪そうにそう言つと、いとも淡泊に立ち去つていった。ひとりぽつんと残された慧音はしばらく呆然としていたが、正気に戻ると、

「…なんだ、この敗北感は…」  
すっかり凹んで長い溜め息をついた。

「おいおい川尻、あんた慧音の裸見ても何も思わないのか？」

だいたい状況の予測はできている妹紅がからかい半分驚き半分で吉影に話し掛ける。

「思春期はとつくに過ぎているからな。」

「いや、それは多分関係ない…」

「慧音が服を着るまでの間、着替えを持つてくることにする。」

吉影はそそくさと自分が貸してもらっている部屋へと向かった。

彼が慧音の裸体を見ても心が動かなかったのは、彼の特殊すぎる嗜好のせいだ。知つてのとおり、彼は女性の手首に性的魅力を感じる独特の趣味がある。つまり、彼にとって女性の最も魅力的な部分は手首であり、一般的な女性はそれらを恥じることなく露出させているため、今更衣服の有無など問題ではないのだ。ある意味、羨ましい男である。

「…というわけだ。」

「…まさか霊夢が…博霊の巫女ともあろう人間が…」

「なんだ川尻、そんな大変なことだったならやっぱりあの時に…」

「いや、いくら闘いで打ちのめしたとしても彼女が首を縦に振ると

は思えないし、何より君は彼女に勝てるのか？」

「……………」  
妹紅が悔しそうに俯いて黙り込む。

その後、吉影、妹紅の順に風呂に入り、遅めの夕食をとった後、三人はちゃぶ台を囲んで話をしていた。吉影は博霊神社で起こったことを、自分を悪者にせず、なおかつ二人をあまり刺激しないよう、オブラートに包んで話して聞かせた。吉影の話術はうまくいったようで、二人は激昂するのではなく霊夢の異常に狼狽した様子だった。

「……………」  
ところで、話を逸らして悪いが、君の能力と  
いうのは……………」

慧音が興味を持ったのか問い掛けた。

「ああ、わたしはそれを『キラークイーン』と呼んでいる。精神エネルギーの具現化というべきかな。容姿は…こんな感じだ。」

キラークイーンに筆で紙に自画像を描かせた。精密動作性が上がったおかげで、かなりうまく描くことができた。

「ほう…これが『キラークイーン』、君の能力か……………」

慧音と妹紅が紙を覗き込んだ。その猫とドクロを合わせたような、不気味な顔を持つ人型の異形をまじまじと凝視する。

「これを使って少し離れた物を持って来たり、物を壊したりできる。特殊な能力は…そうだな、幻想郷風に言うなら…『花火を作る程度の能力』かな。」

「花火？」

「そう、音と光を出すことができる。」  
「なるほど……………」

二人が顔を上げ、吉影に目を向けた。彼はすまなさそうに、

「悪かった、君達を騙して……………」

「いや、謝る必要なんてない。外の世界で【能力】を持っていたらどうなるか、君がどんな人生を送ってきたか、うつすらとなら分かる。こちらこそすまなかつたな、君の心の傷に気付けなくて……………」

「……………」

「他の人物には、言わないでくよ。君が決心をつけるまで…」

「…ありがとう、慧音。」

「当然だ。君の安全は、私が責任を持つ。だから安心してくれ。」

ひとしきり会話が終わり、残る話題はひとつ、最も大きな問題だった。

「…あのさあ、そんなお金どうやって貯める？」

妹紅が仕方なく切り出した。吉影と慧音は押し黙る。妹紅も慧音もそんな大金はない。

「…働いて地道に稼いでいくのかなさそうだな。」吉影が憂鬱そうに呟く。他の二人は俯いていたが、慧音がパツと顔を上げ、

「そうだ！私の寺子屋で教師をやってみないか？」

「教師…？」

「そう、私は歴史が専門で、他の教科はあまり得意じゃないんだ。

川尻なら数学や外の科学を教えられるだろう？」

「いや、まあ、確かにできないことはないが…」

「じゃあ、話は決まりだ。早速明日からやってみてくれ。」

「…分かった、頑張れるだけやってみよう。」

吉影は渋々承諾した。彼は二流で文系とは言え大学卒だし、あれだつて本当はもつと上を目指せたが、あえて抑えたのだ。数学なら問題ないし、科学も簡単な素材で実験はできる。彼にとって問題なのは、人里の子供に注目されることだ。彼はどちらかと言うとあまり子供が好きではないし、その親にも注目されることになる。だが、いつまでも謎の外来人ではそちらの方が目立つ。ここはあえて危険を冒して自分を好人物だと人里の住民達に思わせるべきだ。彼は決心した。もう人里の中では『クソガキ』という言葉を使わないことを。

「しかし、そうなるとわたしの給料は君が負担してくれるのか？そ

うなら君に迷惑じゃ…」

「大丈夫、寺子屋の経営費はすべて人里全体が負担している。君の給料なら人里が負担してくれるはずだ。」

「そうか、ならいい。」

「じゃあ、早速明日の授業の予定をたてようか。私の部屋へ来てくれ。妹紅、君は…?」

「ああ、今日は疲れたから泊まっていくことにするよ。空いてる部屋で勝手に布団敷いてもう寝ることにする。」

「そうか、じゃあ、川尻、付いて来てくれ。」

「あ、ああ…。」

吉影も早いとこ眠りたかったが、慧音について部屋を後にした。

#### 翌日

「さあ、お前達、こちらが今日から数学と科学を教えてください。川尻先生だ。くれぐれも迷惑にならないように。」

「はあい、先生。」

吉影は教卓に立っていた。彼は生徒達の好奇心の視線集中砲火の中、気を落ち着けて自己紹介を始めた。

「わたしは川尻浩作、皆知っているだろうが外来人だ。今日から君達に…」

「あれ、川尻先生?」

最前列の生徒が声をあげた。吉影が目を向けると、その生徒は二ヤニヤ笑い、

「『わたしは慧音先生の夫になる男だ』が抜けてるんじゃない?」

吉影が首をかしげるが、生徒達は爆笑して

「よかったね慧音先生! いい男が外からやってきて!」

「川尻先生優しそうで物静かそうだしね!」

「何となくエリートって感じするし!」

「だいたい、先生も未婚なんでもったいないと思ってたんだよ、前

から！」

「ねえねえ、慧音先生とはどこまでいったの？」

吉影はどう扱ったものかと慧音に目を向けたが、彼より彼女の方が慌てふためいていた。

「うるさい！川尻先生の初授業だぞ！変な質問をするんじゃない！早く宿題を提出しろ！」

顔を真っ赤にして怒鳴る慧音を見て生徒達も満足したのか、後ろの席から前へとノートが回されていく。慧音は最前列の生徒からノートを集めると、

「じゃあ、後は任せた。頑張ってくれ。」

そそくさと教室から立ち去った。

教卓に残された吉影は、予定通りに準備を進める。

「先生、それなに？」

静かになつた生徒達が、吉影が取り出したものを見て質問する。

「ああ、これは銅線を正方形に曲げたものだ。」

吉影は言いながら着々と準備をしていく。回路を繋ぎ、最後に人里の診療所、竹林の薬剤師の病院支部で買った塩酸をセットする。

「よく見えない者は前に出て来なさい。」

後ろの席の生徒が教卓の周りに集まる。生徒達の期待が高まる中、

吉影は塩酸に銅板と亜鉛板を入れた。ブクブクと泡ができ、銅板と亜鉛板に銅線で繋げたモーター（ちゃんと磁石を配置してある）が、クルクルと回った。

「おおー！！！」

生徒達が感動の声を漏らす。吉影はスイッチを切ってモーターを止め、またつけて回すということを何度か繰り返す。生徒達の目は好奇心で輝いていた。

「先生、どうしてなにもしてないのにコレは回るの？」

「ああ、それは簡単に言うと、電気が流れるからだ。」

「デンキ？」

「そうだ。君達が見たことあるのは、例えば雷や静電気

冬に服を着る時のビリツとくるやつがそれだ。」

「ええっ！？雷は神様の力なのに、あんなセコイいたずらにも使われてるの？」

慧音に『あまり子供達に幻想郷の概念を壊すようなことは教えないでくれ』と言われていたので、吉影は適当に答えることにした。

「雷は神様が電気を使って起こして、ビリツとくるやつはただの自然現象、この実験の電気はこの液体から出ているんだ。」

「ふうん、雷って冬のアレを神様が使い方を変えて起こしてたんだ。」

納得顔をする生徒達。「ねえ、なんでその『デンキ』が流れるとコレが回るの？なんで『デンキ』ができるの？」

「ああ、説明できるが、多分聞いても分からないぞ。」

「それでもいい！教えて！」

「…分かった。じゃあ…」

黒板に図を描き、説明を始める。

「まずどうやって塩酸から電気が流れるかだがそれは塩化水素HClが水中で水素イオンと塩化物イオンに電離して、亜鉛は銅よりイオン化傾向が大きい。そのため塩化物イオンの電子に引き寄せられて電子を残して塩酸中に溶け出し、その残された電子が亜鉛板から銅線を通って銅板にたどり着き、その電子を水素イオンが受け取って水素が泡となって出て来るんだ。そして何故モーターが回るかというと電気が流れると磁界が変化するという性質があつて、磁場と電流の相互作用【ローレンツ力】による力を利用して回転運動を出力、半回転し、ブラシによつて電流の向きが変わるからさらに半回転、また向きが変わってさらに半回転…と繰り返して連続回転するんだ分かったか？」

生徒達の頭上には、大きく『？』が浮かんでいた。

「どうだった、初めての授業は？」

「ああ、成功だ。科学は理解させることはできなかったが、興味を持つてくれたようだし、数学も文字式

外ではaだ

とかxだとか使うところをカタカナに置き換えて教えたらずくに理解したようだった。この調子だと、三日くらいで方程式を教えられるだろう。」

「そうか、それは良かった。」

吉影と慧音の二人はちゃぶ台で向かい合って夕食を食べていた。

「今日はまだだが、明日からは宿題の答え合わせをしなければならぬから、忙しくなるぞ。」

「そうだな。」

「宿題ノートはその日の内に返すのが一番良いから、私が授業をしている間に答え合わせをしてくれ。」

「…そうだな。」

「ノートには一言ずつコメントを書いて欲しい。それがあると生徒達のやる気が大分違うんだ。」

「……………」

「…川尻、どうしたんだ？ずっと俯いて。」  
ハツと吉影は顔をあげる。

「い、いや、明日の授業はどうしようか考えててね…」

嘘だ。彼はずっと鑑賞していたのだ、慧音の手首を。ゆるみかけていた頬を慌てて引き締め、彼は誤魔化す。

「そうか、熱心で何よりだ。」

慧音が微笑む。

「そりゃあ、これから7、8年は続けていかなければならないからな…」

しばし沈黙が流れる。生活費は慧音が負担してくれるので余計な買い物をしなければ給料はそのまま貯えになるが、それでも霊夢の要



求した金額に達するにはそれだけの年月がかかるのだ。

「なあ、川尻…」

慧音がそつと顔をあげ、慎重に言った。

「ここで暮らしていく気はないか？」

「…は？」

吉影は呆気にとられた表情を浮かべ、慧音を見る。

「いや、違うんだ！そういう意味じゃなくて…！！」

慧音は顔を真っ赤にして慌てるが、吉影は別に誤解してなどいない。

「それじゃ本末転倒じゃないか。わたしは外に帰るために働いているというのに…」

慧音が自分の深読みに顔を赤らめ、焦りつつも言う。

「今すぐじゃなくていい。でも、少し考えておいてくれ。」

「…すまないが、わたしは何年かかっても外に帰るつもりだ。わたしには帰らなければならない理由がある。親の面倒をみななければならない。」

「…そうか、すまなかった…」

慧音がまた俯き、会話が途切れ食事を再開する。吉影も箸を動かすが、彼は実際には味なんて感じないほど上の空だった。

「（ああ…美しい…【君】はなんて美しいんだ…！）」

吉影は【彼女】に目を落とす。その滑らかな指が、上品かつ妖艶な動きで箸を操る様子を観る。その柔らかなすべすべの白い肌が醸し出す、背徳的なまでの魅力を、五感で感じるさまを想像する。

「（わたしは…わたしは絶対に【君】を連れ帰るぞ…！！たとえ何年先になろうとも、『君』をわたしの【恋人】にして、外に連れ帰ってやるぞ…！だから、それまでどうかそのまま置いてくれ…！今のままの、綺麗で若々しい姿でいてくれ…！！）」

吉影は心の底で、固く硬く決心し、願った。

第六話 今にも荒れだしそうな空の下で 前編（後書き）

第六話、いかがでしたか。楽しんでいただけたなら幸いです。  
次回も日常パートです。お楽しみに。

第七話 今にも荒れだしそうな空の下で 後編(前書き)

第七話です。つかの間の日常パートです。お楽しみください。  
大幅な書き直しを行っていないので、未熟な文章となっております。  
ご了承ください。

【ジョジョの奇妙な東方Project@Wiki <http://www28.atwiki.jp/shinatuiki/page/s/1.html>】より転載。

## 第七話 今にも荒れだしそうな空の下で 後編

人間の里、そこは幻想郷に在る中で最も多くの人間が住む場所である。

幻想郷の人間のほとんどはここに住んでいて、人間が生活に必要なものは全てここで手に入れることができる。

この里は幻想郷の中でも人間にとって非常に安全に暮らせる場所である。なぜなら、人間がいなくなると幻想郷が維持できなくなるため、妖怪の賢者がここを保護しているのである。

つまり、平和な現在の幻想郷においても形骸化しつつも残されている「妖怪は人間を襲い、人間は妖怪を退治する」という幻想郷のルールの例外的な場所なのだ。そのため妖怪が暴れるとしたら妖怪の個人的な感情によるものであるため、めったに無い。また、妖怪退治が出来る力を持った人間もここで暮らしているため、例え妖怪が暴れたとしても下級妖怪程度なら取り押さえられるので、妖怪による被害はほとんど無いのだ。

また、この人里は人間だけでなく、妖怪にとっても魅力的な場所である。幻想郷の妖怪は天狗や河童などを除いて、大部分は一人一族でまとまりなく暮らしている。そのため大規模な居酒屋だとか道具屋とかはあまりない。しかし、人里にはそれらがあり、中には夜間は妖怪専門店として営業している店もある。仲間意識の薄めな妖怪達にとって、人間の里は「大抵のものは売っている二十四時間営業の雑貨店」であり、「他の妖怪や人間達と酒を飲みながら世間話できるのんびりした場所」であり、「お楽しみがいっぱい」なのだ。

そして彼にとってもきつと「お楽しみがいっぱい」…

ガリガリガリガリ……………

「くっ…」

吉良吉川影は、慧音の家の自分が借りている部屋にいた。彼は爪を噛みながら、窓から外を食い入るように覗いている。その視線の先には、人と妖怪が賑やかに過ごす、夜の人里の情景。

「（人は自分の心の底を『他人』に隠したまま生活している……しかし…永遠に誰にも『自分の本性』を隠したまま一生をすごせるものだろうか？）」

吉影の瞳に映るのは、服装からして恐らく妖怪であろう、おしゃべりしながら歩く三人の美しい女。

「（くそっ！あの一番右側の女にこの吉良吉影の『本性』を打ち明けてやりたい…あの女に この『心の底』を聞いてもらいたい！

おまえの、その細い首を、この手で絞め殺してみたいってことをな…！）」

彼が幻想郷に流れ着いて一週間、彼の殺人衝動は臨界点に達していた。吉影は今にも溢れ出しそうな情動を必死に抑えつける。爪がミシミシと音をたてて伸びる。

「（ヘタな行動をとると本体が人間や妖怪にバレてしまう……だが、ここ【幻想郷】に来てから少しおさまっていた衝動が、またぶり返してきた……気持ちを抑えられなくなる。）」

ガリッ

強く噛み締めたため、爪が傷付き、血が滲む。

と、後ろで足音がしたので、慌てて机に戻り、椅子に腰を下ろす。

ガラッ

「あ、あの、えと…、川尻…御茶を淹れたんだが…」

慧音が遠慮がちに襖を開け、部屋に入ってきた。机に向かっている

吉影の背中に気付く。

「あつ、し、仕事でだったか…、すまなかったな…」

慧音は妙に緊張しながら、ノートに二次方程式の問題を書いている吉影の脇に立ち、湯呑みが乗った御盆を置いた。

「あつ、あの、川尻…、仕事にすまないが…そろそろ夕飯の時間だ。きりのいいところで一旦切り上げて、一緒に食べないか？」

「……………」

無言の吉影の背中を見て、『分かった』というサインだと受け取った慧音は、くるりと踵を返し、

「冷めないうちに来てくれ。」

吉影の背中にそう言い残し、慧音が部屋を出ようと襖に向かう。

「……………怪しまれずに済んだか……………」

緊張が解け、一息吐いた。張り詰めていた気が緩んだからだろう、慧音が部屋を出て行くのを確認しようと、振り返った。『振り返ってしまった』。

「……………ッ!?）」

その瞬間、吉影の目に映るのは、無防備な女性の背中のみとなった。彼の双眸が釘付けになる。ユラリと立ち上がった吉影の瞳の奥で、影が蠢く。

「……………この女に『心』を打ち明ける

……………」

衝動が、吉影の身体を支配する。殺人鬼が、警戒心も何もない、安心しきった背中へと歩み寄る。

「……………自分の『本性』を見せてやれ 吉良吉

影……………」

目の前の女性の首に、両手が伸びる。己の手が、女の命の灯火を消し去る瞬間を、その瞬間を待ち望む。声が徐々に細り、かすれ、己の両腕の中で冷たくなっていく感触を渴望する。

「……………おまえの首を絞めさせてくれと！打ち明けるんだ…!!）」

吉影の指先が、慧音の首に掛かろうとした瞬間

「はっ!？」

慧音が気配を感じて振り返った。吉影はハッと正気に戻り、両手は狙いを外れて慧音の服の後ろ襟に掛かる。

「うわあああああッ!？」

バリバリと服の背中が裂け、シャツが露になる。そして、破れた服の中から、小さな虫が飛び出した。

「か…川尻!？」

驚きに息を粗くし、ペタリと座り込む慧音。頬を紅潮させ、吉影を見上げている。

「(…しまった…打ち明けるのはまずい…『ここ』の住人達にバ…  
してしまっ…『気持ちをおさえる』…おさえるんだ…)」

「驚かして…すまない」

慧音はまだ床に座り込み、胸の動悸を抑えられなかった。

ドクン ドクン ドクン ドクン…

「(虫を払おうとしてくれたのか…お、驚いた…)  
い、いや、ありがとう…服の事は気にしないでくれ、替えはたくさんあるから…」

慧音が息を整え、気を落ち着けて立ち上がる。

「……………先に行って待っている。」

吉影は彼女の横を抜けて、部屋から出て行った。

慧音は着替えに彼女の部屋に行き、吉影は彼女に言われたとおり食堂へと向かう。

「(あ、危ないところだった…虫がいなければ、バレていたかもしれない…)」

食堂への廊下を歩きながら、吉影は安堵の溜め息をついた。

「(…この連中は、皆気配だとか、魔力とかいったものに敏感だ…  
下手をすれば殺気だけでバレてしまっかもしれない。もっと自分を  
抑えられるように努力しなければ…)」

硬く自分を戒め、食堂の襖を開いた。

ガラッ

パ~~~~ン!!

「!?!?!?!?!」

頭上で炸裂する破裂音、視界を掻き消す紙吹雪、そして顔面を直撃する紙の帯。

「えっ?えっ!?!?なッ!?!?えッ!?!?」

吉影が何が何やら分からずに彼らしくなく慌てふためき、顔に張り付く紙の帯をひっぺがした。その紙を顔の前にかざし、それが何なのか確認して…

「ぎやはははは!!川尻がこんな慌ててきよとんとしてるとこ初めてみたよ!!」

「ちよつとてゐ!?!?なんで顔に直撃するのよ!あなた絶対わざとでしょ!?!」

「人聞きの悪いこと言うねえ、外来人の男がこんなに背が高いとは思わなかっただけさね。」

「嘘を言うな嘘を!!ちゃんと身長教えてでしょ!!」

「とにかく、本日のメインゲストがいらっしやったことだし、さあ、早いとこ始めるわよ!」

吉影は、紙に書かれた文字に目を落とす、そして呆然としていた。

『川尻浩作 幻想入り一週間記念』

彼は自分の頭上にぶら下がる割られたくす玉から部屋の中へと目を移す。そこには、腹を抱えて爆笑している妹紅、頭から兎の耳を生やした二人の少女、長く艶やかな黒髪を持つ少女、銀髪が美しい赤と青の鮮やかな色彩の服の女性。

「(こ、これは…)」

吉影は彼女達を知っていた。ブレザー姿の少女は確か鈴仙、愛称はうどんげという、永琳の弟子だ。たまに人里に来て薬を売ったり診療所で簡単な診察をしたりしている。吉影も幻想郷に流れ着いて人里の前で気を失った時、治療を受け、それから診察してもらって



いた。初めて会った時は『何故バニーガールが診療所に居るんだ！？』と思っただが、人間ではないらしく、付け耳ではないらしかつた。銀髪で隠れた人間なら耳がついている部分はどうなっているのかすごく気になったが。

彼女に怒鳴られている同じく兎の耳が生えた少女はてゐ。一度だけ診療所で会ったことがあるが、第一印象は『要注意人物』。なにせ、診療所の戸を開けたとたん頭上に迫るたらいとの刹那の攻防を繰り広げ、その直後に「チツ、しくじったか。」と舌打ちして逃げる彼女を目撃したのだから。それから彼女の姿を見たことは無かつたが、それ以来代金を払おうとしたら代金トレイがトラバサミだったり、椅子に座ろうとしたら床が抜けたりしたので、彼は彼女のことを嫌悪していた。

平安貴族のような装いの黒髪の少女は蓬来山輝夜。妹紅の最大の宿敵であり、妹紅と同じく不死身の人物であり、『かぐや姫』その人である。初めて妹紅から聞いた時は驚愕したが、D学院大文学部卒の彼には何故妹紅  
藤原妹紅が彼女を目の敵にしているのか、その理由が、おぼろ気ながら理解できた。

正面から見て左が赤、右が青というかなり奇抜な服装の女性は、竹林の薬剤師、八意永琳。吉影は直接会ったことはなかつたが、妹紅や鈴仙の話によると、薬剤師でありながら全ての医学に精通しているらしく、實際里の人間の評判も良い。医療費がかなり良心的で、しかも生活に困窮している患者からは医療費をとらないという話から、彼はかなりの好人物だと予想していた。

それらの面子を眺め回し、吉影はようやくやく事態がのみ込めた。おそらく慧音か妹紅かのどちらかが提案し、しかし三人だけでは盛り上がり欠け、かといって里の人間を呼んでも彼が嫌がるのは目に見えている。だから鈴仙を通してある程度面識のある永遠亭のメンバーを呼んだ、といったところだろう。しかし、当の吉影はひとつも喜んでなどいなかった。

「（また面倒なことになってしまったようだな…わたしは飲み会に

はあまり行かないし、そもそもたしなむ程度しか飲まない…その上、この世界の住民は皆大酒豪ばかりだ、妹紅は既に知っているが、永遠亭の面子も恐らく…厄介なことにならなければいいが…」

「なにボ〜つと突つ立つてるんだ、早いとこ座れ！」

やっと思考回路が復旧し、思案を巡らそうとしていた吉影の手を、妹紅がぐいつと引き、吉影は半ば強引に席に付かされた。

「ん…あ…ああ…まさかこんな素敵なことを用意してくれていたなんて、驚いたよ、ありがとう…」

…ところで、妹紅…」

とりあえずお礼を言い、彼はトーンを落として『安全』を確認するため、妹紅に尋ねる。

「輝夜がいるが…その…大丈夫なのか？」

「ああ、その点は安心してくれ、今夜は…」

妹紅が立ち上がり、縁側の障子を開けた。そこには

「これで勝負だ。」

押し車に満載された、酒壺があつた。

「……………『本当に』、安心して、いいんだな…?」

吉影がその圧倒的物量に押し潰されそうになりながら、おずおずと念を押す。

「あいつも今夜は『平和的』に勝負するつつつてたし、まあ大丈夫だろ。」

「いや、不安なのはむしろ君なんだが…」

「妹紅〜！私のも運びなさいよ〜！！」

「なに甘えてやがる自分で運べ！！」

吉影の言葉に答えることなく、ギャーギャー騒ぎながら二人は酒壺を部屋に運び込み、ドンツ！と酒壺の横に座り、

「今度の勝負も私がもらうからな！」

「あらあら、私あなたに負けたことあったかしら？」

バチバチと視線を交わし、

「いざ！」

「尋常に！！！」

「勝負！！！」

酒壺に御碗を突っ込み、壮絶な『闘い』を始めた。他の面子に目を向けると、鈴仙はてゐが酒壺に粉末を盛ろうとしたのを見て怒鳴っていて、永琳は静かに、だがかなりなハイペースで酒を飲んでいたり。やはり幻想郷の住民、吉影のことなどそっちのけで好き勝手飲んで騒いでいる。と、というかそもそも祝いなんで名目で本当はただ宴会をしたかっただけなのだろう。

吉影はというと、目立たないようにちゃぶ台の前で大人しく座っていた。

「（…この空気には、なにがあっても馴染めそうにないな…）」

酒は飲まず、肴に用意されたものを面白くなさそうにつまむ。

「（…にしても、『ここ』の連中というのは本当に分からないな。」

急に宴会をしだすと思ったら、わたしや家主の慧音を放りっぱなしで飲み始めるとは…わたしとしては無理やり飲まされるよりはいいが…）」

「おっちゃん、なに湿気た面してんの？貴方のための宴会なんだから、貴方が楽しまないでいたら失礼ってもんさね。」

さっきの思考がフラグだったようだ。鈴仙をからかうのに飽きたてゐが吉影に絡んできた。

「（くそっ、面倒なことになりそうだ…）」

「…実は、あまり好きじゃないんだよ、宴会とか、酒とか…それと…」

にじり寄ってくる少女を、露骨な不快感を込めた目で睨む。

「お前のような、冗談で済むことが済まないかを区別できないヤツがな。」

「おやおや、初対面だというのに随分な不当評価だね。これでも第

一印象には気を使つてゐるのに。外のマナーの『名刺』とか渡さなかつたから?」

こういつタイプの輩は無視するのが賢明だ、吉影はそう判断し、シカトを決め込む。だが、てゐはそんなこと気にも留めず吉影にすり寄つて来て、猫なで声で話し掛ける。

「ねえ、そんな風に冷たくしないでよ。一緒に飲んで騒いで愉しくしようよ。」

肺を猫じゃらしでくすぐられるようなイライラ感が吉影を襲う。彼女から顔を背けると、妹紅と耀夜の勝負が目に入った。早くも佳境に差し掛かつたようで、二人とも髪が酒に濡れるのも構わず酒壺に頭を突つ込んでゐる。溺れているのかと思つたが酒がみるみる減つてゐることから、まだ勝負は終わつていないと分かる。と

「!?」

「ねえ、私のなになが気に入らないのさ。こんなにも若々しくつてぴちぴちなのに…なんなら、確かめてみる…?」

てゐが背中に回り込み、吉影に頬を寄せる。ふうと酒のいい匂いを含んだ吐息を漏らす。そんな彼女に、吉影の不快指数はうなぎ登りだつた。

(もし、もしお前の手が、薬包紙や注射器を握つたり、少しでもわたしの口に近付いたなら…)

吉影が、キラークイーンを発現させ、てゐの一挙手一投足を監視する。

(その時は…)

「あら、外来人は女の子のお誘いに乗つてあげる度胸もないのかしら?」

「ッ!??!」

最悪だ。もうひとり、彼の平穩を乱す人物が現れた。出来上がった永琳までもが吉影に絡んできたのだ。

「今回ばかりはてゐの言い分が正しいわね。宴会というものは、楽しむためのものよ。そんな風に肴ばかり食べているから外の世

界では精神病が蔓延しているんじゃないかしら？」

酔った永琳の手に握られていたのは

開封ホヤホヤの

一升瓶だった。

（こ、この薬剤師、まさか…）

命の危険を感じ、エスケープしようとするが、もう遅い。

「ぐっ？うっ！？」

てゐに組み付かれて抵抗する間もなく引き倒され、永琳に空いている手で掴まれて畳に押し付けられる。

「さあ、迷える現代人の心の病の治療開始よお〜」

永琳が吉影の顔に一升瓶をグツと近付ける。それを慌てて思い留まらせようとすする吉影。

「まつ待てッ！い、医者が人に一気飲みなんてさせていいのかッ！？」

「ふふ、医・者・だ・か・ら・こ・そ・よ」

永琳がにっこりと微笑む。その微笑が何よりも恐ろしい。なにかあつても手当てしてくれるという意味だろうが、逆に吉影の不安は登竜門を越えて龍へと変化しそうだった。

「うふふっ…、じゃあ冬のナマズのように大人しく…」

「お、落ち着け！本当に死…あぐッ！？」

なおも生きようと必死な吉影の口を、てゐが強引に開く。

「往生際の悪い男さねえ、これだから坊やには経験豊富な女のインストラクションが必要なのよ。」

「フフフ、そんな風に抵抗されると余計にそそられるじゃあないのお…瞬きする間に冬のナマズのように大人しくなってしまうたらつまらないわ…長い間楽しませてよ…？」

吉影の眼前に、一升瓶が迫る。吉影も二人の拘束から逃れようと必死にもがくが、妖怪相手では敵う訳がない。

「さあ、勢いよくいくから、覚悟しなさい〜」

（こ、殺される…ッ！こ、このままだと、間違いなくわたしは死んでしまうッ…！…）

吉影の目が見開かれる。憐れな視線を向けるが、二人は全く気にも留めない。

吉影の口と一升瓶との距離が、徐々に狭くなっていき……

遂に、彼の唇に、処刑の毒杯が触れようとして……

「……………?」

吉影が覚悟していたあの感覚、口を、鼻孔を、喉を焼くあの感覚は、訪れることはなかった。

吉影を救ったのは、もうひとつの手首だった。彼の眼前で、二つの手首、一升瓶を持っている手とそれを横から押さえ込む魅惑の手が、互いに交錯していた。

「永琳…嫌がつている人間に無理やり一気飲みをさせるのが医者の仕事か？」

永琳の腕を掴み、怒りを籠めた笑みを浮かべながら見下ろす慧音。やや陰つているのがより怖さを増大させる。

そんな彼女の顔を臆することなく見上げ、永琳は微笑む。

「いやあねえ、彼が浮かない顔してたから楽しんでもらおうとしたのに、結構暴れちゃったから冬のナマズのように大人しくさせようとしただけよ……」

「ほう？あなたは彼を『大人しくさせる』ためにこんないじめをしているのか？たいした思いやりだな？」

慧音の手に力が籠る。流石に酔っていても悪乗りの限度というものはわきまえているのか、永琳は吉影の口から一升瓶を遠ざけ、

「てゐ、早く離してあげなさい。」

「りょーかい師匠。」

てゐも吉影を解放し、二人は離れていった。照準を鈴仙に定めたらしい、同じような手口でてゐが彼女にすり寄っている。鈴仙が捕縛され、口に一升瓶を突っ込まれるのも時間の問題だろう。

「…隣、いいか？」

はっと顔をあげる吉影。吉影は彼の命を救った慧音の手首に目を奪われていたが、取り繕う。

「あ、ああ、構わないが……」

「そうか、邪魔をする。」

慧音が吉影の右側に座る。隣といってもちゃぶ台を使っているのは彼らだけなので、そこまで密接はしておらず、適度に距離をおいている。

「あ、ありがとう……助かったよ……」

しばし、気まずい沈黙が流れる。

(……? どういうことだ……これは……? 怒っているのか?)

いや、違う……怒っているんじゃない……不機嫌なんだ……しかし何故……?)

慧音の滲ませる雰囲気は、嫉妬や思い通りにいかないもどかしさといった感じだった。それは吉影にも何と無く分かっていった。だが、誰に嫉妬しているのか、何に対してもどかしく思っているのか、どうも理解出来なかった。

「……川尻、酒宴は嫌いなのか……?」

御猪口に注いだ酒を飲みながら、慧音が口を開く。吉影は少し考えると、答える。

「いや、別に嫌いじゃあない。……ただ……今回みたいに、わたしが『主役』になって、注目されるのは好きじゃないんだ……わたしはどちらかというと、皆が楽しそうに飲んでいるのを眺めながら隅っこで静かに飲むのが好きなんだよ……」

ここで嘘を言っても、また次に宴会をした時に困るだけなので、正直に打ち明ける。本当は宴会や酒自体あまり好きではないのだが。

「……そうか、すまなかったな、君に黙って勝手にあんな騒がしい連中を連れて来てしまった……」

「いや、わたしは感謝しているよ。わたしのためにこんな素敵なことを用意してくれて……。永遠亭の者たちとも親密になれた。だから、気にしないでくれ。」

「……………」

また二人の間に沈黙が漂う。だが、先程のものとは違い、棘のない言葉がなくとも伝わる安心を湛えた沈黙だった。

少なくとも端から見たかぎりでは。

吉影の中では、またあの『衝動』が湧き出していた。先程、『彼女』を凝視してしまったため、彼の精神は激しく掻き乱されていた。

（くそッ！すぐ側にあるというのに…何時でもわたしの下に連れて来る事が出来るのに…！！）

無意識に爪を噛もうとしていた事に気付き、右手を押さえる。頭から煩惱を追い出すため、他の事に考えを向ける。見渡すと、鈴仙はやはりてゐに羽交い締めにされて、永琳に口に一升瓶を突っ込まれていた。海老反りの体勢で呻き声も細り、目をギョルギョルと回している事から、かなりヤバイ状況だと言う事が一目で分かる。慧音の制止がなければ自分がああなっていたのだと思うと、鈴仙にはすまなかつたとは思うがほつとする。

妹紅と輝夜の勝負はどうなっているのかと見てみると、すでに決着は着いていた。輝夜は仰向けに畳の上に打ち捨てられた死体のように転がっていた

いや、どう見ても死んでいる。死因は究明しなくても確定的に明らか、急性アルコール中毒だ。そんな調子に乗った大学生のような死に様、吉影にはそれこそ死んでも死に切れない屈辱だが、どうせすぐ復活するのだからと永琳も完全にシカトしている。妹紅はというと自分の勝利に気が付いていないようだ、フラフラと危なっかしく立ってまだ酒壺へのダイブを敢行しようとしている。なるほど、何度やつても勝負がつかないわけだ。と、吉影が自らの注意を逸らしていた、その時だった。

「ッッ！！！！？」

またしても『運命』は彼に『試練』を与えてきた。

慧音が吉影に身を寄せて来たのだ。

「川尻…そんなに気難しい顔をしないで…一杯どう…？私が…御酌をして…あげるか…ら…」

慧音の顔はかなり紅潮し、蟲惑的な瞳で吉影を見上げていた。すで



にかなり酔っているのだろう、お銚子を持つ手つきがフラフラと振れている。

「い、いや、すまないが、今夜はあまり気が進まなくて……」  
はつと慧音から顔を背け、勧めを断る。

（もし……もし今酔ってしまえば、衝動を抑えられなくなる……『酔い』とは、極めて安易で最も恐ろしいことだ……不安の根源は解消されていないのに、その存在を忘れてしまつ……細やかな『心配り』が出来ず、油断が生まれる……それは浅はかで愚かしい行いだ……それだけはなんとしても避けなければ……）

吉影は懸命に己の中に巢食う化け物に抵抗する。

しかしながら、自分の意志で正しい道を選択する余地などない『ぬきさしならない状況』というのも人生の過程では存在する。そして、今彼が直面している『内面からの危機』が、まさにそれだった。

慧音の手が、妖艶な動きで彼の頬に触れたのだ。

「ツツ!?!?!」

吉影は彼のこれまでの人生で一番というほど狼狽したが、それでも彼は自我を維持しようとした。だが……

「……川尻、何故……?どうして、私から目を背けるんだ……?向かい合った時、いつも目を伏せているんだ……?私の事が、嫌いなのか……?」

慧音は更に彼の体に寄り掛かり、密接し、左腕を彼の背中に回して

なんと彼の右手に自分の右手を重ねた。

「……なッ!?!?!?!?!」

吉影が思わず驚愕の声を漏らす。右手が、全身が、ガクガクと震え始める。

「川尻……どうなんだ……?私の事が、嫌いなのか……?」

慧音の指が、みずみずしく艶やかな美貌の指が、吉影のコンサートピアニストのような指に絡みつく。『本性』に抗えず、吉影もそれに応えるように、優しく彼女の指を包む。二人の指が、お互いを求め合うように、決して離れない事を誓い合うかのように、堅く絡み

合う。

吉影の心は、満月を映し出す湖の水面の如く静かだった。己自身が、己の中に巢食う化け物が、狂わんばかりに渴望していた一滴の至福が、荒巻いていた大波を静め、澱んだ水面に落ち着きという澄んだ色を広げていく。彼の心は今、『幸福』に満たされていた。

だが、それも一時の事、『幸福』の味を知ってしまったと、それを失う事が不安になるのだ。

(離れたくない…手放したくない…)

吉影の瞳の奥で、影が蠢く。吉影の心に潜む化け物が自我という鎖から解き放たれ、鎌首をもたげる。胃壁に爪を突き立て、牙を打ち鳴らし、咆哮する。

(わたしのものにした…ただ一人、わたしだけのものにした…！いつも見えるのに手の届かなかった丘の上に咲く一輪の花を、今まさに片膝を着いて顔を寄せ、その芳香を嗅ぐ事の出来る華を、この手で摘み取りたい。この懐に仕舞い込み、胸に永久に抱いていた…！)

右手に力が籠り、慧音の右手を強く握り返す。慧音はふつと微笑み、彼の肩に頬を寄せ、寄り掛かる。己に向けられている限り無く黒い意志に気付くこともなく。

(この女に『心』を打ち明ける

自分の『本性』を見せてやれ 吉良吉影

化け物が喉を這い登って来る。舌で喉をそつと舐め、唇に指を掛け、獲物を狩るために外に顕れようとする。

(おまえの手首を

摘み取らせてくれと

満ち足りた表情で吉影の肩に頬を載せている慧音の喉に、彼の左手が蛇のようににじり寄る。

ドクン ドクン ドクン ドクン…

左手が、細い喉に掛かる。慧音は気付かない。

(打ち明けるんだ

)

左手に渾身の力を籠め、命の燭を吹き消そうとした、その時だった。

「おお〜い川尻、お前まら酔ってないのかあ〜？」

後に冷静になつて考えると、彼女こそ彼の救い主だったのかもしれない。妹紅が吉影の首に腕を回し絡んで来たのだ。

「ッ！！！！！」

吉影ははっと正気に戻り、反射的に左手を慧音の喉から離れたが、その際右手も彼女の右手から離してしまった。慧音も慌てて身体を起こし、吉影から距離をおく。自分のやっていた事に気付き、顔を真っ赤にして俯く。

（あ、危なかつた…また抑えられなくなっていたのか…）

「なああ、川尻イ、いっちょ私と『勝負』しないかあ〜？輝夜のやつ、呆気なく伸びてしまつてさあ〜。まだぜんぜん飲み足りなくつて…」

吉影は自分の過ちをすんでのところで止めてくれたことには感謝していたが、己の情動に横水を浴びせられたことへの苛立ちから、棘のある口調で答える。

「…すまないが、わたしはあまり酒は好きじゃなくてね…お断りするよ。」

だが、妹紅はニヤリと不敵に笑い、なおも吉影に絡んで来る。

「なあに言つてんだあ、川尻い？お前、私に負けるのが嫌なだけだろう、ええっ？慧音の裸見ても何も感じなかつたかと思えば、そんな玉無し野郎だったからかあ？」

プツーン

彼の中で、何かがキレた。妹紅の言葉だけじゃない、どんな時も彼の影に潜み破滅へと誘う囁きと、その口車に乗ってはならないと反発する理性、その二つの板挟みになり、やや自暴自棄になっていた彼は、その重圧から逃れようと無意識に安易な方法にすがろうとし

ていた。すなわち

「わたしは…一気飲みなんて大嫌いだ…だがッ!!」

お銚子をむんずとひっ掴み、一気に煽る。最後の一滴まで飲み干すと、ガダンとちゃぶ台を叩き、上気した顔を妹紅に向け、挑発的に睨む。

「付き合いで上司に酒を飲まされ続ける、外のサラリーマンを嘗めるなあー!!」

ニヤリと笑い、応える妹紅。

狼狽えに狼狽えている慧音を放置して、二人はザツと立ち上がり、輝夜との戦場跡に向かう。吉影が輝夜の死体を蹴り飛ばし、酒壺の横に座り込んで、

「いざ!」

「尋常に!!」

「勝負!!!!」

二人の雄叫びが人里の夜空に響き、『試合開始』のゴングが鳴った。

「そこに、居たんじゃな……」

辺りに満ちる、死の気配。そして、皮肉にもそれらが奏でる活き活きとした活気。そこは冥界、死者の通過点にして、死者も生者分け隔てなく憩いを与える、矛盾に満ちた楽園。その冥界と顕界を隔てる結界の前で、亡霊はさめざめと涙をこぼしていた。

「お前も…『こちら』に来てしまったんじゃな…わしが『こちら』に飛ばされたように…お前も、別の世界に送られてしまったんじゃな…」

亡霊は、寝間着の老人の姿をしていた。孫がいても不思議ではない

ほど年老いた男だった。

彼はなおも咽び泣いていた。二度と会えないと思われた者と再会で  
きる歓びと、かけがえのない者を護れなかった罪に。

「わしは…またお前を護ってやれなかった…生前も、死後も…じゃ  
がッ…！」

老人は溢れる涙を拭い、顔を上げる。目の前に立ち塞がる、結界を、  
キツと睨む。その目にはもはや弱さは無く、強い『覚悟』を湛えそ  
の先にある『進むべき道』を見据えていた。

「今度こそ…この世界で、お前を護ってみせるぞ…何者もお前を脅  
かすことのないよう、絶対に…！！」

老人の肉体が、色を失っていく。実体を消し、半透明になる。

老人の足が、地面を離れた。

「わしの…たった一人の、可愛い息子じゃからな…」

老人 吉良吉廣は、結界を越えた。彼は実体を消し、

ただひたすら降りていく。目指すは幻想郷、息子の待つ場所へ

t o b e c o n t i n u e d . . .

第七話 今にも荒れだしそうな空の下で 後編（後書き）

次回予告

「あなたも頑固な人ですねえ。三日三晩寝食を断つなんて、人間にはいささか頑張り過ぎじゃあないですか？」

「グググ…断った…だと…？…お前が…与えなかつたんだろぅが…！！」

「おお、こわいこわい。そんなネコとドクロを足して2で割ったよくな目で睨まないでくださいよお。あれ、そういえばあなた、此所で『取材』を初めた時から少し印象違う気がしますねえ。どこが変わったのかなあ？」

「…やつれているらだろうが…！！きさまの『拉致』『監禁』『尋問』『エトセトラのせいだ…！！』」

「あややややっ、顔つきだけでなく、口調まで悪趣味に歪んできましたねえ。そろそろ『本当のあなた』を教えてくださいてもよろしいでしょうか？」

「…こ、このクソカスが…！！」

「おやおや、何をしようというのですか？まさか、『暴力』に及ぼうとでもいうのですか？全く、これだから『シビリアン・コントロール』というものを理解しない野蛮な輩は嫌いなんですよ…」

「…どこからどう考えても野蛮なのは貴様の方だろう…。そして、意味を間違っているぞ…」

「…ゴホン、気を取り直して『取材』の続きといきますね。彼女を殺害したのは、あなたでしょう？いい加減に…白状しなさいッ！」

ガダンッ！！射命丸が手に握った『彼女』を机に叩きつけ、吉影に詰め寄る。

「ち、ちがうウツ…！わたしじゃないツ…！わたしには、こんな、こんな殺し方は出来ない…」  
机の上に置かれたそれは、背中を引き裂かれ、首狩り族の干し首のように、干からびてミニチュアサイズになってしまった、ルーミアの死体だった…

ネタバレ

これは嘘予告です

というわけで、第七話いかがでしたか。たのしんでいただけたなら幸いです。

最近、上手い比喻表現と厨二的文章の線引きができずに葛藤しています。この文章で読者を白けさせてはいないだろうか、という心配があります。

「この文章が不愉快」などのご意見がありましたら、遠慮なくお申し付け下さい。

次回からはほぼノンストップの戦闘パートです。戦闘の無い回はありません。新たなスタンド使いたちの登場で、より「ジョジョらしい」生き馬の目を抜く頭脳戦を繰り広げていくので、ご期待下さい。

## 第八話 北風と太陽（前書き）

第八話です。これからは大きかれ小さかれ毎回戦闘が勃発します。  
お楽しみください。

大幅な書き直しを行っていないので、未熟な文章になっております。  
ご了承ください。

【ジョジョの奇妙な東方Project@Wiki <http://www28.atwiki.jp/shinatuiki/page/1.html>】より転載。



## 第八話 北風と太陽

「……………う……………」  
吉良吉影は泥のような眠りから目覚めた。全身が鉛のように重く、脳は溶けそう、頭は割れるように痛む。

「（…ぐっ、ぐああ…）」  
しばらく目を閉じ、もう十年以上も味わっていなかった苦痛に耐えていた。だが、いくら待っても良くはならず、むしろ酷くなっていくばかりだった。何か苦痛から逃れる方法を探すため、彼はスカイフィッシュに襲撃されたかのように上がらない瞼を強引に開く。瞬間、彼の目に強烈な光が射し込んで来る。脳が焼けるような激痛に、吉影は慌てて手をかざし、朝日を遮る。まだ日は魔法の森の木々から近くにあったので、夜が明けてからすぐなのだと分かる。

「（うっ……………二日酔い…か…。何年ぶりだ…この感覚は…？）」  
吉影はしばらく頭の痛みにはんやりとして倒れ込んでいた。と、やや脳も活動を始め、吉影は頭を揺らさないようにゆっくりと身体を起こし、状況の整理を始めた。

「（ええと…まず今分かることは…。わたしは何故か食堂の外の庭の土の上で寝ていた。そしておよそ十年ぶりの二日酔いに苦しんでいる…。二日酔いと、いうことは…）」  
「ツツツ…！！！」

昨夜の出来事を思い出し、吉影は慌てて懐に手をつ込み確認する。

「よ、良かった…！酔った勢いで誰か殺したりしてはいないようだ

…」

【恋人】がないことを確認して、ホツと安堵する吉影。と、何か硬い物に手が触れたので、取り出してみた。

「これは…たしか…」

取り出した瓶を顔の前にかざすと、中に錠剤が入っているのが見えた。たしか、宴会をやる前に永琳が渡してくれた、二日酔いに効く薬だ。この苦痛から逃れたい吉影は蓋を開け、錠剤をザツと手のひらにあけて口に運び呑み込む。効果が表れるのが早いのか、それとも思い込みか、早速痛みがひいていく。やっと頭がすっきりしてきて、昨夜の記憶を掘り起こしていく。

「（ええと…たしかわたしは【衝動】を抑えられず慧音を手に掛けようとして…妹紅に妨害されて…それから…それから…）」

妹紅と飲み競べを始めた後、あれだけ大口を叩いた吉影だったが、やはり人間無理なものは無理で、情けなくも御椀二杯目でダウンしてしまった。その時、彼の防衛本能が偶発的に覚醒したのか、ハツと正気に戻った吉影は、妹紅がまだ己の勝利に気付かず酒壺に頭を突っ込んでいるのをいいことに、痙攣する腕で身体を引きずってエスケープしようとした。ところが、その時復活した輝夜に

「なに勝手に私の勝負引き継いでんのよっ！！」

と、飛び蹴りをぶちかまされてふき飛ばされて…そこから覚えてないが、おおよその予想はつく。とにかく、彼は庭に落ちて今まで寝て（気絶して？）いたのだった。

「そうか…わたしは…酔っついていても誰か殺さずにいられたのか…」  
再度、彼は安堵の溜め息をつく。苦痛から解放されると、急に不快感が沸き上がってきた。髪や服は酒が染み込んで固まり、喉はベトベトと渴く。

「うっ…、風呂場に、行くか…水も飲もう…」

吉影は立ち上がり、ふつと食堂を覗き込む。

「……………やれやれだ……………」

そこは、酒で血を洗う戦場跡となっていた。妹紅と輝夜は粉碎された酒壺の破片と酒の中で折り重なるようにして倒れていた。やはり

最終的にはいつも通りの【決闘】となったのだろう、二人とも服のあちこちがズタズタに破れ、大量の血痕が残されている。あまり家や家具には被害が見られないので、幸運だったと言えるだろう。永琳とてゐは普通に酔って寝てしまったんだろうが、鈴仙は頭で襖を突き破ったまま気絶していた。そして、致命的なのは……息をしていない。寝息や横隔膜の動きがまるで感じられないのだ。もしかすると、彼女は既に死んでしまっているかもしれない。別にどうでもいいが。

「（ん？そう言えば慧音は……）」  
食堂を見渡しても彼女の姿はなかった。

「何故彼女だけ……？一体どこへ……、んっ……？」  
足に柔らかいものが当たったので、ふつと見下ろす。

「ッ！？」  
彼の足元には、見覚えのある蒼い服。今は酒にまみれているが、身に着けた、女性の身体が横たわっていた。全く目を覚ます素振りを見せず、静かに寝息をたてている。

「……………」  
吉影は無防備に眠る慧音の顔を覗き込む。

「……隣で寝ていたのか……気付かなかった……。」  
吉影はしばらく眠る慧音を見下ろしていた。と、彼女の脇にしゃがみ、横たわる彼女の身体をそっと抱き上げる。

「……………君だったのか、わたしを縁側に引き上げようとしてくれたのは。」

瞼を閉じた慧音の顔に、吉影は呟く。彼は慧音を抱き抱えたままフラフラと危なっかしい足取りで縁側に上り、食堂に運び込んだ。彼女を起こさないよう、静かに下ろし、部屋の隅に置いていたため巻き込まれずに済んだ自分の背広をそっとかける。

「……………」

安らかに眠る慧音を、吉影はしばらく眺めていた。その表情は温かいものだったが、どこか複雑な表情だった。当たり前だ、つい数時間前に殺しそうになった女なのだから。

「（また、だ…また【衝動】に負けてしまった…）」  
唇を噛み締め、己の軽率さを戒める。

「（【本性】は打ち明けてはならない…誰であろうと…絶対に…そうでなければ、【平穩】は脆く崩れてしまふ…ただでさえ厄介な妖怪や能力者が溢れているのだから…）」

彼は猛省した。自身の情動を抑えつけ隠すよう、堅く心に誓う。

「（吉良吉影…【本性】を抑える…抑えるんだ…わたしなら出来るはずだ…実際、今は【衝動】は鎮まっている…この世界から脱出する方法を見つけるまでは…【彼女】を手に入れるのは、その後だ…）」

心に深く刻み付けた後、吉影は慧音から目を離す。

「…風呂場に行きたいな…家の中を通って行くのは…、無理か。」  
襖に頭を突っ込んでいる鈴仙を一瞥し、

「…縁側を通るか。」

縁側に出て、風呂場に向かおうと歩き始めた時だった。

カシャツ

「むっ!？」

突然視界が真っ白になった。と、思ったら、それも一瞬のことで、すぐに視力は回復する。

咄嗟に光の差してきた方向へ目をやる。そこには…

「どうも〜！毎度お馴染み、清く正しい射命丸ですー!!」

背中に黒い翼を生やした少女が、ホバリングしながらにこやかに力メラを胸元に構えていた。

「……………」  
吉影の「なんだこのアマは？」という不快感を伴った怪訝な表情を

見て、その少女は「やれやれ、これだから外来人は……」といった感じに首を振り、スタツと降りて言葉を繋げる。

「初めまして川尻さん。私は射命丸文と申しまして、この幻想郷で新聞記者兼編集長兼社長兼をやっています。以後お見知り置きを。」

「新聞記者だと?」

「ええ、そうです。ほら、あなたも聞いたことはあるでしょう? 幻想郷一早くて確かな真実の泉、【文々。新聞】……」

「なツ……あッ……!?!?」

吉影は心の中で舌打ちした。そう、聞いたことがあるのだ、【文々丸新聞】についての評判を。

「(くそッ!! 粘着質であることないこと書きなぐるという、あのパラッチ天狗か!! 最悪なヤツに目をつけられてしまった……!)」

吉影は警戒心を表に出さず、やや戸惑った自然な反応を返す。

「えッ……ああ、知ってはいるが、読んだことは……。で、その記者が、何の為にわたしを撮影したんだ?」

「ええ、新鮮なネタの匂いがプンプンしたので。」

「一切悪びれることなく爽やかに言い切りやがった。」

「(くッ……こ、こいつ……とてつもなく不吉な感じがするぞ……!!)とにかく、なにか情報を……)」

吉影は警戒心を敵愾心に格上げさせ、尚且つそれを覚られないよう注意しながら、質問してみる。

「……何が言いたい?」

「いえいえ、大したことではありません。」

射命丸はいつの間にか手帳と万年筆を握り、あの不吉な笑顔を浮かべていた。

「ただ、少くしばかり【取材】させてもらいたいただけなんですよ。」

「………はあ、分かった、受けてやろう。」

吉影は溜め息をつき、承諾したが、彼の脳内では目まぐるしく思考が駆け廻っていた。

「（まずはこいつの【危険度】を確認しなければ…どれだけ深いところまで知っているかを聞き出して、場合によっては……）」  
一瞬、彼の目が鋭い殺人鬼の光を帯びる。

「（塵ひとつ残さず、【始末】してやる。）」

だが、その前に君もやるべきことがあるんじゃないか？人に名を尋ねるときは自分から名乗るように、人から情報をもらう時は…」

「……分かりました。こちら情報公開といきましょう。では、あなたの欲しい情報は？」

「君が撮影したわたしの写真、わたしについて知っていること、わたしについてどんな記事を書くつもりか、全て話してもらおう。話はそれからだ。」

射命丸は手帳のページをめくる。

「ええっと、そうですね、まず見出しは【噂の外来人大特集 新月の夜に現れた謎の男の正体に迫る!!】それから【外来人、寺子屋で授業 外の科学の実態とは!?!】、【謎の外来人VS幻想郷の不死鳥 飲み比べ対決!酒豪だらけの幻想郷で、果たして外来人は生き残れるのか!?!】と、まあこんな感じです。あと……」

射命丸はいつどうやって撮ったのか分からない、吉影の授業風景や昨晚の様子を写した写真を見せながら話しを進める。

「（ううむ、そんな他愛もない内容なら、わざわざ危険を冒して始末する必要はないな。人間や妖怪共に注目されるのは癪だが……）」  
吉影が心の中で安堵の溜め息をついた時だった。

バサッ

「あっ……」

射命丸の手帳から、数枚の写真がハラリと地面に落ちた。

「むっ……?!?!?」

吉影はそれらを反射的に目で追い、眉をひそめた。

それは、慧音が吉影に寄り掛かり、お互いの手を重ね合っている場

面をバツチリ激写した写真だった。

「あッ……!!」

吉影はかがんで拾おうとした、が……

「おおっといけない。」

「!?!」

小さなつむじ風が吹き、彼の手が届く前に写真をフワリと浮かせた。そして写真は風に漂いながら、射命丸の手に滑り込んでいった。

「（今の風は……こいつの仕業か？）」

吉影は目の前の天狗の能力について思考し始めたが、それより差し迫った問題を解決するため、やや不快感を滲ませて彼女に問う。

「おい、お前、その写真でどんな記事を書こうとしているんだ？」

射命丸はあの嫌な笑いを浮かべたまま答える。

「いえいえ、最近外の世界から流入してきた雑誌を、なにか参考になる要素はないかと見ていたんですが、その時に興味深い内容を見つけてましてねえ。」

彼女はニコリと笑いながら、ポーチから女性物の雑誌を取り出す。

「私は以前から妖怪と人間双方の興味を引く記事を書きたかったのですが、やっとそれにたどり着いたんですよ。つまり……」

彼女が雑誌のページをめくり、吉影に見せる。

「他人の【男女関係】ほど人妖老若男女万人ウケする話題はないということですよ!!」

嬉々として得意気に語る射命丸を、吉影はあまり穏やかじゃない目付きで凝視し、考えを巡らす。

「（クソッ！やはりパラッチ、幻想郷のソレも外のハゲ鷹共と同じく所詮ゴミクズということかッ……!!）」

胸の内で悪態をつきながら、吉影は怒りを抑えて口を開く。

「すまないが、それを記事にするのは勘弁願いたいな。写真もフィルムも預らせてほしい。」

「おやおや、否定せずに口封じを企むとは、やはり事実ということですか!?!いやはや、人間としては長めの人生ですつと守ってきた

慧音さんを僅か数週間でモノにするなんて、できればどうやってオトしたのか詳しく…」

「違う、そういった関係じゃない。普通に居候の身分だ。さあ、早く渡してくれ。根も葉もない噂をたてられては、人里で安心して暮らせないばかりか、慧音の家に居られなくなるじゃないか。」

イライラと吉影は首を振り、射命丸に詰め寄る。が、彼女は依然としてあの不愉快な笑みを絶やさず、手帳のページをめくる。

「もちろん、タダでは言いません。こちらからも、あなたにとつて【非常に】有意義な情報をお教えしますよ。それこそ、歎びで全身の毛が逆立つほどのを…。」

「？」

何かを探してページをめくる射命丸を、吉影は訝しげに眺める。とお目当ての物を探し当てたのか、手帳から一枚の写真を抜き取る。

「ああ、あった！これがそれです。気を強く持って、パニックに陥って叫んだりしないようにお願いしますよお〜!!」

自信満々に鼻を鳴らし、射命丸はその写真を吉影に飛ばす。吉影はそれをキャッチし、両手でしっかりと持って目を落とし

「ツツツ!!!!!!??」

吉影は驚愕に目を見開き、愕然と口をあける。瞳が動揺で揺らぎ、息を呑む。

「(なッなんだとおオオオオオオオオオオオオオオオオツツ!?!?!?)」

「

吉影の両手がワナワナと震える。その手が握る写真には…

昨晚の宴会の様子、てゐが吉影に絡んでいる場面だった。別にそれだけならならんら問題は無い。問題なのは、【吉影の背後に佇む、巨漢の人型の影】が写っていることだった。

「(そんな…馬鹿なッ!? 何故だッ? 何故【キラークイーン】が写



真に写っている!?)」

吉影はギリツと齒を噛み締める。

「(なんとということだ…始末しなければならぬ!!!)」  
相手に気取られないよう、間合いを測る。

「(相手は天狗だ…一瞬で片付けないと逃げられてしまう…あと一歩近付いて、すぐさま爆弾を撃ち込めば…)」

吉影は、慎重に、だが何気無い動作で、射命丸との距離を詰める。  
五十cm…三十cm…十cm…射程距離に入った。

「(死んでもらうぞツ! 射命丸 文ツ!!!)」

【キラークイーン】の手が足元の小石を拾い上げ、射命丸に撃ち込もうとした時だった。

「どうです? 気付かなかったでしょう? 自分が幽霊に取り憑かれていたなんて!」

「……………え…………?」

予想外の台詞に、吉影は肩透かしをくらった。

「大丈夫です、まだ誰にも話していませんよ。いくら幻想郷でも、幽霊に取り憑かれるなんてのはかなり良くないことですからねえ。里の人間にバレたらえらいことですよ。ですが、ご安心ください。私が腕の良いお被い師をご紹介しますよ。あなたが良心的に

【取材】を受けてくださるなら…」

射命丸は得意気に、ニコニコ笑う。

「あ、ああ、そうか、そうだな……………」

吉影は要領を得ない返答をし、必死に思案する。

ようやくひとまずの対策を練り、辺りをキョロキョロと見回すと彼は射命丸にサツと目を向ける。

「……………ここで話すのはお互いにとって不利益になる。どうだ、続きは人里の外でしないか? わたしは着替えをすませてから行くから、すまないがそれまで待っていてくれないかな。」

吉影の言葉を聞き、【取材】の許可だと思ったのだろう、射命丸はニコニコと微笑んだ。

「分かりました！では、東門から真っ直ぐ行ったところの林の中でお待ちしています！」  
バサアツ、と黒い翼を翻し、射命丸は物凄い速さで飛び去って行った。

バシヤアツ

「…クソツッ！！」

バシヤアツと激しく水がはぜる。吉影の皮膚を伝い、早朝の澄んだ空気と相まって二日酔いの残る彼の意識を覚醒させる。

吉影は浴室にいた。朝すぐにわかして酒にまみれた身体を流すために昨晚風呂桶に水をいれていたのだが、彼はそれをそのまま桶で汲み、バサツと頭から被る。顔を流れ落ちる水が彼の鬼気迫る表情を一層険しくみせている。

「なんてことだ…せつかく平穩にこの家に、この世界になじむと思つてたのに…」

きつく噛み締めた歯の間から、低く唸り声が漏れ出す。双眸が浴室の壁を貫きそうなほど鋭い光を放つ。桶を握る右手がワナワナと震える。

「今年ヒドイ目にはかり会う…なんて年だ…【始末】しなくてはいけない！あの小娘を【殺す】のは目立つことで非常にまずいことだ…しかし、あれを見られた以上…」

バツと顔をあげ、窓の外、森の木々から全身をさらけ出した朝日を、その下で吉影を待っている【敵】を睨む。

「やらざるを得ない！」

彼の右手の中で、木製の桶が砕けた。

人里東門

「……でき、そしたらあいつ一升瓶一気に煽っちまっさあ〜」

「おいおい大丈夫かよ、あいつ酒癖悪いんだろあ？」

門の前で、二人の門番が朝日を眺めながら話していた。

「ああ、だから止めとけって言ったんだよ。だけどあいつ相当シヨツクだったみたいで…」

門番の一人がもう一人に愚痴を言っていた時だった。愚痴に付き合っていた方の門番がなにかに気付き、話を遮る。

「おつ、見ろよ、川尻さんだ。こつちに歩いて来るぞ。」

「川尻さんつてつと、最近流れ着いた外来人だっけ？寺子屋で授業しているんだっか？」

「ああ、良く娘が話すんだ。【川尻先生の授業は慧音先生のより楽しい】つてな。なんでも、素質や知識が無くても使える魔法みたいなものを教えてくれるらしい。」

「ふ〜ん、にしても、こんな朝早くにどうしたんだろつな。」  
寺子屋に通う娘を持つ男が吉影に声をかける。

「川尻先生〜！おはようございます。」

顔を俯かせて歩いていた吉影はハツつと立ち止まり、門番に挨拶を返す。

「あ、ああ、おはよう。お仕事お疲れ様です。」

門番は友好的に笑いながら、自己紹介し吉影に話しかける。

「先生こそ、毎日寺子屋の授業、お疲れ様です。娘が良くあなたの事を話していますよ、授業が面白いです。」

「そうですね。そう言ってもらえると、こちらも嬉しい限り、教師冥利に尽きるというものです。娘さんはとても優秀ですよ。教えたことをすぐ理解して、良いところに目を付けて質問をする。本当に良い子です。」

吉影は脳内を駆け巡る怒りや不安、思考を頭の隅に追いやり、外交モードにチェンジする。二、三寺子屋についての話題で談笑した後、門番はところで、と質問する。

「こんな朝早くにどうしたんです？里の外に出ようとしているみたいですが。」

吉影はなんと行って誤魔化すか少し迷った後、答える。

「幻想郷に来た時、森の中に落とし物をしてしまつてね、一緒に探そうと妹紅と約束しているんですよ。」

「なるほど、妹紅さんと一緒なら心配ありませんね。探し物が見つかるよう、祈つてますよ。」

「有り難う。…ところで…」

吉影が何食わぬ顔で質問する。

「わたしがここに来るまでに、誰かこの門をくぐって行きましたか？」

「いいえ、誰も通りませんでした、それが？」

「いえ、里から出て外で仕事をする人はいないのかと思つただけです。それでは。」

吉影は軽く会釈し、門をくぐって里の外へと出て行つた。

「（よし、二人の話だと、あの天狗は門をくぐらず空を飛んで待ち合わせ場所に向かつたようだ。勿論目撃されてもいないだろう。ならば…）」

吉影の身体から陽炎のように殺気が立ち上つた。

「お、ようやく来たみたいね。」

樹の枝に腰を下ろし自分の手帖を眺めていた射命丸は、顔をあげバサッと土の上へと飛び降りる。森のやや奥まつた人里の人間に見られたり聞かれたりする心配のない場所、待ち合わせの場所に、人影が近付いて来る。その人影は森の木々をかき分け、射命丸のいる場所にたどり着いた。

「随分遅かつたじゃないですか、川尻さん。外の世界は天狗でも追

い付けないほど目まぐるしく変化していく社会だと聞いていたが、そんな調子で置いてけぼりにされたりしなかつたんですか？」射命丸は暗に『何か余計な小細工仕掛けて来てねえだろうなあオイ？』と警告を込めて言ったのだが、吉影は悪びれる様子なく懐に手を入れる。

「いや、これを探していてね……」

彼が懐から手を出すと、その手には封筒が握られていた。

「？何ですか、それは……、っ!？」

吉影がその封筒を射命丸に向けて軽く放った。射命丸は突然の動作に驚きながらも容易くそれをキャッチし、中を見る。

「これは……」

封筒の中に入っていたのは、札束であった。それも、結構な厚み、人里の住人の平均月収の七、八割ほどだろうか。

そんなものをいきなり無言で投げてよこされた射命丸は、怪訝な表情で吉影を見る。

「これは……何のつもりですか？これで祈祷師を雇って欲しいということですか？それとも、この端金で記事の内容を書き換えてくれと、そういうことですか？」

吉影は、何も言わない。

「……なるほど、そういうことですか、私が、金の為に、そんな人間のおままごとの玩具の為に、記者をやっていると、そう思っているんですか。」

射命丸は自尊心を傷付けられたことに怒りを露にし、侮蔑の目で吉影を眺める。

「それはそうですね、人間は権威があれば、多数派であれば、事実を歪めていいと思っっている動物ですからね。短い時しか生きられないから、私達妖怪のように真実を知らず、誰かが自身の為に創った歴史に凝り固まって、考えることすら放棄してしまった、誠に【人間らしい】生き物ですか……から……」

射命丸の台詞が、途切れた。吉影の瞳に、媚びとは真逆の感情、勝

利の確信の光を感じたからだ。

「(ま、まずいつ、この男、何かを……)」

射命丸が黒い翼で空気を叩くのと、【キラークイーン】が右手のスイッチを押すのとは、同時だった。

「勝った！死ねッ！！」

爆弾に変えた封筒のスイッチを押し、吉影は勝利の声を揚げる。

「ああああああああああああああああああああああああああああ！！」

「フハハハハハハハハハハ

！！」

吉影は勝鬨の笑い声をあげた。射命丸は断末魔の悲鳴をあげながら、肉体を内側から破壊され、全身がバリバリと裂け、砕け、粉々になり、塵と成って風に還っていく………はずだった。

「……………なん………だと………？」

吉影が驚愕に目を見開く。

射命丸は何事もなく封筒を手に持ち、繁った樹の枝の下あたりの高さでホバリングしていた。

「……………なぐんてね。」

射命丸は封筒を手に持ち、一瞬前まで金切り声をあげていた口をニヤリと歪め、首に掛けているポラロイドカメラを硬直している吉影に向けて、

「はい、チーズ。」

シャッターをきった。フラッシュが焚かれ、吉影が我に返る。

「き、貴様っ！一体何を……」

殺気を滲ませて問い詰める吉影にも全く臆することなく、彼女は飄々とした口調で、

「というわけで、この端金はお返しします。」

吉影目掛けて封筒を投げつけた。能力を付加して投げたため、追い風を受けて豪速球で吉影に迫る。

「はッ!?!」

吉影は咄嗟に封筒を撃墜しようと【キラークイーン】に小石を投げさせた。

ドグオオオオオオツ！！

封筒に触れた瞬間、小石は爆炎をあげて粉碎された。爆風で札束が吹き飛ばされ、吉影の周りを落ち葉の様に舞う。吉影は【キラークイーン】を戦闘体勢に入らせ、カメラを構える射命丸を睨む。

「（今…爆弾に変えた封筒はきちんと作動した…奴が持っていた時は不発だったというのに…。それ以前に、奴は爆発が起こったことにも驚いていない…いや、それどころか、爆発が起こることを予想していた様な様子…まさか…！！）」

ギリツと奥歯を噛み締め、吉影は射命丸を見据える。

「貴様…最初から分かっていたんだな…わたしが能力を持っていることをツ！」

「あやや、流石に気付かれましたか。」

射命丸は見るだけでぶん殴りたくなるような馬鹿にした笑みを浮かべ、吉影を見下ろす。

「お察しの通り、私は最初からあなたが【能力】を持っていることを知っていました。そして、私の目的は初めからあなたに【能力】を使わせ、その現場を激写すること。写真をワザと落としたのも、その後この【心靈写真】を交渉材料として見せることで、私がいま重要視していないように思わせたのも、全て貴方を人気の無い場所に誘い込み、安心して私に【能力】を使うように仕向けるためよっ！！」

射命丸はすでに営業用紳士モードの仮面を脱ぎ捨て文屋モードの本性を表していた。敬語も止め高圧的な口調で吉影に言い放つ。

「…どこまで知っている？どこから知った？」

吉影は冷静に射命丸の挙動を【キラークイーン】の目で観察し、情報を聞き出す。

「ルーミアの件、神社での戦闘、人里での私生活、全て把握してるわ。情報源は手段までは教えないけど、殆ど自分の目ね。一度ルー

ミアと霊夢さんにインタビューしてみたけど、ルーミアは闇に隠れたままで何も言わなかったわ。ちょっと【交渉】しようとしたけど、咽び泣くだけで要領を得なかったわ。よほどあなたに痛め付けられたのが堪えたんでしょね、【私を見ないで】とうわ言のように繰り返してましたよ。霊夢さんのほうは「あんたが見てたこと以上のことは知らないわよ」と言われたわ。」

射命丸はいけしゃあしゃあと吉影に答える。情報源の人々が吉影に狙われるかもしれないのに平然と教えたのは、【取材】に協力しない者の安否は眼中にないと彼に伝えるためだろう。

「……わたしの爆弾の弱点も、知っていたのか……？」

吉影の質問に、射命丸は得意顔で解説を始める。

「いいえ。ですが、戦いの様子を観ていて、あなたの【能力】の特徴は分析出来たわ。一つは爆弾そのものが爆発するタイプ、二つ目は爆弾に触れているものを爆破するタイプ。そして、貴方がお金を渡してきた時点で、対策は決定した……。貴方が今何よりも必要としているお金を、爆破してしまうわけがない。つまりっ！」

射命丸の瞳が優越感をいっぱいに湛える。

「封筒が爆弾に変えられていたとしたら、間違いなく【触れたものを爆破する】タイプっ！そして、それが分かっているなら、爆弾に触れるものを無くせばいい。後は……分かるわね？」

「……貴様の能力は、風を操る能力。……真空中で爆弾を覆ったのか？」

射命丸が鳥の羽でできた団扇をビシッと吉影に向ける。

「はい、せうかい！！私には能力は通用しない！」

彼女の双眸に闘争心がたぎる。

「【取材】はたった今、【尋問】に変わった！！私の千年以上の天狗生の中で、【取材】に非協力的だった者を許したことなど、一度だってないわっ！！！」



射命丸が威勢良く啖呵をきる。その姿からは記者のそれを超越した使命感が感じられた。

そんな闘争心剥き出しの彼女を見て、吉影は額に手を当てる。

「なんということだ…あれを見てしまったか…そして…文屋きさま………も、わたしの【最も苦手とする能力】を持っている………のか！」

手をおろし、顔をあげ射命丸を見据える。その目には不安や焦りはなく、ただ冷静に、しかし普段は見せない圧倒的な自信を静かに燃やしていた。

見下ろす射命丸、見上げる吉影、二人の視線が交錯し、空気がピリピリと緊張を高めていく。

「君」

「……？」

「ひとりかね……？」

「…ええ、今、誰も連れて来てないわ。私は一人よ。」

射命丸の返答を聞き、吉影はこの一触即発の場に似つかわしくない穏やかな口調で語り始める。

「私の名は【川尻浩作】、年齢33歳」

「？」

「自宅は杜王町北東部の別荘地帯にあり…結婚はしていない…仕事は【カメコーチェーン店】の会社員で毎日遅くとも夜8時までには帰宅する。」

「………」

とうとうと話を続ける吉影を、射命丸が油断なく睨む。

「タバコは吸わない 酒はたしなむ程度。夜11時には床につき必ず八時間は睡眠をとるようにしている…」

寝る前にあたたかいミルクを飲み20分ほどのストレッチで体をほぐしてから床につくとほとんど朝まで熟睡さ…赤ん坊のように疲労やストレスを残さずに朝目をさませるんだ…

健康診断でも異常なしと言われたよ。」

「……なんの話をしているの？今さら【取材】に協力したところで  
射命丸が口を開いたが、遮って言葉を返す。

「わたしは常に【心の平穩】を願って生きてる人間ということを説明しているのだよ…【勝ち負け】にこだわったり、頭をかかえるような【トラブル】とか夜もねむれないといった【敵】をつくらない…というのが、わたしの社会に対する姿勢であり、それが自分の幸福だということを知っている…」

もつとも、鬪ったとしてもわたしは誰にも負けんがね。」

【キラークイーン】が足元の小石を拾い上げ、射命丸の眉間に狙いを定める。

「……………」  
場の緊張は限界に達していた。二人の覇気が空気を伝い、木の葉や雑草をビリビリと揺らす。

一陣の風が、森の木々を音をたてて揺らして通り過ぎて行った。

「うおおおおあぁッ！！」

「せええええい！！」

それを合図に、両者共に攻撃に入る。吉影の方が、射命丸の団扇より一瞬早く爆弾の小石を撃ちだしていた。爆弾が常人には見ることすらできない速さで射命丸に迫る。だが

ゴオオオオオオオオオオオオ！！

滅茶苦茶な威力の風が吹き荒れ、小石を弾き飛ばしてしまった。

「なにッ！？」

暴風が吉影に迫り、彼は【キラークイーン】の脚で身体を固定し身構える。

グオオオオオオオオオオオ！！

台風のそれより遙かに強力な風が、吉影を吹き飛ばそうとする。【

キラークイーン】に支えられていても、立っているのがやっとだ。

「（何だ、これは…！風なんて生ぬるいものじゃないッ！爆風や衝撃波の域だッ…！）」

吉影は爆弾を解除し、次の小石を爆弾に変える。【キラークイーン】に狙撃の体勢を取らせ、風が止むのを待つ。

暴風はすぐに止み、二人は再度対峙することになった。

「風は大気の血流、気圧の不均衡の是正…」

射命丸は口元を団扇で隠し、吉影を見下ろす。

「情報もそれと同様。人妖、勢力、地域…あらゆる要素が密度、質、種類の偏りを生む…。事實は独占され、隔離され、歪められる…。

私はこの幻想郷に一陣の風を起こし、淀み埋もれた真実を、白日の下にさらけ出す。それが私の【使命】ッ…！」

射命丸が団扇を振り上げる。同時に、【キラークイーン】が小石を撃ち込む。

グオオオオオオオオオオオ！！

射命丸が団扇を振り下ろすと共に、さっきの衝撃波が吉影に迫り来る。爆風はまたも小石を弾き返し、弾道をねじ曲げ、小石は木の枝に突き刺さった。

「ぐおおッ…！」

吉影は衝撃波に吹き飛ばされまいと【キラークイーン】の脚で踏ん張り、耐え抜く。強風が吹き荒れる中、余裕たっぷりな彼を見下ろす射命丸を睨み

「【キラークイーン】…！」

爆弾のスイッチを押した。

ドグオオオオオオオオオオ！！

「ッ…！」

射命丸の右前方の木の枝が爆発し、人の胴ほどもある枝の破片が襲いかかってきた。

「（さっき撃ち込んだ小石は風に吹き飛ばされあの枝に命中するように狙って撃つておいた…！これで先手は獲れたぞ…！さあ、どう

出る？）」

枝が射命丸に命中しようとした瞬間

「ッ！？」

射命丸の姿が一瞬で消え失せ、枝は通り過ぎて木の幹にぶち当たっただけだった。

「な、なにッ！？消えただとッ？どこに行った！？」

「ここよ、のろまさん。」

ハツと後ろを振り返った瞬間、カシヤツ

射命丸のカメラがフラッシュをたいた。その光は吉影の脳に食い込み、脳内を真っ白に染め上げた。

「ぐああああ！？」

「（な、なんだこれはッ！？スタンドパワーが、う、奪われる…！）」

吉影は力が入らない身体に渴をいれ、【キラークイーン】にまたも小石を撃たせる。が、射命丸はまさしく超人的な瞬発力でそれを回避し、吉影の周りを物凄い速さで飛び回り始めた。さらに翔びながら団扇を振り、吉影を取り囲むように風を起こす。

「（クソッ！自分は軽快かつ高速に飛び回り、さらに風を起こして敵の自由を奪う…。分かってきたぞ、コイツの戦い方…！）」

四方八方から押し寄せる風の洪水の中、引き倒されないよう耐えながら、吉川は冷静に敵を観察する。

「（そして…あのカメラ、どう言った原理か知らないが、わたしからスタンドパワーを奪っていった…。恐らく【キラークイーン】の影が写っていた写真も、あのカメラで撮影したものだ。…しかし、本当に厄介な奴を敵に回してしまった…。）」

【キラークイーン】ではどうしようもない高速飛行能力、風による攻防一体の遠距離攻撃、対スタンド兵器、観察眼、慎重さ…どれも恐ろしいものだが、それら以上に彼が危惧していることがあった。

杜王町で東方仗助たちと闘った時、彼らは決して逃げようとしなかった。吉影を逃がさないために。己の大切な者を護るために。だが、今回の敵は違う。ネタは既に揃っているし、幻想郷でも最速クラスの足を持っているのだ。いつでも逃げて良いし、逃げられる手段を持っているのだ。

「…速い。速すぎる。姿を目視できない。過ぎ去った後の木の葉の動きで何とか追えるくらいだ…」

だが、彼の目は圧倒的な自信に満ちていた。

「【わたし自身】にはなッ！！だが…！！」

【キラークイーン】が吉影のポケットから人の目玉ほどの大きさの【鉄球】を取り出し、爆弾に変える。

「【キラークイーン】の目ならッ！至近距離で発射された銃弾を受け止める、仗助のクレイジー・ダイヤモンドと同等のスピードを誇る、我が【キラークイーン】ならッ！！」

【キラークイーン】が【鉄球】を発射する構えをとる。

「見えるっ！見えるぞッ！！このクソアマの動きがアー！！」

目にも止まらぬ速さで縦横無尽に木々の間を飛び回る射命丸目掛け、【キラークイーン】が【鉄球】を発射した。

「はっ！？」

射命丸は、【鉄球】が自分の飛行軌道上を通過することも、それがこのままでは自分を貫通することも、咄嗟に理解した。そして、それを回避するため、団扇で風を巻き起こし【鉄球】を弾き返した。

【鉄球】は吉影の頬を掠め、背後の木の幹に突き刺さる。

「…あなたも物分かりの悪い人ね。」

射命丸は団扇の風の反動を利用してブレーキをかけた。ホバリングしながら呆れた口調で吉影に言う。

「いくら爆弾を飛ばしても、烏天狗である私に命中させるなんて芸当、ホーミング無しでは無理よ。例え今みたいに運良く当てられそうになっても、天狗の団扇で全て吹き飛ばされる。いい加減、諦めたらどう？外来人風情が多少変わった力を身に付けたからって、赤

子同然のあなたが千年の時を生きてきた妖怪に勝てるなんて、思い上がりもいいところだわ。言っとくけど、ルーミアは幻想郷でも比較的弱い部類よ。あんな弱小妖怪に勝ったからって、私を嘗めないでほしいわね。調子乗るんじゃないわよ人間風情が。」

「…フンツ、無駄だと?」

吉影は鼻を鳴らし、射命丸を睨み返す。

「何を言っている…跳ね返してくれるのが良いんじゃないか。撃ち込んだ爆弾を、きちんと吹き飛ばしてくれるのが良いんじゃないか

「

「?」

「さつき撃ち込んだ爆弾も…君が風を起こしたおかげで、木の幹に突き刺さっている…丁度、わたしの背後にな…」

【キラークイーン】が、右手のスイッチを押した。

ピカアアアアアアツ!!

「ツ!!!!!!」

吉影の背後の木の幹にめり込んでいた【鉄球】が、眩い光を放った。

光は射命丸の視力を奪うほど近くはなかったが、吉影の姿を彼女に見えなくするには十分だった。

「くっ…!!逆光で…み、見えないツ!!」

【鉄球】の正体

それはアルミニウムと酸化鉄「(

?)」の混合粉末を封入した【爆弾】。アルミニウムが酸化されると同時に酸化鉄「(?)」が還元され、膨大な光と熱を生む【テルミット反応】と、【キラークイーン】の【第一の爆弾】を組み合わせることで、熱と光の量を調節できる【傷痕閃光弾】である。今回は発生するエネルギーを光に偏らせ、【閃光弾】として使用したのだ。

吉影は背後からの閃光弾の光には影響を受けない。敵だけを視界不

良にし、自らは視覚に頼っている感覚を衰えさせない、完璧な目潰しだ。

「（成功だッ！殺れるチャンスは今！今しかないッ！！）」

吉影は【キラークイーン】の脚で跳躍する。爆弾に変えた小石を構え、極力至近距離から撃ち込むつもりだ。

「うおおおおおおおオオオオオッ！！」

【キラークイーン】が、射命丸の額に狙いを定めた。

射命丸は、視力を奪われながらも、ニヤリとほくそ笑んでいた。風を操る程度の能力を持つ彼女にとって、空気の動きを感じて周囲の様子を察知することなど、朝飯前だったからだ。だから、吉影が自分に向かって来ることも、その彼の隣で右腕を突きだして自分を狙っている者 背後霊のような がいることも

分かっていた。そして、彼らが向かってきたということとは…

「（フフツ、やっと攻撃の瞬間を撮影できるわ…。）」

射命丸が期待に胸を膨らませ、カメラを構える。彼女のカメラは幻想郷の少女たちの弾幕勝負を撮影するため、美しく光り輝く弾幕を綺麗に写せるよう、逆光対策を施していた。この逆光の中でもいつも通りの働きをしてくれるだろう。そして、彼女が【攻撃の瞬間を撮影】したかったのは、単に写真の迫力のためではなかった。

「（ターゲットの攻撃の瞬間…それは相手の強い敵意や意志が最も顕著に表れる一瞬！！その瞬間、シャッターをきれば、相手の力を最も鮮明にこのカメラに収めることが出来る！！あの【キラークイーン】】っていうのを完璧にカメラに収めるには、その瞬間以外ないッ！！）」

彼女の頭には、スタンドパワーを奪い尽くされると吉影がどうなるかなどという考えは、欠片も無かった。自分の安全すら眼中に無か

った。【スクープを独占したい】、ただそれだけが彼女を突き動かしていた。

「（もつと…もつと近くから…!）」

黒い翼で宙を打ち、カメラを構えて吉影に向かって行った。

「（これで…わたしの勝ちだッ！これで今夜も熟睡できるッ…!）」

吉影は、【キラークイーン】の腕で、爆弾を発射しようとした。射命丸の眉間に狙いを定め、小石に添えた親指を引き絞り、渾身の力をこめて撃ち込もうとした。だが…

「……………?」

吉影は攻撃を止めた。戦闘の最中、それも二度と訪れぬやも知れぬ最大のチャンスを目の前にしているというのに、訝しげな表情をしている。それは、幽かな物音に耳をそばだてているような様子だった。その直後、

「ハッ!?」

吉影が目を見開く。射命丸が、逃げるところかこちらに突っ込んで来ていたからだ。

「ま、まずいッ! 【キラークイーン】ッ…!」

寸でのところで攻撃を思いとどまる。その瞬間、

「ぐおおおあああああ………!!」

シャッターがきられ、吉影の視界は白一色に染まった。



「……………」  
射命丸はカメラから目を離した。閃光弾の光が消え、視力が元に戻っている。辺りをキョロキョロと見回す。

「あや？あややや？」

カメラは確実に【キラークイーン】を撮影した。風の動きが、彼の攻撃の瞬間を教えてくれた。だから、今頃は力を奪われ倒れ伏している吉影が彼女の足下に転がっている、はずだった。

「い、いない！？馬鹿なっ！確実に仕留めたはず…！！」

吉影の姿が、何処にもないのだ。有り得ない、彼女はそう呟き、周囲を見渡した。と、その時だった。

「どこを見ている？のろま。」

ハツと声のした後ろを振り返ると、そこには吉影が立って自分を見ていた。

「ん？どうしたんだい？そんなに驚いた顔をして。」

ホバリングして何時でも逃げられるよう身構えている射命丸に、吉影は悠然と話しかける。その姿には、絶対的な安心感と自信に満ち溢れていた。

「……………」

再度カメラを構える射命丸を見て、吉影は微笑みながらやけに落ちて着いた声で言う。

「親切心で言っただけだが、無駄だ。君が何をどうしようとも、わたしは無敵になったんだよ。」

「……………無敵…？」

射命丸は内心怖じ気ついていた。先程まで敵意を剥き出しにしていた相手が、急に微笑を浮かべ、穏やかな声で諭すように話し始めた。だれだって不気味に思うものだ。

「ああ、そうだ。今のわたしには、どんな攻撃も通用しない。」

吉影は穏やかに射命丸に言う。

「【キングクリムゾン】…と名付けたんだがね…」

「…キング…クリムゾン…？」

「ああ、そうだよ。この能力は、この世の全ての時間を吹き飛ばし、その間に起こった出来事を、全て消し去る。」

「じ、時間を吹き飛ばす…ッ！？そんな、馬鹿なっ…！」

射命丸が信じられないと声をあげる。だが、吉影はそんな彼女を無神論者がカルト教団を侮蔑するような目で見る。

「フツッ、何を言っている？わたしの外での知り合いには、時間を止めるヤツまでいた…時間を爆破する者がいても、不思議じゃない。そして、消し飛んだ時間の中で、君はわたしの身体を通り抜けて、今いる場所で止まったんだよ。」

「ぐっ……！！」

「（時間を爆破ですって…！？信じられないわ…。でも、紅魔館のメイド長にすら出来ないことを、ハツタリで思い付くとも思えないし、何より私は今こうして気付かない間に背後をとられた…まさか、本当に…！！）」

「うああああああああああ！！」

団扇を抜き、振り回した。先程までの相手を負傷させない非殺傷風ではなく、鋭利な鎌鼬を発生させ、吉影目掛けて飛ばす。だが、吉影は身動きもせず黙って笑っていた。そして風が吉影の身体をバラバラに斬り刻もうとした瞬間

「　　ッッ！！！！？」

鎌鼬は吉影の髪の毛一本本そよがせることなく、彼の背後の木々を直撃した。枝や幹がスパッと切断され、バラバラに崩れ落ちる。

「どうだい？これでよく分かってくれたな？今、わたしは時間を0.5秒だけ飛ばしたのだ。」

吉影はニヤリと笑い、射命丸を眺める。

射命丸はかつてない戦慄に震えていた。吉影の放つ気配が、殺人鬼のそれに変貌を始めたからだ。

「（こ、この人間…！危険よ…危険だわ…！私の能力では、何をや

つても避けられてしまおう！！ここは兎に角三十六計……！！）」  
射命丸の頭には、最早【スクープ】の文字はなかった。彼女は踵を返し、黒い翼で空気を叩き、一目散に逃げて行った。

彼女がほんの少し冷静で、真実を探る努力をしようと思いつていたなら、風の動きを読み彼の嘘っぱちを見抜くことができただろう。

「……ふう……。」

吉影が安堵の溜め息をついた。なんとかあのパラッチを撃退することに成功した。だが、彼はそれよりも心から歡んでいることがあった。

「……親父……？いる……んだな……？そこに……。いたんだな……この世に……。」

吉影の背中には、一枚の写真が貼り付いていた。その写真から、老人が顔を出す。

「……吉影……そうじゃ、わしじゃ……わしじゃよ……！」

写真の老人、吉良吉廣は涙ぐみながら答えた。そう、さっきの【キングキリムゾン】の正体、それはは、彼のスタンド能力【アトム・ハート・ファーマー】で、射命丸のカメラに写って吉影を【写真空間】に隔離していたのだ。彼は写真から全身を出し、吉影の前に立つ。涙が滝のように溢れている。歡びが彼の皺だらけ顔をさらにしわくちやにしている。

「親父……！本当に、親父なんだな……！！」

吉影も驚きと歡喜に目尻に涙を浮かべる。だが、今は手放しに感動できる状況ではない。涙を拭い、自分の父親に言う。

「親父、すまないが、再会の喜びに浸るのはまだ早い。ヤツに写真を持って逃げられてしまった。」

吉良吉廣は早くも点のように小さくなった射命丸のシルエットに目

を向け、涙をゴシゴシと拭いて優しい口調で言う。

「吉影、安心してくれ。わしは…今度こそ、今度こそは…お前を、護つてみせるからな…」

彼は、出てきた写真の中に入り込み、写真の枠の外に隠れてしまった。

「……………」

吉影は写真を手を持ち、首を傾げながらも父親からの報告を待つ。ほどなくして、吉廣が写真の中に現れた。

「親父、一体何処に…？」

「おお、この世界に来てから、スタンド能力や幽霊の力が成長してな、以前わしが写った写真を行き来できるようになっただんじや。そして…ほれっ！」

写真の中から、吉廣がなにかを吉影に手渡す。吉影はそれを受け取り、目を見開いた。

「こ、これは…ヤツが盗撮した写真じゃないか!!」 「そうじや。さつきヤツがわしの姿を撮影しておったが、逃げながら現像しておったようじや。その写真からヤツのウエストバッグを探ってやったわい。それにしても、この世界のカメラは凄いぞ。フィルム式じやというのにその場で現像できるんじや。」

得意げに話しながら、吉廣が写真から身体を出す。写真の中にいた時とは違い、ちゃんと生前の身長に戻る。

「…親父…生きてたんだな…!？」

吉影は目に涙を浮かべ、たった一人の信頼する父親を見つめる。

「ああ、そうじやよ…!いや、すでに死んでいるが…わしはこの世にいる…!そして、異世界に来てしまったというのに、こうしてお前と出会えた…!奇跡じや…よかった、本当によかったわい…!!」

憂いの本を絶ち、二人は改めて再会の喜びに浸る。 「ああ、よかった、本当に…」

二人は堅く抱擁し合う。

「…親父、幽霊なのになんで暖かいんだ…？」

「さあな、これもひとえに【愛】の成せる技かのう。」

「…よしてくれ、気持ち悪い。」

「ケケケ、心に染み入るわい。」

二人はしばらくそうしていたが、やがて抱擁を解いた。

「それにしても、よくわたしの爆弾を食らって生きていたな。一体何があつたんだ？」

「それがのう、よく分からなかったが、ふと気が付くと巨大な日本屋敷の前に立っていたんじゃ。」

「日本屋敷？」

「そうじゃ、わたらの家より何十倍も大きいぞ。そこで庭師に追い回されて、逃げ回っていたら屋敷の主人と出会つてのう、【ここは冥界よ】と言われてな。」

「なにッ冥界！？ということとは…？」

「いや、それがな、その女が【まだあなたは成仏できてないから、私の管轄外ね。何処にでも好きに行きなさい。】と言われてしまつてのう、この幻想郷に下りてきて、お前の気配を感じたから、探し回つてやつと今見つけたというわけじゃ。」

「そうか。とにかく無事でよかった。わたしの爆弾で親父を成仏させてしまつていたらと、気が気でなかったんだ。」

「ケケケ、愛しい一人息子を置いて地獄で隠居なんぞ、出来るわけがないじゃろう。父親に定年退職はないわい。」

二人は声をあげて笑う。と、吉影が話を変えた。  
「ところで、ヤツから奪つた写真だが、何故親父が写つたものは持つて来なかつたんだ？」

「ああ、それはヤツの住み処を探つて、カメラを手に入れるためじや。わしのスタンドはカメラがないと何もできないからな。」

「なるほど。だが、その写真だけ残っていたら怪しまれたり、足が

ついたりしないか？」

「大丈夫じゃ、その心配はない。」

吉廣は写真の中に入り、

「ほれ、こうすれば……」

写真の縁をぐんぐんと写真の中に引き込み始めた。完全に縁を引き込むと、写真は完全に姿を消した。

「おお、これは凄い……」

吉影は写真があつた場所に手を伸ばす。もちろん、何も触れない。

「どうじゃ、これなら安心じゃろう。」

空中に写真が現れ、吉廣が身体を出す。

「ああ、とても心強い。カメラを盗むとき、ついでにヤツの住み処も爆破してやってくれ。」

「ケケケ、それは面白そうじゃな。ヤツの悔しがる顔が目には浮かぶわい。」

吉廣がケラケラと笑う。だが、吉影にはその笑いが何処か不自然に思えた。親子の勘というやつだろうか、その表情と声がなにか自分自身を励ましたり、落ち込んでいるのを覚られないよう、無理にやっているように感じられたのだ。

「……親父？どうかしたのか？」

気にかけて吉影が尋ねる。

「ん？い、いや、何も無いが……」

吉廣ははっとして弁解する。その様子からやはりなにかあつたのだと確信したが、言いたくないことを無理に話させようとは思わなかつたので、その話は流す。

「そうか、ならいい。」

「じゃあ、次は吉影の番じゃ。わしが戦闘不能になつた後、仗助共とはどうなつて、なにがあつてこの世界に流れ着いたのか聞かせてくれ。」

「ああ、そうだな。まずは親父の携帯から……」

人里に向かつて歩きながら、吉影は吉廣にこれまでの経緯を話して

聞かず。

「（…そう言えば、この世界に来てから、敵と闘うことが多くなっ  
たな…）」

吉影は話しながら、ふと思った。

「（もともと、わたしは誰かと闘うことは、全くといって無かった  
…子供の頃から社会人になっても、口論すらしないよう常に気を配  
っていた。だが…）」

「（重ちーとかいう小僧、そして仗助達と会ってから、わたしは闘  
わざるをえない状況に追い込まれることが多くなった…しかし、そ  
れでも奴等とは三回闘ったきりだ…）」

「（だが、わたしはこの世界に来てからというものの、僅か三週間の  
うちに四度も闘った…この幻想郷の住人は、皆闘争心が強すぎる…  
何より、能力や超自然滴な力が平然とまかり通っている。外では誰  
も怪しまないのに、ここで能力を使えばすぐバレてしまう…この世  
界に、わたしの望む【平穏】はあるのだろうか…）」

ここまで考えた時、彼の脳裏を声がよぎった。

冷たい感覚が背筋を走る。

「（大丈夫だ…今までのトラブルは全て乗り越えてきた…恐れるこ  
とはない）」

吉影は嫌な予感を振り払うい、吉廣に話を聞かせながら、人里へと  
帰っていった。

「（　　そうか、吉影、そうなんじゃな…）」

吉影が【振り返ってはいけない小道】のことを話したとき、吉廣は  
確信した。抱きしめたときに既に覚悟はしていたが、それでも涙を  
流さないで堪えるのは辛かった。

「（…お前も、わしと同じ…【魂だけの存在】になっちゃったんじゃない…もうお前は…死んでしまったんじゃない…）」  
彼の頬を、涙が伝った。

「 ……なによ…これは…は… ……」  
射命丸は茫然と呟き、くずおれた。彼女の目の前には、夕陽に赤く染まった、屋根が吹き飛び、壁は無惨に砕け、焼け崩れてしまった彼女の自宅。彼女の宝物であり命の綱である印刷機は切り刻まれた後粉微塵に爆破された跡があった。今まで蓄えてきたネタ帳とフィルムは丹念に焼き捨てられている。いくつも持っていた予備のカメラと新品のフィルムは持ち去られたように残骸が無かった。

「 ……さ……ない…」  
目に涙を浮かべながら、射命丸が呟く。彼女の周りに、烏が群がる。

「 ……許さないわ…あの外来人…！」  
きつく噛み締めた唇から、血がサアツと流れる。

「許さない…絶対に…！アイツに、死よりも辛い苦しみを与えてやるわ…！私の手で、アイツを吊し上げ、晒し者にしてやるわ…！！」

目が、鷹のそれより遙かに鋭く、睨まれただけで凍り付くほど冷たい光を帯びる。それに呼応して、烏達が喧しく鳴き声をあげる。

「待ってなさい…川尻浩作…！！！！」  
無数の烏がバサバサと喚きたて、飛び去って行った。

ED 石罅屋 【二足歩行の天狗 walkin…】



## 第八話 北風と太陽（後書き）

### 次回予告

「なによっ！！うっさいわね！この馬鹿っ！！」

「…馬鹿と言う方が馬鹿だとさっき言わなかったか？」

「う、うるさい！さっきのカエルみたいに氷漬けにしてぶち割ってやるわ！！【ホワイト・アルバム】！！」

スタンド使いの氷精

「キチョーメンな性格だね

おまえを殺（バラ）」す前にちゃんと「DISC」をぬいてキチツとしまっておきたいんだ：おまえは一枚のCDを聞き終わったらキチツとケースに仕舞ってから次のCDを聞くだろう？

誰たってそーする おれもそーする」

さらに現れるスタンド使い

「M16カービンライフル兵隊60名！アメリカ陸軍攻撃用ヘリ【アパッチ】四機！戦車七台！溶解弾砲台二台！弾丸中継衛星一機！何者も逃がさないツ！規律正しい我がスタンド 【極悪大隊】のこの戦場からはなあ〜っ！！」

ついに明らかになる【DISC】の存在

「あいつにな：言ったんだ、【どこへ行くんだ億泰】そうしたらあいつ…【兄貴について行くよ】なんて言いやがって…鬱陶しいから【おまえが決める】【億泰…行き先を決めるのはおまえだ】って言うてやったなら、あいつ…【杜王町に行く】つつつて、消えやがったよ。まったく、俺が死んだ後も足を引っ張る、馬鹿な弟だ…。でもな…」

「あいつはなツ！たった一人の弟なんだよツ！！それを傷付けたお前を、外に帰すわけにはいかねえツ！！キサマは…ここで殺す！！」

そして、相容れぬ者達の闘いは、幕を開ける！！全ては己の護るべき者のために！！

次回　く吉良吉影は静かに生き延びたいく

第？話　【？と兄貴と極悪大隊「(バッド・バタリオン)」】  
お楽しみに！！

ネタバレ

これは嘘予告です

第八話、お楽しみいただけただしょうか？面白いと思っただけ  
たなら幸いです。

最後の吉影の台詞ですが、これがこのSSにおけるテーマです。  
【忘れられた者達】である妖怪や神々にとって幻想郷は楽園でしょう  
が、【忘れられたい者】である吉良吉影にとって、はたして幻想郷  
は楽園たりえるのか、それを主題に据えて話を展開していくつもり  
です。

今回、吉影の父親【吉良吉廣】が登場しましたが、かなり独自設定・  
解釈が入っているので、ここで説明したいと思います。

吉良吉廣：通称【写真の親父】。

東方仗助の策略により吉影の爆弾に巻き込まれたが、その際に【振  
り返ってはいけない小道】を通過して幻想入りし、冥界に迷い込ん  
だ。それからは吉影を探して幻想郷を徘徊していたが、その途中で  
森近霖之助に出会い、外の道具の使い方を教えて仲良くなったりし  
ている。

幻想郷の魔力の影響を受けて亡霊になったり、写真から全身を出すことができるようになった。

【アトム・ハート・ファーマー】：吉良吉廣本体が写った写真の空間を隔離するという結構凄い能力。たぶんカーズ様にも勝てる。

あの東方仗助をここまで震え上がらせた敵も他にない（チンケなんて言わせないっ！）

本体の成長によってスタンド能力も変化し、これまでに写った写真全てを行き来できるようになった。また、本体が映り込んでいなくても彼が撮影した写真には同様に能力が発動する。

【エレクトリック・グランドファーマー】：今までに【アトム・ハート・ファーマー】の支配下に置いた写真の中の空間を、【写真の縁】を越えることで移動する。名前の元ネタは石鹸屋の楽曲『エレクトリック・グランドファーマー』

【ファインダーダイバー】：クリームのように写真の縁を写真内に引き込むことで完全に姿を消せる。名前の元ネタは石鹸屋の楽曲『ファインダーダイバー』

【Crazy Atom Faith Father】：親父の身体の一部が入っている二つの写真同士の空間を繋ぎ、【写真の小窓】にする。名前の元ネタは十方世界の果ての空のCD『狂った原子信母 Crazy Atom Faith Mother』

## 第?話 ?とハジキと?2 (前書き)

第?話です。これからの戦闘はジョジョ東方互いに能力をフル活用する【ジョジョらしい】戦闘を繰り広げていきます。お楽しみください。

大幅な書き直しを行っていないので、未熟な文章になっております。ご了承ください。

【ジョジョの奇妙な東方Project@Wiki <http://www28.atwiki.jp/shinatumiki/page/1.html>】より転載。

## 第？話　？とハジキと？2

「この先か…もうすぐなんだな？」

「おお、すぐ近くのはずじゃぞ。あとは湖沿いに歩いて行けば、三十分ほどで対岸に着くはずじゃ。」

「そうか…ふう、やはり徒歩は疲れるな…。」

吉良吉影は額の汗をハンカチで拭う。

吉影と吉廣の親子は、霧の湖の近く、森の中を歩いていた。

「それじゃあ、わしは一足先に偵察をしてくる。何かあったら、写真に声をかけてくれ。」

「ああ、分かった。それと…。」

吉影がやや声を落とし、感付かれないようそつと振り向く。

「分かっているな…アレの処分は頼んだ。」

「…ああ、任せておくれ。」

吉廣は写真から身を乗り出し、自分にカメラのレンズを向け、シャッターをきった。彼の姿は一瞬で消え、やや遅れてカメラから写真が吐き出される。その中にあるのは吉廣の姿。

「では、行つてくるぞ、吉影。」

「くれぐれも気取られないよう慎重に探ってくれ。ぬかるなよ。」

「分かつとるわい。安心して待つていてくれ。」

吉廣は写真から顔を出し、幽霊の浮遊能力を使ってフワリと森の上空へと舞い上がって行つた。

「…これで成功しさえすれば、わたしは…だが…」

それを見届け、吉影は一人ごち、頭を振る。

「いや、大丈夫…大丈夫だ…安全を保証すると、しっかり明記されていたじゃないか…悪魔は約束を破れない…それに、この機会を逃せば、あと何年間も苦しまねばならない…何を恐れるというんだ…」

『運命』は、いつもわたしに味方してくれているのだ…」

頭に残る不安を振り払い、吉影はまた歩き始めた。

白目のない漆黒の眸が吉影の背中を見つめていた。

一羽の鴉が、一本の枝に留まっていた。鴉は目標の動きを主人に伝えようと、枝から飛び立ち、空へと舞い上がるうとした。だが…

「グギャツ!？」

鴉は何かに激突し、慌てて体勢を立て直す。原因となった物を探すが、そこには何も無い。

「…カア…?」

首を傾げ、今度はゆっくりと飛んでみる。

コッソ

またしても何かに当たった。嘴で何度かつつく。

コッソ コッソ

嘴で何度も確認して、やっと鴉は気付いた。何も無いように見える空間に、透明な壁があるのだと。そして、それが自分を閉じ込めるように上下前後左右に隙間無く並んでいることも。

そして、鴉がようやく自分の状況を把握した直後…

「グギャツ!？ギャ…」

鴉は包丁でメッタ斬りにされたように引き裂かれ、臓物を撒き散らして事切れた。

射命丸を撃退した翌朝、吉影は新聞を買いに出掛けた。あの文屋の様子を探るとともに、他の新聞社に吉影の事を記事にされていないか調べるためだ。

「…よし、ヤツの新聞は休刊だな…印刷機を塵にしてやったのだから当然か…」

吉影は店から出て安堵する。

「しかし、適当に買って見たこの新聞…落ち着いた文章で好感を持

「つたから買つてはみたものの、なんだこの記事は？ほとんどが古いものじゃないか。」

「彼が手に持つて読んでるのは『花果子念報』。姫海棠はたてとかいう天狗の記者（人里どころか外出すらあまりしないらしくかなり拳動不審だった）が自ら売っていたのでパラパラと流し読みして、あまり低俗な内容は無さそうだったから買ったのだ。しかし、買ったのは良いもののいざちゃんと読んでみると、内容は昨日や一昨日のものは全くない。一番最近の記事でも、すでに生徒達の間で話題になって今はもう忘れられているような話ばかりだ。」

「『幻想郷最速の天狗』だと？外では世界中の事件がリアルタイムで駆け巡っているというのに、こんな極小コミュニティの情報を何週間もかけて漁っているのか？それともこの新聞を選んだのがハズレだったのか……」

「また店に戻らなければ、とぶつぶつ文句を呟く吉影。だが、次のページをめくつた時だった、

「……ッ！！」

「つまらなさそうに紙面を眺めていた吉影の目が見開かれた。

「こっこれ……は……ッ!？」

「両手がワナワナと震え、新聞の握っていた部分がぐしゃぐしゃになる。吉影が今にも食い付きそうな表情で一心に読んでいるのは

「『紅魔館大遊技大会 優勝者は莫大な賞金』」

「贅沢に全面を使った、一つの広告。湖の畔にある洋館で催される遊技大会を知らせる物だった。

「……一、十、百、千……ああ……間違いないッ……!!ぴつたりだ……『奇跡』としか思えない!!」

「震える指先で0の数を数え、声を震わせる。

「これが『チャンス』だ！やはり最悪の時にチャンスは訪れた……

「これだッ……この『チャンス』をモノにすれば……わたしはッ……!!外に帰れるっ！もう天狗の眼に煩わされることもなくなるッ！慧音

を殺したいという衝動に悩まされることもないッ！」

吉影の両目が希望に輝く。

「わたしは…自由になれるッ！！やはり『運』は…この吉良吉影に味方してくれるんだッ！」

こう言ったわけで、彼は紅魔館を目指し人里から森を抜けて湖の畔まで来ていた。本当のことを言ったら止められそうなので慧音と妹紅には

『香霖堂で外から持ち込んだ金目な物を売ったり、店に置いてある外の品物の使い方を教えたりして、金を稼いでくる。道案内は妹紅にお願いしたい。三日間は帰らないつもりなので、その間の授業は予め作ったプリントを配布して自習にしてほしい。宿題の答え合わせも配布して各自でやらせてくれ。』

と伝えておいた。妹紅とは今朝香霖堂に案内してもらった後別れ、吉影は香霖堂店主の男にいくつか【外の品物】を見せたり、使い方を教えたり（『コンピュータは式神ではなく、電源が無いと稼動しない』など）して午前を過ごした。そして正午にはとつと香霖堂を後にして、吉廣の案内で森の中紅魔館へと向かっていたのだ。妹紅は三日後に迎えに来ることが分かっているから、三日間にわたって行われる遊技大会から帰るまでは嘘はバレないだろう。そして、終わって見事賞金を獲得してからなら、バレても問題はない。

「ン？」

吉影が森を歩き続けていると、突如として視界が開けた。目の前に広がるのは、霧に覆われた広い湖。

「よし、森を抜けたな。あとはこの湖に沿って歩けば30分ほどで着くと言っていたが…本当なのだろうか…？」

吉影は湖を見渡す。霧に覆われているため大きさが全く分からない。霧の中に消えていく畔がどこまでも際限無く広がっているような感覚を与えている。



「…取り合えず、少し休憩しよう。水筒の水も汲んでおくか。」  
吉影はしゃがみ両手で水を掬い、一口飲んだ。ひんやりとした感覚が疲れた身体を癒す。満足気に溜め息をつき、彼は竹製の水筒で水を汲もうとした。が

「……？」

彼の手が、ピタッと止まった。

「これは……？」

吉影が凝視しているのは、異様な光景だった。こちらにゆっくりと流れてくる氷の塊。その中には

「なんだ…？カエルか…？何故こんな物が…、ッ！！」

何かか飛んでくる音。吉影は咄嗟に【キラークイーン】の脚でバツクジャンプし、それを避ける。

ドスト

一瞬前まで吉影がしゃがんでいた場所に、つららが突き刺さった。

「…誰だ…？わたしに何の用だね？」

スタッと着地し、つららの飛んで来た方向を睨みながら身構え、呼び掛ける。

「フフン、あたいの『きしゅ〜』を避けるなんて、あなたけっこうやるわね。」

霧の立ち込める湖上から、犯人は姿を現した。背中に氷の翼を持った、十代にも満たない少女が水面の上に浮かんでいる。

「…もう一度だけ訊いてやる。わたしに何の用だね？」

【キラークイーン】の目で油断なく観察しながら、吉影が言う。

「今ね、新しい必殺技を試してみたいって思ってたところなのよ。タダの人間じゃあすぐ凍り付いちゃって全然練習にならないから、ちようどよかったわ。」

少女は腰に手をあてて威張って答える。

（そうか、コイツが噂の氷精…ならば、妖精と同じ方法で…）

吉影は構えを解き、警戒心を感じさせない姿勢をとる。もちろん【キラークイーン】は身構えたままにさせておく。

「あら、もう観念しちゃったの？つまらないわね、せつかくびつたりの実験台を捕まえたと思ったのに。」

「君…何のためにわたしを実験台にしようというのかね？」

「あつたりまえでしょ！『最強』になるためよ！！」

「最強…？」

「そよよ！あたいはもう『最強』だけど、最近人間に負けちゃうこともあるのよ。だから、あたいはもっと強くなって、ずくと『最強』になるのよ！！」

ビシツと人差し指を吉影に向け、威勢良く言い放つ。だが、そんな彼女を見て、吉影は声をあげて笑い始めた。

「なつなによ！なにがオモシロいのよっ！！」

馬鹿にされたと思い、少女が声を荒げる。

「いや、君の言っていることが少し滑稽だね…」

「『こっけ』？」

頭に鶏を思い浮かべ、首を傾げる氷精。

「君、確か『最強になる』と言ったな？」

「…そよよ。それがどうしたっていつのよ？」

「…君は、『最強』になっただけで満足なのか？」

「？どゆゝ意味よ？」

「…お前、『最強』が一番スゴいと思っているのか？」

「決まってるじゃない！！『最強』が一番強いよ、知らないの？」

さてはあなたバカねっ！」

妖精に馬鹿と言われてイラツときたが、吉影は話を続ける。

「…君みたいな木っ端妖精は知らないだろうし、知らなくても良いんだが…この世には、『最強』よりもスゴい物があるんだよ。」

「？『最強よりスゴい』？なによそれ？」

興味をそそられ、氷精が神秘的な面持ちで訊ねる。

「『究極』…というんだがね…」

「『きゅきよく』？それが『最強』より強い物なのね！じゃああた、これから『きゅきよく』になるわ！！」

まだ成つてもないのにふんぞり返る氷精。さすが妖精、驚くほど単純である。

「…お前…、『究極』に成りたいか？」

「ええ、そよよ。あたいは『きゅきょく』に成つて、『最強』より強くなるのよ！」

「そうか、なら頑張るといい。…だが、『究極』の定義を知っているのか？」

「…ううん、知らない。」

しばらく考えた後、氷精が答える。

「どうなつたら『究極』に成れるか知らないというのに、『究極』になるうというのか？」

「……………」

さすがの妖精でも、自分の計画性のなさに気付いたのだろう、俯いて押し黙る。落ち込んだ様子の彼女を見て、吉影はやれやれと首を振る。

「…仕方ない、特別にわたしが『究極の定義』を教えてあげよう。」

「えっホント!？」

目を輝かせる少女。

「ああ、じゃあ言うぞ。よく聴いておくんた。」

コクコクと頷く氷精の前で、吉影は即興で考えた文章を暗唱する。

「『ひとつ 無敵なり！』

ふたつ 決して老いたりせず！

みつつ 決して死ぬことはない！

よつつ あらゆる生物の能力を兼ね備え、しかも その能力を上回る！

そして その形はギリシアの彫刻のように美しさを基本形とする。』

朗読するかのようにスラスラと淀み無く言い切った。流石はD学院大文学部卒、常人にはできないことを平然とやってのける。

「さあ、覚えたな？暗唱してみせてくれ。」

「……………、えっ！！あ  
っ、えっええっと……」

呆然としていた少女はハツとして、慌てて思い出そうとする。だが、全く言葉が出てこない。頭を抱えてうーんと考え込んでいる氷精を見て、また吉影はやれやれと溜め息をつき、懐から手帳と鉛筆を取り出す。

「…メモをあげよう。これを暗唱できるようになった頃には、きっと『究極』に近づいているはずだ。」

それを聞いて、少女はガバツと顔を上げ、キラキラと目を輝かせた。

「ほっホント！？それを覚えれば、あたいは『きゅくきょく』になれるのねっ！」

振り仮名を振って、メモを手帳から破り取り、氷精に投げて渡す。

「ああ、なれるとも。ガンバって覚えたまえ。ところで、ひとつ尋ねたい事があるんだが、この霧は君が発生させて……」

氷精が夢中になってメモを読んでいるのを見て、吉影は顔をしかめる。氷精を放置し、吉影は湖に沿って歩き始める。

(さて…うまく戦闘を回避出来た…だが…)

彼はブルツと身体を震わせ、身を縮こめた。吐く息が白い。

「…意図していないにせよ、君はわたしの邪魔になる…消えてもら  
うぞ、氷精。」

【キラークイーン】の親指が、爆弾に変えたメモの起爆スイッチを押した。

爆弾が作動することは、なかった。

「むッ？何故だ？爆発音が……」

吉影が訝しげに振り返ると

「なツ：なんだとおオオオツ！！？」

氷精はいまだ一心不乱にメモを読み続けていた。その手に握っているメモは、表面を薄氷に覆われている。

（くそっ！まさか、真空以外にも我が【キラークイーン】の爆弾の『天敵』が存在したとはッ！：だが、ヤツは自分が攻撃を受けたことに気付いていない：無駄な『闘い』をするよりは、あと帰りの一度しか遭遇しない『天敵』を見逃すべきか：？）

【キラークイーン】の撃墜射程距離と、氷精との距離を測りつつ、思案していた時だった。

「『銃は剣よりも強し』」

ンツンツン名言だなこれは。」

「ッ！！」

声のした方向を振り向くと、湖の畔に一人の男が立っていた。

「でも、『剣は拳けんよりも強し』とはあまり言わねーな。ダジャレ臭くて締まらないからか？」

カウボーイのような出で立ちの欧米人のその男は、流暢に日本語を話し、歩み寄ってくる。

「：お前、何者だ？見たところ、外人らしいが：」

男の腰のホルスターに収納されているリボルバー拳銃に目をやり、吉影は問いかける。

「おうよ。アンタもそーみたいだな。」

「ああ、どういうワケだかこの世界に迷い込んでしまったね…。それはそうと、貴方は外人人である以前に外国人であるようだか：」

「ン？なんでこんなに日本語ペラペラなのかってことか？さあな、この世界に来た途端喋れるよーになっちまってよお。俺にもサツパリなわけよ。」

吉影は男の足運び、目線、表情を【キラークイーン】の目で観察する。

（こいつ…！一見ヘラヘラと喋っているだけに見えるが、目が全く油断していない…！！何者かは知らないが、恐らく敵か、少なくとも

も『敵対心を持っている』ことは間違いないッ！)

(まさか、コイツも遊技大会に参加しようところに来たのか？それならわたしを始末して勝率を高めようと考えるのも分からなくはない…ここはこちらの警戒心を覚らせず、確実な【キラークイーン】の射程距離に入った瞬間に…！)

「そうか、突っ掛かって悪かったな。この世界はなにかと物騒なもので、少し疑心暗鬼に陥ってしまった。」

吉影は肩の力を抜き、楽な姿勢をとる。警戒心を与えない、落ち着いたいつもの態度だ。

「いや、謝るこたあねーよ。誰だってそうなるもんさ。特に日本人なら、この世界の『ヨウカイ』とかいうのに鮮やかな髪や目の色したヤツが多いからな、俺がそいつらの仲間だと思われても仕方ねーことだと思っぜ。」

男は歩み寄ることを止め、立ち止まった。

(くっ…もう少し距離を縮めなければならぬのに…本当は相手から来てほしかったが、わたしの方から接近するしかないな…)  
ゆったりと相手に覺られないよう、足を運ぶ。

「あんた…行く当てはあるのかい？わたしはここから森を突っ切ったところにある人里でお世話になっているが…。もし寝床や食事に困っているのなら、案内してあげようか？お互い、この世界ではイレギュラーだ。似た者同士、助け合うのが当然とじゃないか？」

「ンーン、それはありがたいね。さすがにいつまでもアウトドアってワケにもいかねーからな。調味料の持ち合わせも底をついちまたし、和食も食べてみたいって思ってたところだ。」

男は嬉しそうに笑う。その間にも、吉影は男との距離を詰めていく。

(よし、あと一步…あと一步近寄れば、確実に【キラークイーン】の射程内だ…)

【キラークイーン】の指がポケットに伸び、『弾丸』を取り出そうとした時だった。

「……だが、遠慮しておくぜ。俺とお前さんは、ちよつとばかり似た者」過ぎたみたいだからなッ!!」  
メギヤンツ!!」

男の右手に、一瞬で拳銃が出現した!

「なッ!?!」

銃口を向けられ、慌てて【キラークイーン】に防御態勢をとらせる。

(こ、こいつの目…わたしを見ていない!それに、あの拳銃…!まさか…!?)

「…お前…新手のスタンド使いか!」

男はスタンドの拳銃をくるくると回し、余裕をこめた目で吉影を眺める。

「そっぴやあ、お前さんの質問にちゃんと答えてなかったな。ホル・ホース、おれの名前だぜ…【皇帝】のカードを暗示するスタンド使いってわけよオ。」

「【皇帝】…?『暗示』…?タロットカードか?(そう言えば、承太郎のスタープラチナも由来はタロットカードだったな)」

「そのとおり、最近じゃあタロットカードと関係ないスタンド使いが増えてきたらしいけどな。」

ホル・ホースは視線を【キラークイーン】から逸らさず、まだメモを読み耽っている氷精に声を掛ける。

「おいチルノよお、いつまでそんなもん眺めてんだ?」

声を聞き、チルノと呼ばれた氷精は八つと顔を上げる。

「あつホル・ホース!!また遊びに来てくれたの?」

チルノはホル・ホースの方を振り向き、吉影の姿に気付いた。

「あれ?さっきのおじちゃん!なんでホル・ホースと喋ってるの?もしかして友達?」

チルノに気付かれ、吉影は焦る。

(ま、まずいッ!この男、さっきの氷精と面識があるのか!片や天敵、片やスタンド使い…この二人と闘うのは、非常にまずいッ!!)

「いんや、今遭ったばつかさ。それとチルノ、このおっさん信用するんじゃねえぞ、『悪い人』だぜ。」

「えーっ違うわよ、その人良い人よ！あたいに『きゅーきょく』を教えてくださいましたもん！」

「だったら、その紙切れ捨ててみな。一発で正解が分かるだろーぜ。」

「ッ！！」

目を見開く吉影の前で、チルノは文句を言いながらもメモから手を離れた。メモはひらひらと落ちていき、水面に触れ…

ドグオオオオ！！

凍結が融けて爆発した。

（こいつ…【キラークイーン】の爆弾を見破った！？なんとという男だ…！スタンド自体はチンケなナリだが、恐るべき洞察力…間違いなく実戦経験も豊富っ！出来ることなら、闘わないで済めば最良だが…）

チルノは突然の爆発にかなり驚いたのか、混乱している。

「なっなによコレ！？なんで紙が爆発するのよッ！」

「な？言っただろ？このおっさんがチルノ、おめーを爆破するために能力で攻撃したんだよ。」

「じゃ、じゃあ『きゅーきょく』は…」

「んなもんウソっぱちに決まってんだろお、お前騙されてたんだよ、コイツに。」

ホル・ホースが吉影をあごでしゃくる。チルノは吉影を睨み付け、怒りを露にする。

「よくもあたいを騙したわね！『最強』のあたいを怒らせたらどうなるか、頭が破裂するくらいみっちり教えてあげるわー！！」

「ぐっ…！！」

吉影は歯ぎしりして後ずさる。

三人は臨戦態勢にはいり、チルノは湖上、吉影はチルノの正面、ホ



ル・ホースは吉影の左側で、それぞれ身構える。

「いいか、おっさんよお…おれがお前を倒すのは、こいつ…チルノを爆破しようとしたことだけが理由じゃねえ…」

ホル・ホースがジャキンツと【皇帝】の銃口を向ける。

「おれあ生まれてからずっと世界中旅して、いろんな悪党を見て来た…だから悪い人間と良い人間の区別は『におい』で分かる！」

ホル・ホースは顔をしかめ、鼻をつまむ。

「こいつはくせえッ！ゲロ以下のおいがプンプンするぜッ！  
！！こんな悪には出会ったことがねえほどなアー！！」

その言葉に、吉影はピクリ、と眉を動かす。

「ほう…数分前に出会ったばかりの男にそこまで言われるとは、心外だな…？わたしが君の御友人を、『始末』しようとしたからかね？だが、イキナリわたしを攻撃してきたのはヤツだ。いくら外ではわたしは善良な会社員だったとしても…妖怪変化や魑魅魍魎の類が我が物顔で蔓延っているこの世界では、相手が例え無邪気な少女であつたとしても…確実に打ち倒し『安全』を確保する…そう考えることを『悪』だと断定できるのか？」

吉影の台詞に、ホル・ホースは唾を吐き捨てる。

「『善良な会社員』だと？ちがうねッ！！てめえは生まれつきの悪だッ！！言い表しようのない汚らわしい『におい』がしやがるぜッ！」

吉影はホル・ホースの【皇帝】と湖上のチルノとに注意をはらい、

【キラークイーン】に胸ポケットに手を伸ばさせる。

「女の血だッ！トンでもなく生臭えにおいだ！！その手で何人の女を殺してきたっ！？」

吉影の表情が敵意に歪む。

（くそっ！この男…！！やはり生かしてはおけない！！わたしの『本性』を即座に見透かすとは、最悪の『敵』に他ならないッ！…こいつとは、闘わざるを得ない！！）

「おれは世界一女にはやさしい男なんだ！！世界中にガールフレンド

ドがいる！女にうそはつくが女だけは殴ったことはねえ！ブスだろ  
うが美人だろうが才女だろうが馬鹿だろうが女を尊敬しているから  
だ！」

ホル・ホースも冷酷な殺し屋の目付きで吉影を睨む。

「貴様はツ！女の敵だ！！」銃は拳けんより強し』っ！！てめえはこの  
ホル・ホースが直々にぶつ殺す！」

【皇帝】のハンマーを起こし、吉影の眉間に照準を定める。

「あたね、どうしても一回人間に文句言っつてやりたかったことが  
あるのよ！」

チルノは闘争心をたぎらせて吉影を威圧する。

「なんで『女』『犬』『米』『青』で『ようせい』って読むのよッ  
！！！つも音合っつてないじゃないのッ！！やっつてられないわッ！く  
そっ！くそっ！」

「……………」  
吉影、ホル・ホースの二人が間の抜けた目付きでチルノの方を見る。

「……………あれは『女』『犬』『米』『青』じゃなくて、『妖しい』の  
『妖』と『精霊』の『精』なのだが…？」

「……………うつつるさい！！国語の教師かっ！！」  
チルノは顔を真っ赤にして逆ギレする。

啖呵をきり終わり、戦闘が始まった。

「氷符『アイシクルフォール - easy - 』！！」

最初に攻撃したのはチルノだった。スペルカードを掲げ宣言すると、  
物凄い数の氷の弾幕が襲っつて来る。彼女の攻撃と同時にホル・ホー  
スはバックジャンプで吉影との距離をひらく。

「ぐっ…！！【キラークイーン】！」

胸ポケットの中の物を取り出すのは諦め、【キラークイーン】に防  
御の態勢をとらせる。

ゴオオオオオオオオ！！

氷の弾幕は轟音と共に吉影に迫り 彼の横を通りすぎていった。

「……………は？」

チルノを始点に展開される氷の弾幕は、吉影の両脇を通過するだけで、全くダメージは無い（しいて言うならかなり寒いことぐらいか）。さらにチルノが追加弾幕を撃つこともなければ、弾幕が吉影に向かつて横薙ぎに迫って来るわけでもない。

「…なんだ、このスペルは…？全く意図が見えない…。妖精は総じて馬鹿だとは聞いたが、これもその表れなのか？…いや…ッ！」  
吉影は自信満々に腕組みして自分を眺めるチルノを観察する。

「あの様子…やはりなにか考えがあるッ！だがいったい何を…、ッ！？」

しまった！と吉影はホル・ホースの方を見る。氷の弾幕に遮られ、彼の姿は全く見えない。

「甘くみたな　！！やはりてめーの負けだッ！」

氷の弾幕の向こうで、【皇帝】が火を噴いた。弾丸が氷弾幕の間を抜け、吉影を襲う。

「なるほど…いかにも防御に適さなそうなああの男を、氷の弾幕でわたしから隔離し、得意の弾幕戦に持ち込む…と言うわけか…だがッ！」

【キラークイーン】が腕を振り上げる。

「これしきの弾丸、叩き落とせないとも思ってたか！！この五月蠅い蠅共を払え、【キラークイーン】！！！」

【キラークイーン】の腕が弾丸を叩き落とそうと振り下ろされた。だが

「なにイツ！？」

【キラークイーン】の拳は空しく空を切った。弾丸が軌道を曲げて迎撃を避けたのだ。

「弾丸だつてスタンドなんだぜ…っ？オレをナメきつてそこんことを予想しなかったあんさんの命とりなのさあー！」  
ボグオオオ！！

【キラークイーン】の脇腹に、【エンペラー】の弾丸が命中した。

「ぐあッ…！」

吉影の脇腹に穴が開き、口から血が滲む。

「なるほど…軌道を曲げて弾幕の間を縫って撃っていたのか…しかし…！」

まだこの程度のダメージで彼はダウンしたりはしない。吉影も反撃に出る。

「甘く見ているのは貴様だッ！我が【キラークイーン】が近距離パワー型スタンドだからと、油断するんじゃないぞ！」

【キラークイーン】が吉影の胸ポケットから取り出したのは、ドングリ型の拳銃弾。彼の親父が外の道具の使い方を教えた礼にと香霖堂店主からもらった物だ。

「銃弾を『爆弾』に変えてッ！」

ホル・ホースのいる方向に銃弾を撃ち込む。銃弾は小石とは比べ物にならないほどの速さと精密さで氷の弾幕にぶつかり、爆発した。だが

「ぐあああッ!?!」

爆発によって発生した膨大な熱が、鏡面のような氷に反射され、吉影を焼く。

「くそッ！この氷の能力、予想以上に相性が悪いッ！」

【キラークイーン】を盾にして熱線のダメージを軽減し、曲がりくねりながら迫る【皇帝】の銃弾を叩き落とす。

「しかも、チルノ自身はから空きだと言うのに、このセコいスタンドのお陰で反撃ができないッ！退路も断たれてしまった…！こいつら、お互いの弱点をカバーし合っている！くそッ！このままでは埒が明かないッ…！」

銃弾を摘み取って潰し、【キラークイーン】が左手を空に掲げる。

「【シアーハートアタック】ッ…！」

【キラークイーン】の左手の甲から、一発の爆弾戦車が放たれた。

「目標はこの弾幕の向こうにいる男だッ！一片の骨肉も残さず『始末』しろッ…！」

【シアーハートアタック】はギャルギャルとキヤタピラで空を掴み、氷の弾幕へと突っ込んで行く。

「コツチヲミロオ」

低温であるため爆発することもなく、パワフルに弾幕を突破しホル・ホースの目の前に現れた。

「なっなんだあゝコイツっ!? チルノのアイシクルフォールを難なく突破しやがった!!!」

慌てて【エンペラー】を乱射し、【シアーハートアタック】を撃破しようとする。だが、勿論こんなヘナチヨコ弾ごときでは掠り傷一つつかない。さらに、着弾の衝撃で【シアーハートアタック】の体表の温度が上がり、爆発した。

ドグオオオオオオ!!!

「うおおおおおおおおおッ!?!」

氷の反射が今度は仇となり、爆風と熱線が無駄なくホル・ホースに襲い掛かる。【シアーハートアタック】からかなり離れていたのが致命傷には至らなかったが、軽度の火傷を負ってしまった。

「今ノ爆発八人間ジャネエ!!!」

爆炎の中から【シアーハートアタック】が飛び出る。

「くそっ! このスタンド、まだパワフルに元気いっぱいに向かって来やがるッ!!!」

ギャルギャルと土を抉りながら迫って来る【シアーハートアタック】を見て、ホル・ホースはチルノに向かって叫ぶ。

「チルノお!!! アレをやるぞッ!」

それを聞き、チルノはにんまりと笑う。

「やっとアレを試せるのねっ! 腕が高鳴ってくるわ!!!」

チルノはホル・ホースのいる場所の近くの水面に氷を張り、自分の側まで道を作る。

「よおっ〜とお〜!」

ホル・ホースが氷の足場に飛び乗り、チルノの下へと走る。追跡して来る【シアーハートアタック】を無視して、走りながら吉影を狙

う。

「クソッ！あのスタンド使い、湖上に逃れたか！」

チルノを狙撃しようとしていた吉影は、斜め前方から襲い来る何発もの銃弾を爆弾で撃墜する。乱反射する熱線が全身を焼くが、今度は威力を抑えていたためダメージは少ない。

その間に、ホル・ホースはチルノの側まで来た。

「今だチルノッ！アレをやれッ！！」

「分かったわ！」

アイシクルフォールを仕舞い、他のスペルカードを取り出す。

「凍符『パーフェクトフリーズ』！！」

アイシクルフォールが解除され、辺り一帯広範囲に氷の弾幕が展開される。かなりの高密度弾幕だ。

「ムッ！？」

視界が開け、吉影が辺りを見渡すと、湖の一角が無数の氷に埋めつくされていた。吉影の周りにも拳大ほどの氷が浮かんでいる。

「コッチヲミロオ〜」

【シアーハートアタック】は氷に阻まれ、身動きが出来ない。温度も低いので爆風することも出来ず、ただ空中に浮かんでいるだけだ。

「しばっ！！」

【キラークイーン】が氷に裏拳を見舞う。が、氷はひびが入るだけで微動だにしない。

「なるほど、わたしの動きを封じた、というわけか。確かに、これでは身動き出来ないな…。これだけ広範囲に反射物があると、閃光弾も使えない…。なかなかハードな状況だな…。」

吉影は苦笑いを浮かべ、シアーハートを戻し、打開策を探る。

「ちよつと！なんでホル・ホースの見えない弾幕が当たらなかったのよー！」

「それがなあ〜チルノよお、あの悪党、俺の弾幕が見えるんだよ。」

「ええっ！？なんで？あたいには何も見えないのに！」

「ヤツは俺とおんなじタイプの能力を持ってるんだよ。この世界でお目にかかれるたあ思ってたけどな。だからヤツには俺の弾幕が見えるし、同じように俺はヤツの能力が見えるってわけさ。」  
チルノはしばらく頭にハテナを浮かべていたが、ピーンツ！と何かをひらめいて嬉しそうに言う。

「分かった！あたいそのお話知ってるわ！『裸の王様』っておとぎ話よね？馬鹿には見えないってウソを言ってたけど、本当は頭の良いい人には見えないんでしょ？やっぱりあたいたら天才ね！」

「…うん、もうそんな感じで良いぜ…」

話し終わると、ホル・ホースは【エンペラー】を乱射する。弾丸は氷の間を縫って吉影に迫る。

「くっ！邪魔だッ！」

【キラークイーン】が防御の邪魔になりそうな近くの氷を手当たり次第に爆弾に変え、爆破していく。消滅するだけの威力に抑えているため、熱線は反射しない。間一髪のところまで防御が出来る程度のスペースを確保し、銃弾を迎え撃つ。

「しばっ！！！」

曲がりくねって全方向から襲って来る弾丸を、殴り、叩き、摘み、潰す。

「どうしたア！？威力も弾速もガタ落ちだぞッ！」

見事全弾叩き落とし、【キラークイーン】に拳銃弾を構えさせる。

「これしきのこと、わたしの反撃の手段を奪ったと思うのは大間違いだッ！！！」

照準を定め、銃弾が発射された。パーフェクトフリーズの隙間を縫って、チルノに爆弾が迫る。チルノは身じろぎ一つしない。銃弾を遮る物も何も無い。

「勝った！！死ねッ！！！」

【キラークイーン】が爆弾のスイッチを押そうとした時だった。ギューン！

バチッ！ギョーン！！  
ギョイン！ギョーン！！

「…なんだこの音は？何の音だ！？」  
チルノの周りで火花が散る。

「フッフ、あたいのやつとあたいの必殺技を試すことが出来たわ！」

チルノは心底嬉しそうに笑い、得意顔で話し始める。

「あたいは『最強』だから、『最強』の冷気で綺麗な氷を創ることが出来るのよ！『最強』で『天才』でしかも『げくじゅつてき』！  
！あたいつたら『最高』ねっ！！」

「……………」

「『何言ってるんだ？』って聞いたそんな表情してんでおせっかい  
焼きのホル・ホースが説明させてもらうがよ！

超低温は『静止の世界』…低温世界で動ける物質はなにもなくなる  
！全てを止められる！

チルノの『パーフェクトフリーズ』が最強なのはそこなんだよ！  
爆走する機関車だろうと止められる！荒巻く海だろうと止められる  
！

そして、チルノはその冷気で水や水蒸気を丁寧に凍結させて、純度  
の極めて高い氷を作っていたのだ！見えないか？止まった水蒸気が  
見えないか？よく見ろよ！」

「なにイツ！？」

吉影が驚愕の表情を浮かべる。

バチッ！ギョーン！ギョイン！ギョーン！



「『弾丸』だ…！これは空中で『弾丸』が跳ね返ってる音だアー！  
！」

ホル・ホースが最後に締めくくる。

「『パーフェクトフリーズ ジェントリー・ウィープス！（静かに泣く）』」

すでに氷の壁を作っていたのだツ！！」

だが、吉影は狼狽えず冷静に行動する。

（しかし、甘いツ！いくら銃弾を防いだからと言って、わたしの『爆弾』は無効化出来ないツ！）

「【キラークイーン】！起爆しろツ！」

【キラークイーン】が右手のスイッチを押した。だが  
「クソツ！まただ！」

爆弾は作動せず、氷の壁の間をビリヤードのように駆け巡っている。

「…だが、何故だ…？ いったいどうやって亜音速で飛び回る銃弾を…！？」

ホル・ホースがチツチツと指を振り、解説を始める。

「『昇華』…ってあるよな？ 固体が液体に成らずそのまま気化した  
り、その逆だったり…北国とかで樹木がキレイに氷の結晶で覆われ  
たりしてるのがそれだ。同じようにツ！この湖の霧を一瞬で『昇華』  
させて、銃弾の表面を氷結させたつっわけよお！！チルノから近  
い場所なら、空気を含まない純粋な氷を作ることが出来るツ！アン  
タの爆弾も全部無効ってことだ！」

「ぐっ…！」

「さあ、説明は以上だ！チルノツ！」

「オツケー…！」

「バツギイーン…！」

「なつなにイッツ！？」

氷の壁から銃弾が撃ち返された！！

「マズイっ！解除しろオツ【キラークイーン】…！」

だが、爆弾を解除する前に氷結が解除され、起爆した。

ドグオオオオオオオオ！！

吉影の目前で爆発が起こった。

「ぐおおおおおおおお！！」

氷の壁で増幅された爆風と熱が吉影を襲う。

「危なかった…あと一メートル手前で爆発していたら…！」

吉影はなんとか持ち直し、今度は接触起爆型の爆弾を構える。

ホル・ホースは【エンペラー】を引っ込め、ホルスターからリボルバー拳銃を抜く。

「しばらく使ってなかったが、いっちょコイツに活躍してもらおうか。」

吉影に狙いを定め、右手の親指をハンマーに掛けて、左手も添える。

その様子を見ていた吉影は、疑問を口にする。

「あの男…スタンドを引っ込めて拳銃を抜いた…？スタンドの射程外だからか？それに、奴のあの構え…」

ホル・ホースの左手が通常とは違った位置に添えられているのを見て、吉影は訝しがりつつも、【キラークイーン】に防御の構えをとらせる。

「くたばりやがれッ！」

ホル・ホースはファイニングショットと呼ばれる、左手の指でハンマーを起こし、右手の指で引き金を引く方法で連射した。

「むッ！？」

リボルバーらしからぬ連射に吉影は軽く驚いたが、

「馬鹿なっ！この弾幕の中を只の銃で狙撃など、出来るわけがない！万が一わたしに届いたとしても、通常の弾丸程度なら難なく受け止められるッ！」

【キラークイーン】の目で銃弾を睨む。案の定、弾丸はパーフェクトフリーズに激突した。しかし、予想外の事態が起こった。

「なにッ！！！！？」

あれほど強固に固定されていた氷の弾幕が、銃弾の追突を受けて弾き飛ばされたのだ。

「言い忘れていたけど、あたいの『パーフェクトフリーズ ジェン トリー・ウィープス』は時間が経つと『融けて』滑り始めるのよ！」

チルノが『どうだ!!』と胸を張って言う。

銃弾は氷を弾き飛ばし反射され、飛ばされた氷と共にさらに次の氷、その次の氷と、ねずみ算式に弾幕を突き動かす。あっちでぶつかり、こっちで衝突し…最初たった数発だった銃弾が乱反射し、何百発の不規則な弾幕と共に向かって来る!

ギューン!

バチッ!

ギューン!!

ギューン!

ギューン!!

「【キラークイーン】 ツツツ!!」

【キラークイーン】が両拳で弾幕を迎え撃つ。

「しばしばしばしばしばしばしばしばしばしば

ばしばしばしばしばしばしばしばしば

ばしばしばしばしばしばしばしばしば

ばしばしばしばしばしばしばツツツ!!!!!!」

全方向から襲い掛かって来る弾幕を叩き潰し、爆破する。最早火傷するなどと言っていていられない。鋭利な氷が吉影の身体中を切り裂く。血が噴き出す。全てのスタンドパワーを振り絞り、ギリギリのところで致命傷は避け、全弾叩き落とした。

「ぜえ…ぜえ…ハア…ガフツ…」

(し、しまった、体力が…!)

「お〜ブラボ〜!!」

「ぶらぼ〜!!!!」

疲労困憊している吉影を見て、ホル・ホースとチルノが感嘆する。

「だが…甘いゼツ！オツサンよオ！！」

ドスッ！

吉影の身体が、ビクンと震える。

「ぐあっ…あ…ああ…！？」

吉影は苦しげに嗚咽をあげ、ガクガクとくずおれる。その背中には、鋭利な氷が突き刺さっていた。

「な、何故…？全て、は、弾いたはず…」

首を回し、背後を確認する。そこにあつたのは、人間の掌ほどの大きさの浮遊する物体。

「『マンハッタン・トランスファー』…弾丸中継衛星のスタンドさ。ソイツでおめーの弾き飛ばした氷の破片を反射させたってわけよ。」

ホル・ホースの額から円盤状の物がはみ出ているが、帽子で隠れて

吉影には見えない。

「ぐっ…ぐおお…」

最後の力を振り絞り吉影は立ち上がる。その様子は脇腹の傷や背中に刺さる氷だけでは考えられないほど弱々しい印象を受ける。

「フフフ…効いてきたみたいね…」

チルノがしてやったりと笑う。

「どうした悪党、随分と寒そうじゃねーか？」

ホル・ホースも笑い声をあげる。

「うっ…うっ…！」

吉影は身を縮こめて白い息を吐く。ビタツと鼻の穴が凍りつく。

「呼吸の湿気で鼻の穴がぴったりくっついて！」

手で鼻に触れてしまった。

ビシッビシ

「ゆ…指まで…は…鼻に！」

「そりゃあ、あれだけ運動したんだからなあ〜！息があがるのも当り前だぜ〜ッ！」

唇も端から凍りくっついていく。

ビシビシ

「ウツッ！」

ビシビシ

「…ま…まずイッ！湿気で唇までが…！！

寒いとか言うよりもこのままだと、こ…呼吸ができなくなってしまうウツッ！」

「いいえ！息が出来なくなるとか言うよりも先に、氷漬けにしてあげるわっ…！」

吉影の身体が足元から氷に覆われていく。

「ぐおおおおおおお…！！！」

足を完璧に固定され、身動き出来なくなる。【キラークイーン】に削らせるが、瞬間間に膝まで分厚い氷に覆われてしまった。

「この霧の湖は常に湿度が高い上に、お前が起こした爆発のお蔭で、かなりの水が蒸気になったからな！ああ〜っと言う間に人の彫刻の出来上がりだ…！」

「そしてっ！」

チルノがパチンと指を鳴らす。

「これでだめ押しよっ…！」

パーフェクトフリーズが解除され、解凍された水が吉影に降り注ぐ。水は一瞬で凍り付き、空気を含まない氷となって吉影の全身を包む。

「ぐあああああああ…！！！」

口も凍らされ、悲鳴を遮る。数秒後、吉影は巨大な氷塊の中に閉じ込められ、動かなくなった。瞬き一つせず、時間が止まったかのよう。

「やった…！やったわっ…！あたいとホル・ホースの作戦、『パーフェクトフリーズ ジェントリー・ウィープス』が成功したわっ…！」

チルノが歓喜して飛び回る。



気が無ければ爆発しないんじゃないのかアツ！？」

ホル・ホースが慌てふためいて叫ぶ。

「…氷自体を爆弾に変えれば、酸素は外側にいくらでもある。」

「…あつ！！」

しまった！とホル・ホースが声をあげる。

「ちよつと！どういうことよホル・ホース！あなたアイツを氷漬けにすれば大丈夫って言うてたじゃない！！なんで爆弾が使えるのよ！！」

「い、いや、すまねえおれの間違いだった…で、でも、今はそんなこと言ってる場合じゃないだろ？後で思う存分一緒に遊んでやるからっ、今はとにかくヤツを倒すことに専念しようぜっ。なッ？なッ？」

チルノに責め立てられ、ホル・ホースはバツが悪そうにしながら必死になだめる。だが、そんな二人には話し合う時間さえ与えられることはなかった。

「『覚悟』とは！！暗闇の荒野に！！進むべき道を切り開く事だッ！！」

ハツと二人は自分たちの状況に気付く。

「ま、マズイツ！パーフェクトフリーズがほとんど残ってねえぞ！」

吉影を氷漬けにするため解凍したので、弾幕の密度は非常に薄く、スカスカになっていた。

「や、野郎まさか…このために、【あえて】氷漬けになったって言うのか…！？」

ホル・ホースがギリツと歯を噛み締める。

「はつきりと…確実に今度は見える…」

【キラークイーン】が吉影の胸ポケットから取り出したのは、一発のライフル弾。射程距離、威力共に拳銃弾の比較にならない物だ。「ヤバいッ！奴め、あんな隠し玉まで持ってやがった！」

【キラークイーン】が残り少ない弾幕の間を縫い、チルノに狙いを

定める。標的との距離から銃弾の軌道を計算し、角度を微調整する。

「そこだーッ！！たしかに進むべき道がッ！暗闇に見えるぞッ！」  
【キラークイーン】の親指が接触起爆型ライフル弾を弾き出したっ  
！弾丸は音速で飛翔し、チルノを貫通爆砕しようとする！

「チルノおおッ！！氷の壁で防いでも駄目だっ！さっきのように凍らせるオッッ！！」

ホル・ホースの叫びに、チルノがハッと顔をあげる。

「凍符『パーフェクトフリーズ』！！」

チルノの周囲が急激に冷却される。だが

(む…無理よ…)

チルノの小さな身体がガタガタと震える。

(無理よ…！そんなこと…！だって、見えない速さの弾を凍りつかせるなんて…！！)

彼女は既に自信を失いかけていた。『P・F・G・H』が破られ、自身の『最強さ』が揺るがされたのだから。それに、今度はさっきとは状況が違い過ぎる。前は『P・F・G・H』で減速させ、反射中の弾丸を時間をかけて凍結できた。しかし、今回は違う。音の速さで迫り来る銃弾を、『P・F・G・H』で反射することなく、しかも空気を含むことなく、瞬時に凍りつかせなければならぬのだ。

(駄目…やっぱり無理よ…！だって…だって！難し過ぎるもの…！)

目の端から、涙が零れる。頬を雫が伝う。彼女の中に、もはや闘争心は残っていないかった。だが、その時

「チルノおッ！！」

ホル・ホースの強い口調に、チルノはビクツと彼を見る。

「チルノッ！忘れてねえだろ？俺たちの『約束』をよお！！」

「やく…そ…く…？」

ホル・ホースに険しい目付きで睨まれ、チルノは少し萎縮する。



「俺たちがコンビを組んだ時に『約束』しただろっが！？俺たちは……！『最強』のコンビになるってよオッ……！」  
「はっ……！」

「ゼエ ハア な……んで……なんで……」

「……ゲボツ……ゼエ……ゼエ……」

「なんでっ！一発も反撃しないのよっ！？……う……撃てば良いじゃない……！……その、『見えない弾幕』でっ……！」

チルノは時間切れのスペルカードを握り締めて、声を荒げる。涙声で、瞳を潤ませて一人の男を睨み付ける。

「……ぐっ……ゲボツ……！」

男 ホル・ホースは血を吐き出し、ガクリとくずおれる。切り傷だらけの腕で、腹の傷を押さえる。たちまち手のひらが血にまみれる。

「……なんで……かつ……て……！？……」

ホル・ホースはフツと笑い、チルノを見据える。

「そうよっ！……なんであたいを撃たないの！？あたいの弾幕を全部撃ち落とせるんだから、それくらい簡単でしょっ！？」

チルノは悔しさにポロポロと涙を流し、ホル・ホースの目を見つめ返す。

「フツ……バレちゃった……か……」

ホル・ホースは傷だらけの足に力をいれ、震えながらも立ち上がり、チルノの瞳を見つめる。

「おれは……女は撃たねえ……！」

「……ッ……！」

チルノが頬を赤く染める。初めてだったのだ、妖精だからいつも虐

げられ、どうせ復活するからと容赦無く惨殺される自分の身を案じ、情けをかけてくれる者に出会ったのは。そして、自分を自然の権化としてではなく、『女』として扱ってくれる者に出会ったのは。

「なっ…なによッ！手加減してたって言うの！？馬鹿にしないでっ！あたいは『さいきょー』なのよッ！！そのあたいが、あんたみたいなただの外来人に…！！」

気色ばむチルノに、ホル・ホースはフフツと微笑む。

「なっなによッ！！なにがおもしろいのよッ！！」

馬鹿にされたと思い、チルノが怒気を含んだ声をあげる。

「…チルノ…つつつたつけか…？」

「…そ、そうよっ…」

チルノはゴクリと唾を飲む。

「お前…本当に…『最強』…に…成れるぞ…。」

「…え…………？」

チルノはまたも驚く。いくら自分が『最強』を自称しても、誰も彼もが鼻で笑うだけで、本気にしてくれる者などいなかった。そして、それに怒って勝負を挑んでも、返り討ちにされ、満身創痍で倒れ伏す彼女に嘲笑だけ投げ掛けて去っていくのだ。

「ホントに…ホントに、あたいが『さいきょー』だって、そう思っ  
てくれるの…？」

「ああ…ただし、一人では無理だな…。」

「『一人』…で…は…？」

チルノが頭に？を浮かべる。

「だがしかし…『二人』なら…！間違いなく『最強』のコンビになれるぜ…！！」

チルノはホル・ホースを問い詰める。

「どうしたら…あたいは『さいきょー』に成れるの…？」

チルノの視線と、ホル・ホースの視線が、空中で交差する。ホル・ホースが口を開いた。

「おれと…コンビを組めッ…！」

「……………あ…あたいは……………」  
チルノの瞳に、光が宿る。迷いの無い目で見えない弾丸を見据える。

「あたいはッ！！『最強』だッ！！」

チルノの身体から膨大な冷気が発せられ、空気中の水分が凝結する。風速冷却されたライフル弾の表面を、一瞬で完全凍結させ、空気を遮断する。『P・F・G・H』の残骸を操り、弾丸の軌道の上に配置する。銃弾は氷の壁に衝突し、爆発することなく明後日の方向に飛んでいった。

「…や…やった…やったわっ…！！」

チルノが歡喜に身体を震わす。だがその時、

「チルノおッ！！余韻に浸るのはまだ速いぜッ！！」

ホル・ホースが【エンペラー】の銃口を吉影に向ける。

「うおおおおおおおおおッ！！」

【キラークイーン】が氷の残骸を握り、大きく振りかぶる。

「『始末』しろおおお！！【キラークイーン】ッ！！」

氷の塊が豪速球で向かって来る！！

「あの野郎ッ…！！小細工しやがって…！！」

ホル・ホースは【エンペラー】の引き金を引いた。撃つ、撃つ、撃ちまくる。

「離れた場所の氷は余程注意しねーと『気泡』ができちまっつ！あの『爆弾』は凍結させても中に『空気』があるから防ぐことはできねーッ！！」

【エンペラー】の弾丸が吉影の身体を穿つ。しかし、距離が遠すぎるため威力が足りず、肉にめり込むだけだ。

「チルノおッ！！『P・F・G・H』で止め…、ッ！！」

【エンペラー】を乱射しながらチルノに叫んだが、ハッと気付く。

「しまった！さっきライフル弾を凍結させるのに夢中で『P・F・G・H』を追加出来なかった！！あんの悪党ッそれも計算して先に銃弾を…ッ！！」

爆弾は『P・F・G・H』の名残の間をすり抜け、チルノに迫る。だが、彼女の目に怯えは欠片も無かった。

「馬鹿ねっ！あたいの作った氷よ！！自由に解除出来ないでも思っただのっ!?!」

チルノの一睨みで、氷は呆気なく空中で融解した。だが「なんだとおッ!!」

水は無重力空間にあるかのように球体のまま、チルノに向かって飛んで行く。

「甘かったな！我が【キラークイーン】が『爆弾』に変えた物は、すでに『爆弾』として固定されているッ！！融かしたところで四散することは無いッ！！」

全身に銃弾を浴びながらも、吉影が勝ち誇って吠える。爆弾がチルノに迫る。チルノは茫然と目を見開いている。

ホル・ホースの悲痛な叫びが湖上に木霊する。

「チルノおおッ!!」

チルノはただ向かって来る水球を眺め……

ニヤツと悪戯っぽく笑った。

「ッヴァ~~~~カッ!!」

チルノが手のひらを水球に向け、冷気を送り込む。急激に凍らすことで氷内部の密度の差が生じ、亀裂が走る。

「ぶち割れなさいっ!!」

爆弾は空中で粉碎され、バラバラと拡散しチルノの下の水面に落ちていった。

「なっ…ッ!?!」

「どうよっ!!これが『最強』の力よ!!」

チルノは吉影をまた自信に満ちた目で見下ろす。吉影には【エンペラー】の銃弾を弾く力も残されておらず、立っているのがやっとの

ようだった。

「よくやったチルノっ！！もうコイツに力は残ってねえ！俺達の勝ちだー！！」

ドゴオオオオンー！！

「あぐッ…！？」

膝に弾丸を受け、吉影は片膝を着く。

「ぐあッ…！！」

さらに肩に銃弾が命中し、左腕がダラリと垂れる。だが吉影はなおも鋭い目付きで二人を睨み、

「【キラークイーン】！！」

拳銃弾を撃ち出した。

「くどいわっ！！攻撃は何であろうとムダだっということがまだ分からないのっ！？ホントに馬鹿ねっ！！これで終わらせてあげるわ！」  
P・F・G・H『！！』

チルノは再度『P・F・G・H』を発動した。空気が急激に冷却され、氷の壁が展開される。弾丸は氷に反射され、チルノには届かない。

「これで分かったでしょ？あたいとホル・ホースの『P・F・G・H』は『最強』なのよー！！」

チルノが勝ち誇って笑う。だが、吉影の目から光が消えることはなかった。

「発動…したな…？『P・F・G・H』を…」

「ええ、そうよっ！これからもつと弾幕をバラまいてやるから、あなたの弾なんて届かないわよッ！あたいの『P・F・G・H』は、どんな攻撃でも凍りつかせて止められるわ！よくするに、あたいは『最強』なのよー！！」

「フツ…確かに、どんな攻撃も凍らされれば、『無敵』で『最強』だな…、だがッ…！！」

チルノを睨む吉影の瞳は勝利を確信していた。

「それがいいんじゃないか…どんなものでも一瞬で凍らせてくれる

のが良いんじゃないかつ…」

「？」

「爆破しろッ！【キラークイーン】！！」

【キラークイーン】が右手のスイッチを押した。

ボグオオオオオオオ！！

「えっ……！！？」

チルノの真下で、巨大な水柱が立った。チルノは『P・F・G・H』と共に逃げる間も無く呑み込まれ、水柱はチルノの冷気で凍りつく。

（そっそんなっ！？う、動けない……！！）

「どうだ…？いくら氷の壁を作っても…それが自分と密着していれば…！！」

吉影は血を流しながら立ち上がり、【キラークイーン】がライフル弾を構える。

「わたしの『爆弾』は防げまい…！このためだったのだッ！爆弾に変えた氷が砕かれ湖に落ちてても、解除せずに…『匣』の銃弾を撃ち、貴様に『P・F・G・H』を発動させたのはッ…このためだったのだッ！！」

狙いを定めようとして、フンツと鼻で笑う。

「これほど巨大なのなら、外す方が難しいな。」

弾丸を爆弾に変え、発射した。

（ど、どうしよう！？このままだと、弾を避けられない！！でっでも、『P・F・G・H』を解除したら弾を防げないッ！あっああっ…！ど…どうしたら…！！）

自分が氷漬けになりながら、自分に向かって来る弾丸を見る。銃弾は何物の邪魔も受けず、真っ直ぐに突っ込んで来る。

（よっ避けられないっっ！！）

ドグオオオオオオオ！！

「…ぐうつ…」

チルノが氷塊と共に塵も残さず爆破されたのを見届け、吉影は歩き始める。身体中傷だらけだが、チルノの消滅と同時に暖かさが戻ってきたので、戦闘中よりは身体は動きやすい。霧も晴れ、目的地の大きな洋館も見えるようになった。

「くそっ…！まさか妖精ごときにここまで苦戦するとは…！道中で傷を負ってしまったのもマズイ…これから行われる遊技大会が大事だというのに…！」

腹の傷を押さえ、【キラークイーン】に支えられて、顔をあげた時だった。

「あゝあ、負けちまったあ。」

「……！」

いつの間にか湖畔に戻って目の前に立っているホル・ホースに気が付き、身構えるが、ホル・ホースは違う違うと手を振る。

「安心しな、おれももうアンタとやり合うつもりはねーよ。」

彼の手には【皇帝】もリボルバーも握られていない。

「ン？なに？チルノを殺したことを俺が復讐するって思ってたのか？そんなつもりはねーよ。アイツは妖精だ、一晩もすれば復活するからな。」

ホル・ホースは敵意の無い態度で馴れ馴れしく話し掛ける。

「アイツ、馬鹿だと思っただろ？学は無いわ常識は無いわ、ホントーに馬鹿なヤツでよ、俺も作戦とか教えるの苦労したよ。」

ハハハツと笑い、チルノが爆死した辺りに目を向ける。

「でもな、アイツ馬鹿なヤツだけど、ホントーにまっすぐなヤツなんだよなあ…。一生懸命俺の言うこと覚えようとするしよあ、本気で『最強』になろうと、がむしゃらに頑張ってるんだよ…。」

ホル・ホースは優しい口調で続ける。

「だからよ、おれは『コンビ』を組んだんだ、アイツとよあ。アイツを本当に『最強』にしてやりてえし、何より…。」







## 第？話 ？とハジキと？2 (後書き)

### 次回予告

「あなた…【皇帝】でしょう…？今、テーブルに置いたのは…？」  
「ぐッ…ぐぬぬ…ッ…！」

「じゃあ、私は『奴隷』を出させてもらうわ。これで六連勝ねえ。」  
スッ…

「さあ、また血を頂くわよ。人間は全体の三分の一ほど血が抜けたら死ぬって聞いたけど…そろそろ限界じゃないかしら…？」  
腕に刺された針が、血を吸い上げる。

「ぐッ…ああああ…！！」  
テーブルに突っ伏し、耐える。終わると、青白い顔で彼女を睨む。

「何故…だ…？何故…わたしのカードが分かるッ…！」  
彼女は唇に指を当て、優雅に答える。

「何度も言ってるでしょう？私には『運命』が読めるの……そういう能力。言っておくけど、イカサマなんてしてないわよ。悪魔は契約を破れないわ。」

圧倒的な高みから見下すような彼女の態度に、吉影の心は萎縮していく。

(あ…悪魔だ…異能の観察眼…  
悪魔じみてる…あの的中率は…とくに人間にどうにかできる域を超えている…『運命』の流れを読む天才…！)  
ガクリと吉影は項垂れる。

(勝てない…勝てるわけがない！わたしが何のカードを出すのか、全て読まれてしまっているのだから…！！)

ガクガクと肩を震わす。絶望と恐怖に、目尻に涙が浮かぶ。

「おやおや、もうおしまいかい？何よ、ちつとも楽しめなかったじゃない。まあ、諦めるなら私は止めるつもりはないけど…後は、分かっているわね？」

フフツツと彼女は艶やかに笑う。その姿はまさに、夜の女王。彼女の前では人間なぞ、歩き回る陽炎に過ぎないのだ。

（だ…駄目だ…っ！このままでは、全身の血を抜かれて殺される…！だが、一体どうやってっ！？どうすればこの『悪魔』に打ち勝てる！？この『運命』を操る『悪魔』を…、っ……？）

吉影はヒクリ、と頭を動かす。

（待て…『運命』だと…？それが本当なら、もしかしたら…！！）

「…ククツ……」

「…どうした、恐怖で頭がイカれたのかい？」

「…いや…君を打ち負かすちよつとした『秘策』を思いついてしまつてね…」

「…フンツ『秘策』？『秘策』ですって？何をしようが、どんな小細工をしようが、『運命』を味方につけた私に敵うわけがないわっ！もう少し血を抜いて、頭を冷やしてやる必要があるようね？咲夜！早く次の試合を始めなさいっ！」

「かしこまりました。第八回戦、始め！」

（フフっ…何を考えついたか知らないけど…私の『運命』を操る能力に敵うはずがないわ。）

彼女は目の前の人間の周りを流れる『運命』を読み取る。

（『見える』…『見える』わっ！この人間の未来への軌跡が…！！）

カードを出し、捲り、『市民』であることを確認する。それをあと二回繰り返す。

（そしてっ！…ここですっ！！）

『奴隷』のカードを裏向きに出す。

（さあ…沈めてあげるわ…出しなさい！！【皇帝】をっ！！）

吉影が一枚のカードを選び、テーブルに置く。

「オープン！！」

二人同時にカードを捲る。そして……！！

「……うソ……」

吉影の手には、『市民』のカードが握られていた。

「ウソ……ウソよッ！そんなっ、たっ確かに、【皇帝】を出す『運命』が見えたのにッ！！」

「……っ！？」

（お……おかしいわッ！今まさに、『運命』は私が『勝っている』と教えているッ！！一体……どういうことなの……ッ！？）

「……それでは、第3回戦、始めてください。」

「何を言っているの咲夜ッ！？次は9回戦のは……ず……？」

首を傾げているメイドの横のボードには、二回戦までの結果しか記録されていなかった。

「はっ！？」

狼狽えながら時計を見る。

「じ、時間が……一時間……戻っている……ッ！？」

「フッフ、気付いたようだな……？」

吉影はニヤリと笑い彼女を見返す。

「そうだ……今、私が時間を一時間ほど巻き戻した。もっとも……わたしには君のように、消し飛んだ一時間分の記憶は無いがね……そして……ッ！！」

吉影の瞳がキラリと輝く。

「その一時間の『運命』はッ！！既に固定されているッ！もはや貴様が『運命』を読もうとッわたしの行動を読むことはできないッ！！」

「うっっ！で、でもッ……なんであなたは運命通りにならないのよッ！？記憶が無いんでしょ！？」

「フッフ……いいか……良く覚えておけ……それは、わたしが人間だからだッ！！」

「に…人間だから…？それがどうして理由になるのよ！？人間なんてむしろおんなじこと繰り返してるだけじゃないッ！！」

「…そうだ…確かに貴様ら妖怪から見れば、人間はループしているかもしれない…。生まれて生きて、そして死ぬ…！『人』の『夢』と書いて『夢い』…よくぞ言ったものだ…だがッ！いやっ、だからこそッ！！人間は『運命』を…乗り越えることが出来るのだッ！！」

「うっ…うっ…」

彼女は己の強みを破られ、目に涙をためて萎縮してしまっている。もはや夜の女王としての品格は無く、その姿はただの五百歳児。

バアンッ！！

吉影がテーブルに掌を叩き付け、圧倒的な威圧感をはらんで啖呵をきる。

「さあ…どうする吸血鬼…ッ！？わたしは人間賛歌の世界から来た人間だぞ…！？カビの生えた『ラプラスの悪魔』に…気まぐれに跳ね回る『シュレインガーの猫』が捕らえられるかアッ！！！！」

次回！〜吉良吉影は静かに生き延びたい〜

第十話 『賭博黙示録 ヨシカゲ』

乞うご期待！！

ネタバレ

これは嘘予告です

第？話、お楽しみいただけただけでしょうか？面白いと思っただけ  
たなら幸いです。

今回ホル・ホースが使っていた『マンハッタン・トランスファー』  
のDISCは、プッチ神父がジョンガリ・Aを殺害した際にDISC  
化しておいた物が幻想入りしたという設定です。これからも六部  
のスタンドはDISCとして出てくるかもしれませんが、他にも、『  
物のスタンド』は本体が居なくても残りやすいと設定を作っていま  
すので、第四部以外からもスタンドが登場する予定です。

余談ですが、ホル・ホースには『マンハッタン・トランスファー』  
以外にも『チョコレート・デイスコ』を装備させる予定でした。で  
すが、あまりに無敵過ぎて吉影では勝てないことが分かったのでボ  
ツになりました。いつか外伝とかでやってみたいと思います。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n6146y/>

---

～吉良吉影は静かに生き延びたい～

2012年1月3日00時46分発行